宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 168 集

諸　麦　遺　跡

Moromugi Site

一般国道 10 号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

２００８

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、平成17年度に一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した諸麦遺跡では、南九州の弥生時代後期の特徴的な住居跡である花弁状住居跡や周溝状遺構、掘立柱建物跡などの遺構や、鋤先状の口縁や数条の突帯を持つ壺、突帯を持つ中溝式系の甕など弥生時代中期から後期にかけての土器などが確認されました。これらは、当該期の地域間交流の様相を考える上で、良好な資料の蓄積となり、大きな成果がありました。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　清　野　　勉

例　言

1　本書は平成17年度一般国道10号都城道路建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市平塚町2937番地所在の諸麦遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国土交通省宮崎河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成17年７月25日から平成18年２月10日まで行った。

4　現地での実測・写真撮影などの記録は黒木俊彦、日髙広人、丹俊詞が発掘作業員の協力を得て作成した。
　なお、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州に、基準杭設置は株式会社南洲基礎地質コンサルタントに委託した。

5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは黒木が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については赤崎広志氏の協力を得た。

6　本書で使用した第１図「遺跡位置図」は国土地理院発行の５万分の１図を使用した。

7　本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

8　本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、標高は海抜絶対高である。

9　本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。
　SA…竪穴住居跡　　SB…掘立柱建物跡　　SC…土坑　　SL…周溝状遺構

10　本書の執筆は第１章第１節を文化財課主査飯田博之が、その他の執筆･編集は黒木俊彦が行った。

11　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに・・・

挿図目次

第１図　【遺跡位置図　Ｓ＝１／50,000】・・・

第36図　【包含層出土遺物実測図②　S＝1／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第37図　【包含層出土遺物実測図③　S＝1／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第38図　【包含層出土遺物実測図④　S＝1／2　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第39図　【包含層出土遺物実測図⑤　S＝1／2　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第40図　【包含層出土遺物実測図⑥　S＝1／2　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第41図　【包含層出土遺物実測図⑦　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第42図　【包含層出土遺物実測図⑧　S＝1／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第43図　【包含層出土遺物実測図⑨　S＝1／3　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第44図　【包含層出土遺物実測図⑩　S＝1／2　S＝1／3　S＝2／3】・・・・・・・・・・・・ 46

表目次

第１表　【土器観察表１】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第２表　【土器観察表２】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第３表　【土器観察表３】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第４表　【土器観察表４】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第５表　【土器観察表５】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第６表　【土器観察表６】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第７表　【石器計測表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第８表　【鉄器計測表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第９表　【フローテーション炭化物集計表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第10表　【諸麦遺跡　竪穴住居跡一覧表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第11表　【諸麦遺跡　掘立柱建物跡一覧表】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

図版目次

図版１・・ 59
　　諸麦遺跡の炭化材
図版２・・ 63
　　諸麦遺跡の種実Ⅰ
図版３・・ 64
　　諸麦遺跡の種実Ⅱ
図版４・・ 71
　　諸麦遺跡遠景
図版５・・ 72
　　諸麦遺跡全景

図版６・・・

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

平成６年12月に都城志布志道路は、地域高規格道路の計画路線として指定された。都城道路はこの内の一部区間として、物流拠点の向上、工業振興促進等の間接効果と交通混雑の解消が期待されている。

平成15年７月22日、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所において、都城道路１工区の平塚インターから五十町インターまでの２km区間の協議があり、埋蔵文化財調査を平成17年～ 19年度で終了するように要望があった。

平成17年５月10日～ 20日までの間で５日間、県文化財課で確認調査を実施した。境堀遺跡と中原第３遺跡については、路線内に遺構・遺物を確認できなかったが、諸麦遺跡においては、御池ボラ層に掘りこまれた住居跡、周溝状遺構等を確認でき、道路建設予定地内に遺構や遺物を確認した。

確認調査の結果を踏まえ､平成17年５月24日に国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所で国交省、県文化財課、県埋蔵文化財センターの３者で協議を行い、諸麦遺跡の本発掘調査（対象地4,000㎡）を実施することになった。

平成17年５月25日に国土交通省より本発掘調査の見積もり依頼があり、同年６月17日付けで見積もりを回答した。工事通知は平成17年７月22日に受け付け、７月23日付けで発掘調査の回答を行い、本発掘調査の契約を平成17年６月24日付けで締結した。

第２節　調査の組織

諸麦遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

平成17年度　発掘調査

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	宮園　淳一
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　　尊
総務課主幹兼係長	石川　恵史
調査第四係主幹兼係長	近藤　　協
調査第四係　主査（調査担当）	黒木　俊彦
調査第四係　主査（調査担当）	日髙　広人
調査第三係　主事（調査担当）	丹　　俊嗣
事業調整担当　主査	飯田　博之 （文化財課）

平成18 ～ 19年度　整理作業・報告書作成

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	清野　　勉
副　所　長	加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫 （平成18年度）
総務課長	宮越　　尊
総務課総務担当リーダー	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄 （平成19年度）
調査第四担当リーダー	近藤　　協
調査第四担当主査（報告書担当）	黒木　俊彦
事業調整担当　主査	飯田　博之 （文化財課）

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境

諸麦遺跡は、宮崎県都城市平塚町2937番地ほかに所在する。都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東に鰐塚山系、北西に霧島山系をはじめとする山々に囲まれた都城盆地の中央部に位置する。当遺跡は都城市の南西約６km、鹿児島県財部町（現曽於市）との県境に位置し、標高約170mの段丘上の舌状台地縁辺部にあり、北東側には、大淀川へ流れ込む支流を有する。周辺には、縄文から中世にかけての遺構・遺物の出土した遺跡が数多く点在する。

縄文時代の遺跡については、早期の胡麻段遺跡、田谷・尻枝遺跡、平田遺跡、加治屋Ｂ遺跡、星原遺跡がある。前期～中期では星原遺跡が挙げられる。加治屋Ｂ遺跡、星原遺跡では、早期の集石遺構が、田谷・尻枝遺跡では、早期及び中期の陥とし穴が検出されている。また、後期～晩期の遺跡としては、牧ノ原第２遺跡、中尾山・馬渡遺跡、星原遺跡、横市中原遺跡、今房遺跡などがあり、牧ノ原第２遺跡では、後期の竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代では､坂元Ａ遺跡で早期及び中期後半から晩期末にかけての水田遺構が検出されている。また、平田遺跡において中期後半の竪穴住居群からなる集落跡が確認され、坂元Ｂ遺跡、加治屋遺跡、平田遺跡、今房遺跡では、後期～終末期の集落跡も見つかっている。

古墳時代の遺跡としては、中尾遺跡、蓑原遺跡、星原遺跡、横市中原遺跡、鶴喰遺跡などが挙げられる。鶴喰遺跡は、都城市域では初めてのカマドを伴う竪穴住居跡が確認された後期集落遺跡である。

古代の遺跡では、中尾山・馬渡遺跡で平安時代の掘立柱建物跡と墨書土器や青磁など多量の遺物が出土している。肱穴遺跡では、８世紀後半の集落及び平安時代以降の水田跡が確認されている。さらに星原遺跡では、100条を超える畝状遺構が確認されている。

中世の遺跡としては、大型の掘立柱建物跡や回廊状遺構を確認できた鶴喰遺跡が挙げられる。また、正坂原遺跡では、古代から中世にかけて永続的に営まれた集落跡が確認されている。

【参考・引用文献】

宮崎県埋蔵文化財センター　1999『上牧第２遺跡・母智丘原第２遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第18集

宮崎県埋蔵文化財センター　1999『牧ノ原第２遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第19集

都城市教育委員会2000『横市地区遺跡群　肱穴遺跡（１）・今房遺跡・馬渡遺跡』 都城市文化財調査報告書　第50集

宮崎県埋蔵文化財センター　2001『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・蓑原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第42集

都城市教育委員会2001『横市地区遺跡群　馬渡遺跡（第２次調査）・坂元Ａ遺跡』 都城市文化財調査報告書　第55集

都城市教育委員会2002『横市地区遺跡群　江内谷遺跡・坂元Ｂ遺跡・加治屋Ｂ（第１次調査）遺跡』 都城市文化財調査報告書　第58集

都城市教育委員会2003『横市地区遺跡群　加治屋Ｂ遺跡（第２次調査）・星原遺跡』 都城市文化財調査報告書　第60集

宮崎県埋蔵文化財センター　2004『宇都第３遺跡・横市中原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第85集

都城市教育委員会2005『横市地区遺跡群　平田遺跡Ａ地点・Ｂ地点・Ｃ地点』 都城市文化財調査報告書　第68集

都城市教育委員会2006『坂元Ａ遺跡・坂元Ｂ遺跡』 都城市文化財調査報告書　第71集

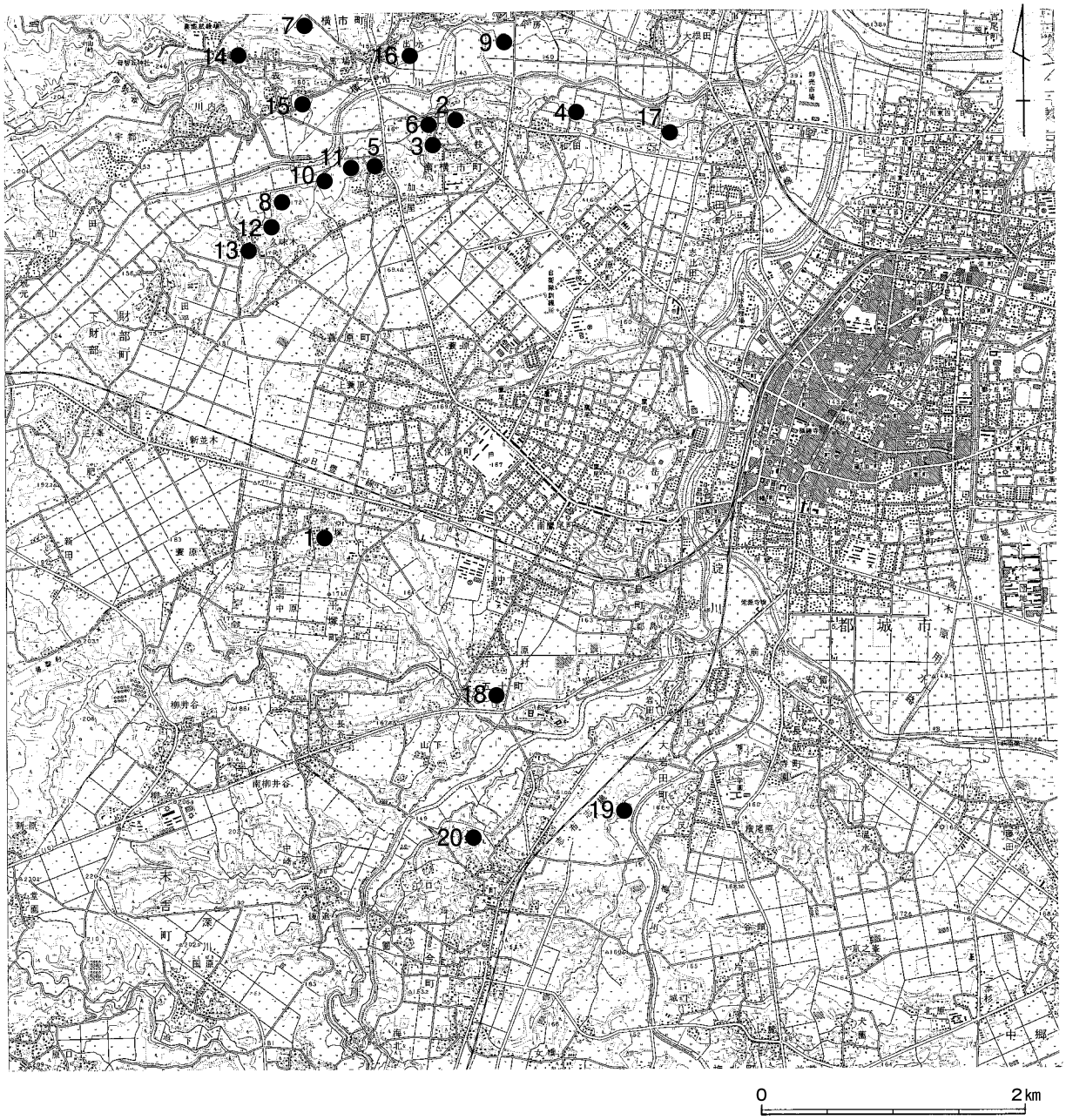
都城市教育委員会2007『鶴喰遺跡（中世編）』 都城市文化財調査報告書　第79集

都城市教育委員会2007『今房遺跡』 都城市文化財調査報告書　第80集

都城市教育委員会2007『加治屋Ｂ遺跡（縄文時代・弥生時代編）』 都城市文化財調査報告書　第81集

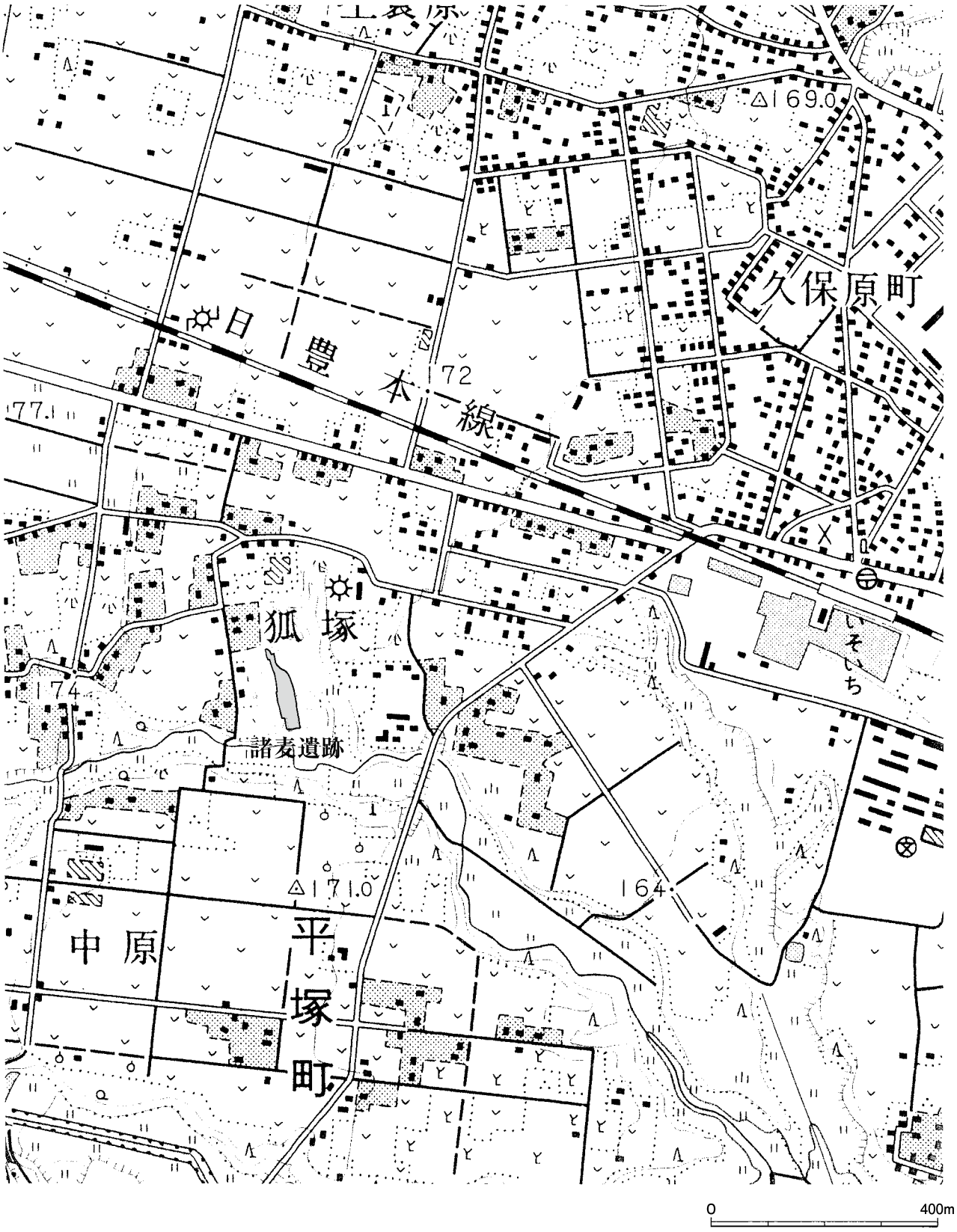
都城市教育委員会2007『星原遺跡』 都城市文化財調査報告書　第72集

宮崎県埋蔵文化財センター　2007『平田遺跡Ｄ地点・Ｅ地点』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第160集



1　**諸麦遺跡**	2　胡麻段遺跡	3　田谷・尻枝遺跡	4　平田遺跡
5　加治屋Ｂ遺跡	6　星原遺跡	7　牧ノ原第２遺跡	8　中尾山・馬渡遺跡
9　今房遺跡	10　坂元Ａ遺跡	11　坂元Ｂ遺跡	12　中尾遺跡
13　蓑原遺跡	14　横市中原遺跡	15　鶴喰遺跡	16　肘穴遺跡
17　正坂原遺跡	18　油田遺跡	19　大岩田上村遺跡	20　筆無遺跡

第１図　【遺跡位置図　Ｓ＝１／50,000】



第２図　【遺跡周辺図　Ｓ＝１／10,000】

第２節　調査の経過

調査着手時点では、調査区は畑として利用されており、南北に細長い地形である。北側は高低差が約20m落ち込む谷地となっており、湧水地でもあった。南側も谷地で、水田として利用されていた。

調査は平成17年７月25日から平成18年２月10日にかけて行った。排土の関係上、調査を北側半分と南側半分に分けて行った。

まず、重機にて北側表土の掘削作業から始めた。また、第Ⅱ層が桜島文明軽石層であるためこの層も含めて除去することにした。第Ⅲ層は包含層で、重機による表土剥ぎはこの上面でそろえることを念頭において行った。また、重機による表土剥ぎでは遺構検出が不可能であることから、第Ⅲ層、第Ⅳ層は、人力によって包含層掘り下げを行うこととした。第Ⅲ層は、後述のように黒褐色土層であり、遺物の出土は確認できたものの、遺構については検出できなかった。第Ⅳ層の上層でも遺構の検出は困難だったが、第Ⅳ層の下層になると褐色土層に御池軽石層が混入してきており、遺構の検出が可能となった。

北側の調査では、遺構として、弥生時代の花弁状住居跡４軒、方形の竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡４棟、時期不明の土坑２基を検出した。縄文時代、古墳時代以降の遺構については確認できなかった。遺物は、壺や甕など弥生土器（中期～後期）や磨製石鏃、磨石、敲石などが遺構から出土した。包含層からは石庖丁、縄文土器（後期、晩期）、中世の白磁や青磁，擂鉢などが出土した。

北側の調査後、委託業者による空撮を行い、その後、南側の調査に入った。南側も北側同様に重機による表土剥ぎを行い、包含層掘り下げ作業を行った。南側調査では、弥生時代の周溝状遺構２基、花弁状住居跡２軒、方形の竪穴住居跡４軒、時期不明の掘立柱建物跡１棟を検出した。縄文時代、古墳時代以降の遺構については北側同様確認できなかった。出土した遺物は北側調査と同様、弥生土器を中心とするものである。

遺構実測に併行して、鬼界アカホヤ火山灰下層の遺構検出を行うためトレンチを数箇所入れたが、遺構は検出されず、遺物も確認できなかった。

第３節　基本層序

諸麦遺跡は調査区が南北に細長い地形であるが、調査区中央部付近の標高が高く、南北へ各々向かうにしたがって緩やかに傾斜していく地形である。基本的な堆積についてはどの地点でもほぼ同じである。鬼界アカホヤ火山灰層も縄文時代遺構精査の際に確認したが、40cm前後の層厚で堆積していた。

第Ⅰ層は表土である。該地はおもに畑地で一部竹林であった。

第Ⅱ層は、桜島文明軽石層（1471年降灰、通称文明ボラ）で、層厚約５～10cmであり、比較的良好に残存していた。

第Ⅲ層は黒褐色土層であり、第Ⅳ層と比べると、比較的やわらかく、ややしまりがある。遺物包含層であり、中世の土師器（Ⅲ）、白磁、青磁、擂鉢、近世の碗などが出土している。また、同じ層から弥生時代中期後半から後期初頭の弥生土器（甕、壺）が出土している。

基本層序	
第Ⅰ層	表土
第Ⅱ層	桜島文明軽石層
第Ⅲ層	黒褐色土層
第Ⅳa層	褐色土層：（御池軽石１～２％含む。）
第Ⅳb層	（御池軽石２～５％含む。）
第Ⅴ層	霧島御池軽石層
第Ⅵ層	黒色土層
第Ⅶ層	鬼界アカホヤ火山灰層
第Ⅷ層	暗褐色土層

第Ⅳ層は、褐色土層である。Ⅳa層はややしまりがあり、第Ⅴ層御池軽石の小粒を少量含む。Ⅳb層は、Ⅳa層よりしまりが強くなり、御池軽石もやや多く混じるようになる。

第Ⅳ層は遺物包含層で、弥生時代中期後半から後期初頭の弥生土器（甕、壺）や石器（石庖丁）などが出土している。この層下部から第Ⅴ層上面で遺構検出を行っている。

第Ⅴ層は霧島御池軽石層（約4,600年前降下、通称御池ボラ）である。都北地方の調査におけるひとつの示準となる。吸水性が高くしまりがないため、もろく崩れやすい。本遺跡の調査においては遺構検出面のめやすとしている。本遺跡では、表土からの深さ約1.0 ～ 1.2mで確認できた。層厚は約0.5mを測る。

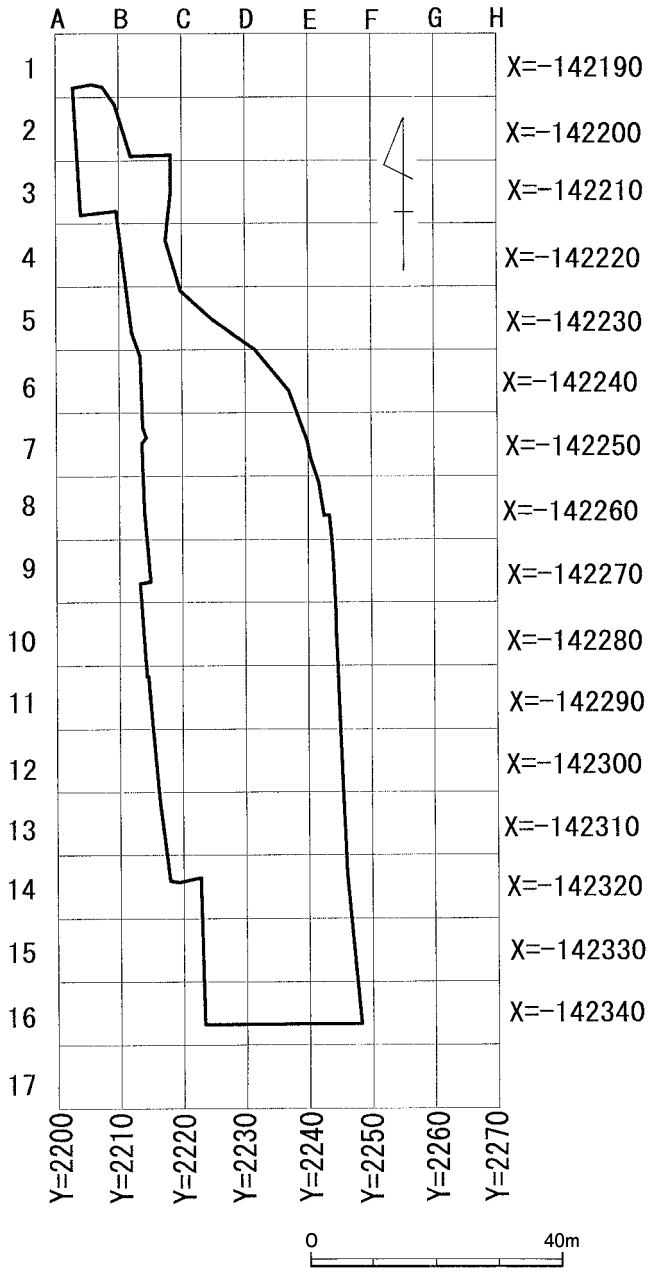
第Ⅵ層は黒色土層である。縄文時代前期から中期中頃の時期と考えられる。トレンチによると、遺物の確認はできなかった。層厚約0.4 ～ 0.6mを測る。

第Ⅶ層は鬼界アカホヤ火山灰層である。約7,300年前に降灰した火山灰で層厚約0.5mを測る。本遺跡の調査では、この面までの調査は行っていない。

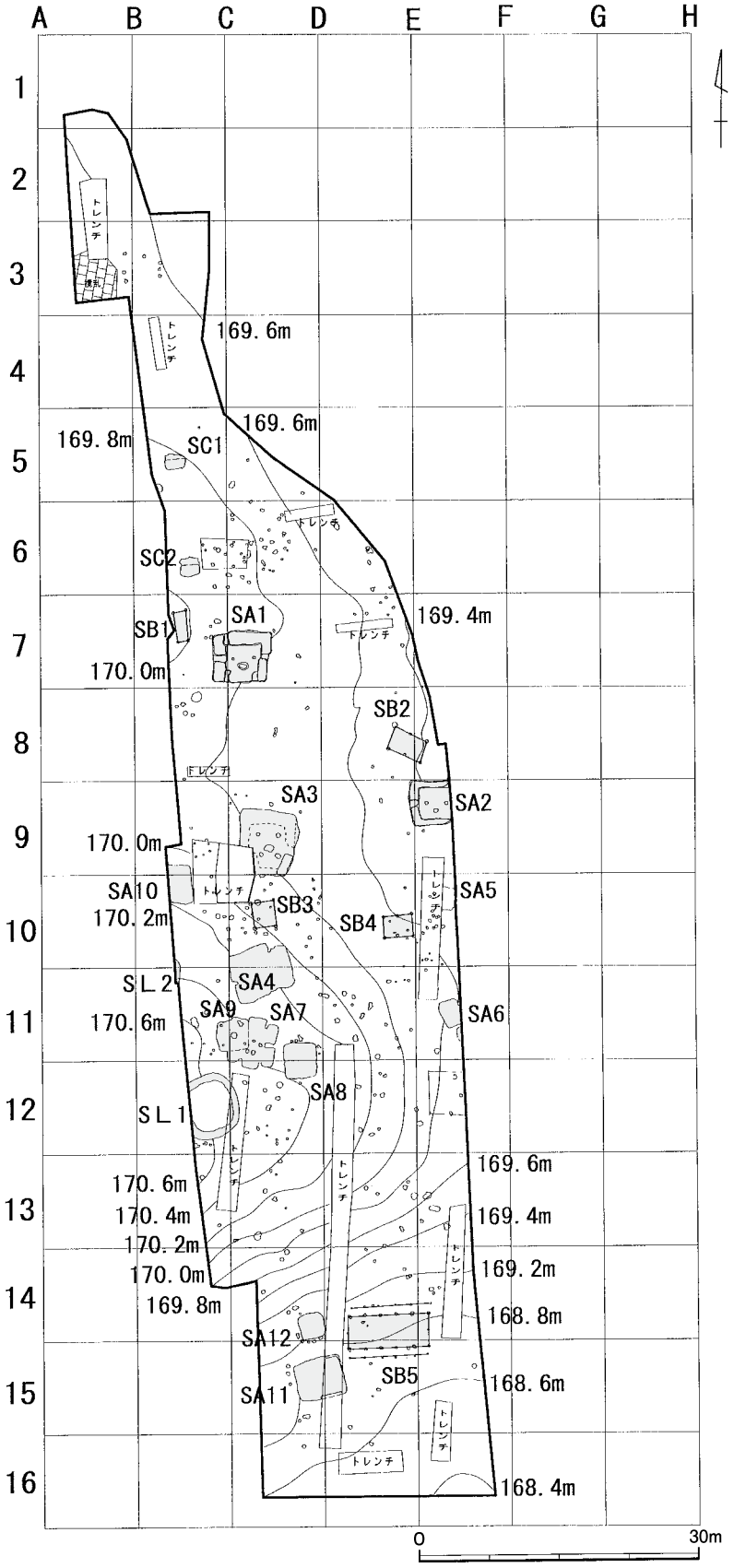
また、現地での記録図作成のため、国土座標（ＸＹ座標）に準じた10m単位のグリッドを設定した。（第３図）

さらにこのグリッドを利用して、南北方向は、北から南へ１～17、東西方向は西から東へＡ～Ｈに区画し、この２つの組み合わせで区画（例えば、「Ｂ－３グリッド」･「Ｅ－５グリッド」など）を設定した。

以後の文章にはこの区画を用いることとする。



第３図　【グリッド配置図　Ｓ＝１／ 1,200】



第４図　【遺構分布図　Ｓ＝１／700】

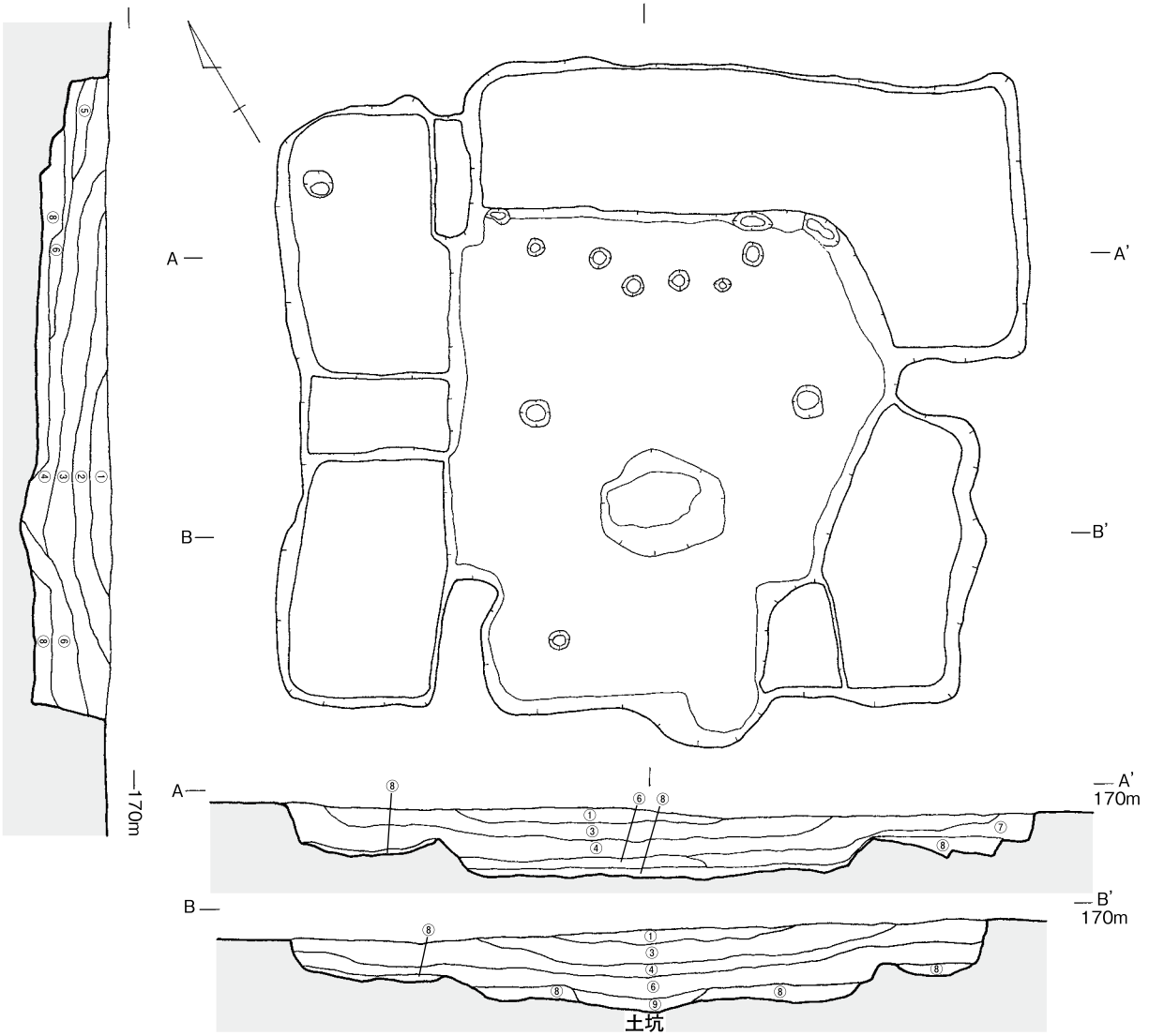
第Ⅲ章　調査の記録

第１節　遺構及び遺構出土の遺物

（１）　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（SA1）と出土遺物

SA1は、調査区中央から約30m北側のＣ－３グリッドに位置し、総床面積約30㎡である。長辺約6.3m、短辺約5.5m、深さ約0.6m ～ 0.7mの方形プランを基調とし、突出した壁で間仕切られた４箇所の空間と主柱穴２穴を有する花弁状住居である。突出壁は、北側１箇所、南側に１箇所、東側に１箇所、西側に１箇所築かれている。北側の突出壁は床面からの現高約0.4mで、北西隅より約1.2mの位置に築かれ、南へ向けて約1.2m突出している。この壁から北東隅、東の壁につながる約7.0㎡のL字状ベッド状遺構を残す。中央床面との高低差は約0.1 ～ 0.2mである。南側の突出壁は、北側の突出壁と向き合うような位置に対照的



【SA 1】
①黒色土（7.5YR2 ／ 1）やわらかく、もろい。径１～３mm 大の御池軽石を少量含む。
②黒色土（7.5YR2 ／ 1）①層とほぼ同じであるが、やや明るく御池軽石の量が多い。
③黒褐色土（7.5YR3 ／ 2）しまりがあり硬い。径１～５mm 大の御池軽石を多量に含む。非常に硬い。
④黒褐色土（7.5YR3 ／ 2）③層とほぼ同じだが、しまりが弱くやや柔らかくなる。
⑤黒褐色土（7.5YR3 ／ 1）③、④とほぼ同じであるが、③、④よりやや暗く、非常に硬い。
⑥黒褐色土（7.5YR3 ／ 2）⑤層とほぼ同じであるが、やや暗い。
⑦黒褐色土（7.5YR3 ／ 2）⑥層とほぼ同じであるが、やや柔らかい。
⑧黒褐色土（7.5YR3 ／ 1）径１～５mm 大の御池軽石を含み硬くしまる。貼床である。
⑨黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）しまりがややあるが柔らかく、径１～３mm 大の御池軽石を含む。

第５図　【１号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】

に存在し、床面からの現高約0.3mで、北へ向けて約1.1m突出する。この壁と西側の壁によって仕切られた空間の床面積は約2.0㎡である。西側の突出壁は住居西側一辺のほぼ中央に位置し、床面からの現高約0.4m、東へ向けて約1.2m突出する。この壁と北側の壁によって仕切られた空間の床面積は約2.4㎡である。南の壁から東にかけては、明瞭なベッド状遺構が確認できなかった。東の突出壁は、住居東側一辺のほぼ中央に位置し、床面からの現高約0.25mで約1.1m突出する。この壁に仕切られた空間の床面積は、南側が約1.4㎡である。主柱穴は、径約0.26 ～ 0.28m、深さ約0.29 ～ 0.4mで東西方向に設けられ、主柱間距離は約2.2mを測る。

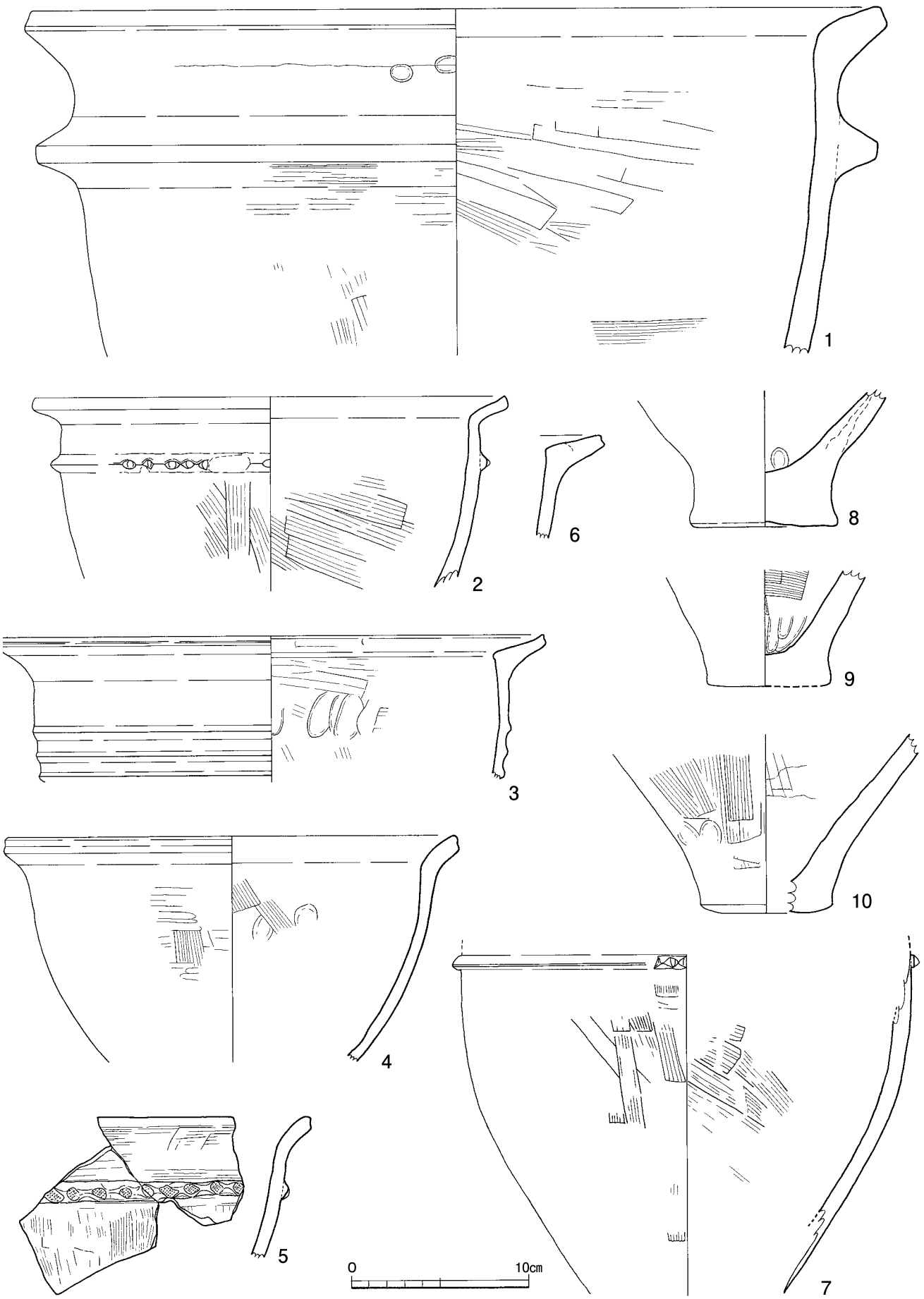
なお、床面のほぼ中央に長径約１m、短径約0.9m、深さ約0.12 ～ 0.15mの落ち込みがある。用途は不明であり、焼土等認められなかった。

遺物は第６、７、８図に示している。１～12は甕である。１は中型から大型に類すると考えられる。口縁直下の胴部に台形状の突帯を一条貼り付け、口縁部が「く」の字状に外反する。２、５は口縁直下の胴部に刻目突帯を一条貼り付ける。５は刻目に布目痕が残る。いずれも口縁部は「く」の字状に外反するが、５は緩やかである。２は内外面にハケ目が施される。いずれも中溝式系の甕である。なお、２はSA10出土の土器片と接合している。３は頸部下に三条の突帯を貼り付ける。山之口式の甕である。口縁部は「く」の字状に外反し端部は凹線状にくぼむ。４は突帯を持たず、口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し、端部は凹線状にくぼむ。なお、４はSA3出土の土器片と接合している。６は山之口式の甕の口縁部で「く」の字状に外反し、端部は凹線状にくぼむ。７は頸部から底部付近である。頸部下に刻目突帯を貼り付けており、胴部には煤の付着が見られる。内外面にハケ目の調整が認められる。なお、SA10出土の土器片と接合している。８～10は底部である。８は、わずかに上げ底で底部端部がやや広がる。９は内面に指オサエやハケ目が認められ、外面は風化が著しい。10は外面に縦位のハケ目が鮮明に施されている。11、12は、中溝式系の甕で、刻目突帯を一条貼り付け、「く」の字状に外反する口縁部をもつ。内外面にハケ目の調整が認められる。12は、内面の頸部に強いハケ目が横方向に入る。なお、11、12ともに、SA10出土の土器片と接合している。13は、胴部から底部付近である。内外面にハケ目の調整が認められる。

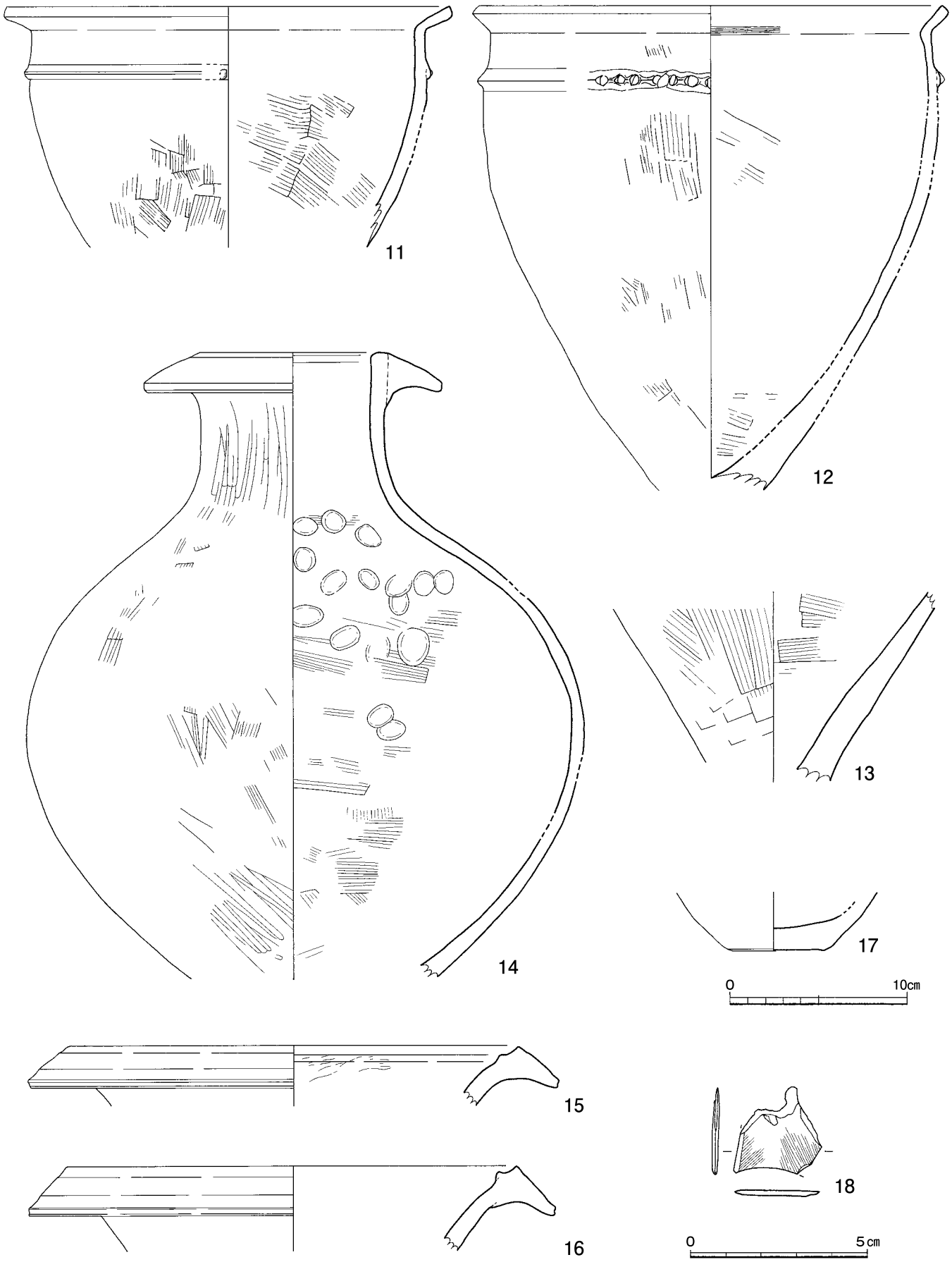
14 ～ 17は壺である。14は、胴部中央部に最大径があり、頸部付近からほぼ直行して口縁部となる。口縁部は下がり気味で台形状の突帯を貼り付ける。内面に指頭痕が、外面にナデの調整がみられる。15、16は口縁部である。内面に突帯を一条貼り付け、貼り付けによって形成された口縁部は下方に下がる。端部は凹線状にくぼむ。その形状から同一個体の可能性が高い。17は、平底を呈する底部で、緩やかに立ち上がる。18は石鏃の破片である。19は磨石である。遺存した部分のみで約4kgをこえる。表面に磨り部分がみられるが、裏面は、石が割れた状態のため確認できない。20は、砥石・敲石である。右側面は砥面として使用した痕が溝となって残る。６面を砥面として使用している。底面には敲打痕を残す。

２号竪穴住居跡（SA2）と出土遺物

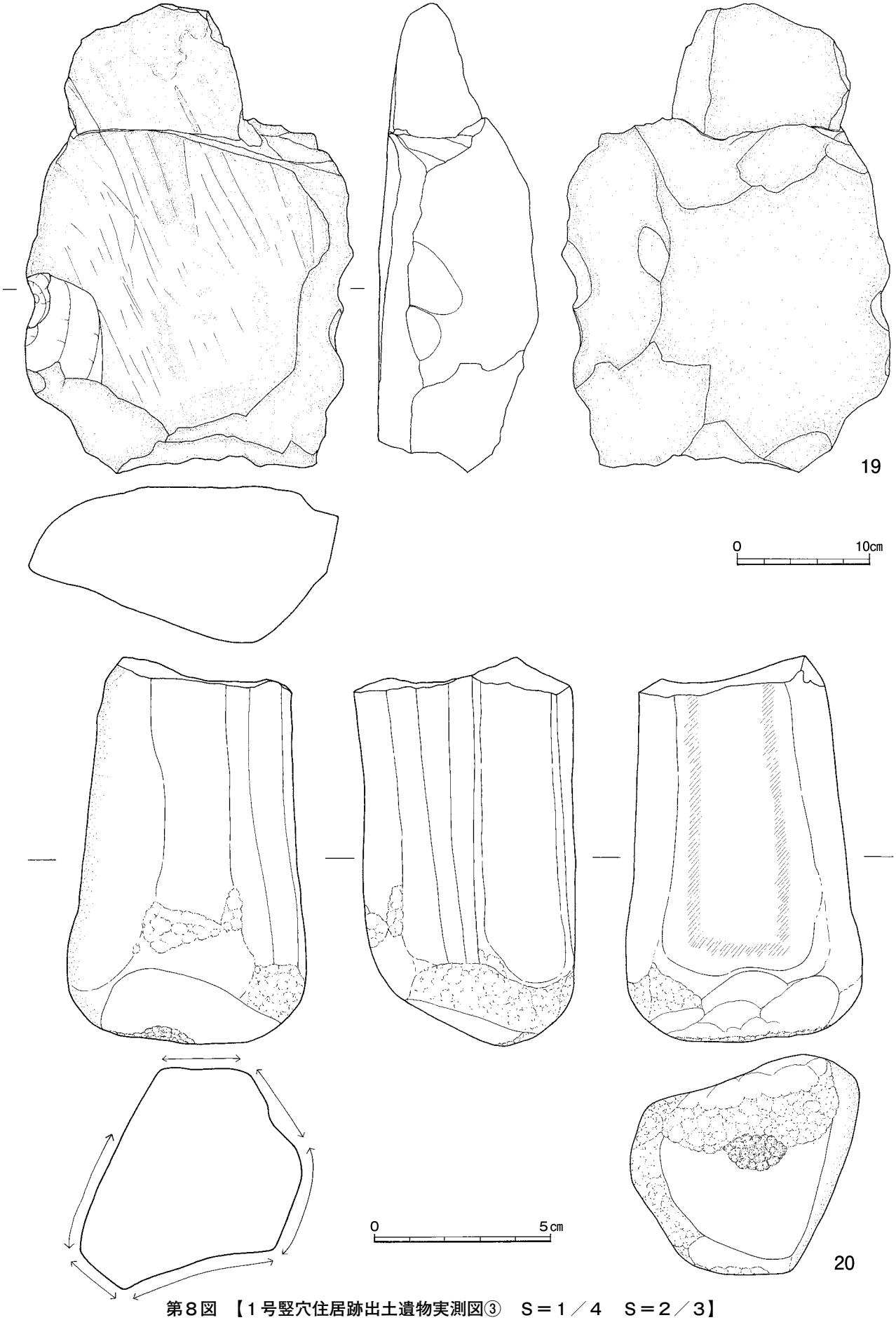
SA2は、調査区中央から約20m北側のＥ－９グリッドにあり、調査区東側壁面に接して、一部が調査区外に伸びる。現状の総床面積約19㎡で、長辺約5.0m、短辺約4.4m、深さ約0.3m ～ 0.5mの方形プランを基調とし、突出した壁で間仕切られた2箇所の空間と主柱穴2穴を有する花弁状住居である。突出壁は、西側に１箇所築かれている。突出壁は床面からの現高約0.3mで、北西隅より約2.0mの位置（辺のほぼ中央部）に築かれ、東側に向けて約0.4m突出している。この壁から北西隅を経て調査区東壁につながる約3.6㎡のL



第６図　【１号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】



第７図　【１号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３　18：Ｓ＝２／３】



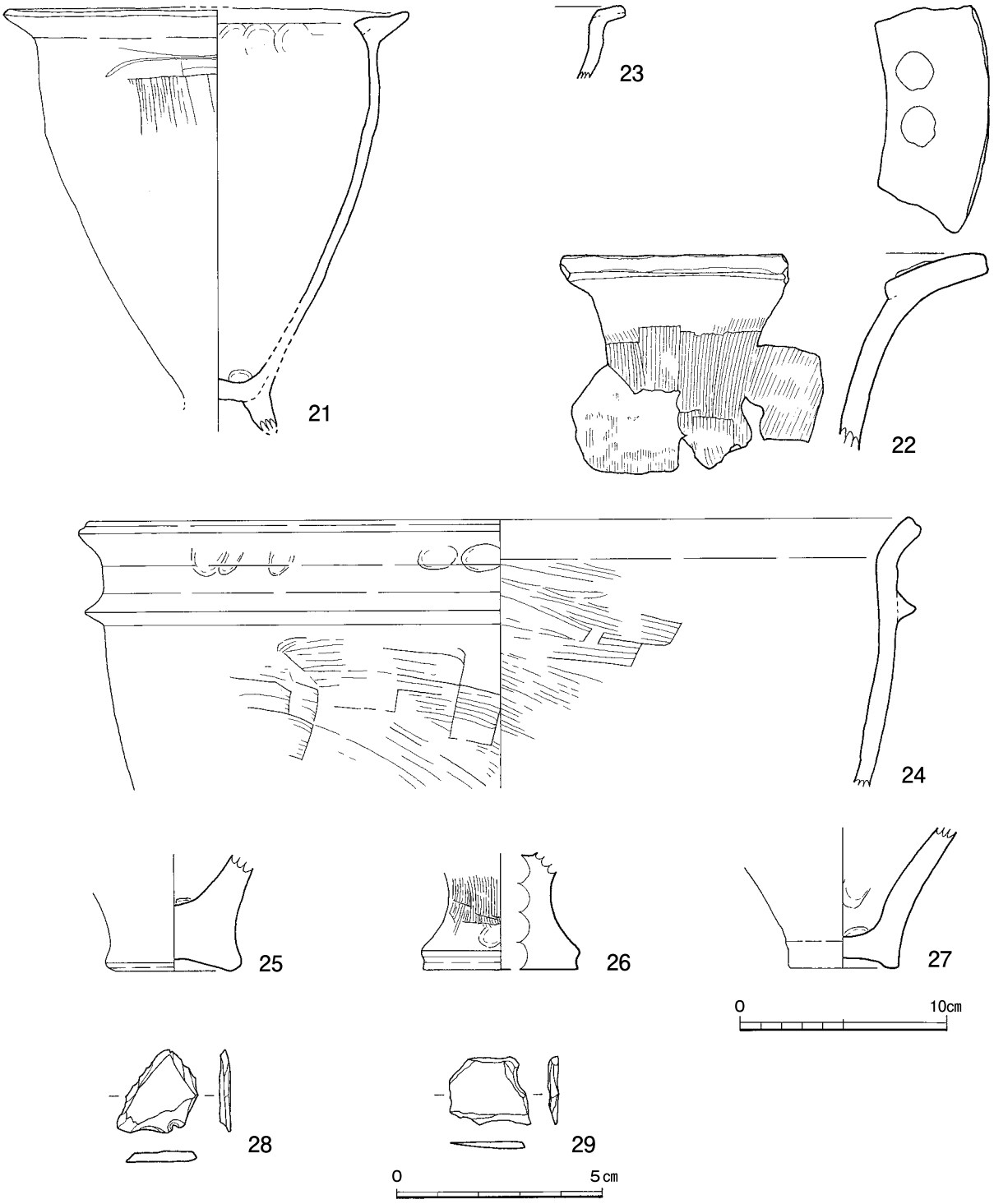
第８図　【１号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝１／４　Ｓ＝２／３】

字状ベッド状遺構を残す。中央床面との高低差は約0.07 ～ 0.17mである。また、南西隅を経て調査区東壁につながる約3.0㎡のL字状ベッド状遺構を残す。中央床面との高低差は約0.16 ～ 0.29mである。主柱穴は、２穴で東西方向に設けられ、西側主柱穴が径約0.4 ～ 0.48m、深さ約0.46m、東側主柱穴が径約0.28 ～ 0.30m、深さが約0.6mで主柱間距離は約2.3mを測る。

遺物は第10図に示している。21、23 ～ 27は甕である。21は黒髪式系の甕で口縁部が大きく内傾したのち外反する。端部は上向きで、丸みを帯びる。胴部はさほど張らず、底部は端部が欠損しているが、外方に向き上げ底となる。22は壺の鋤先状口縁部である。径約1.0cm程度の円形浮文を２個つけて大きく外反する。縦位のハケ目が施される。23は、口縁部で緩やかに逆L字状となる。口唇部は丸みを帯びる。24は、三角形の突帯を貼り付け、「く」の字状の口縁部をもつ。内外面にナデ調整や指頭痕がみられる。SA4、SA6、SA10出土の遺物と接合している。25、26、27は甕の底部である。25は上げ底で器壁がやや厚い。26は平底で、端部に凹線が入り、縦位のハケ目が入る。27は上げ底で端部が外に広がり、やや緩やかに立ち上がる。28は緑色頁岩製、29は頁岩製の剥片である。

【SA ２】
①黒色土（10YR2 ／ 2）やわらかく、粘性あり。径２～５mm 大の御池軽石を約 10%程度含む。
②黒色土（10YR2 ／ 2）粘性がややあり、硬い。径２～５mm 大の御池軽石を約 15%程度含む。
③黒色土（10YR2 ／ 2）しまりがあり、②よりやや硬い。径１～２mm 大の御池軽石を約 20%程度含む。
④黒褐色土（10YR2 ／ 3）しまりがあり硬い。径１～２mm 大の御池軽石を約 20%含む。
⑤黒色土（10YR2 ／ 2）③よりしまりがあり、硬い。径１～２mm 大の御池軽石を約 20%含む。
⑥黒色土（10YR2 ／ 3） 粘性があり、やや柔らかい。径２～５mm 大の御池軽石を約 20%含む。白色粒多い。

第９図 【２号竪穴住居跡実測図 S＝１／60】



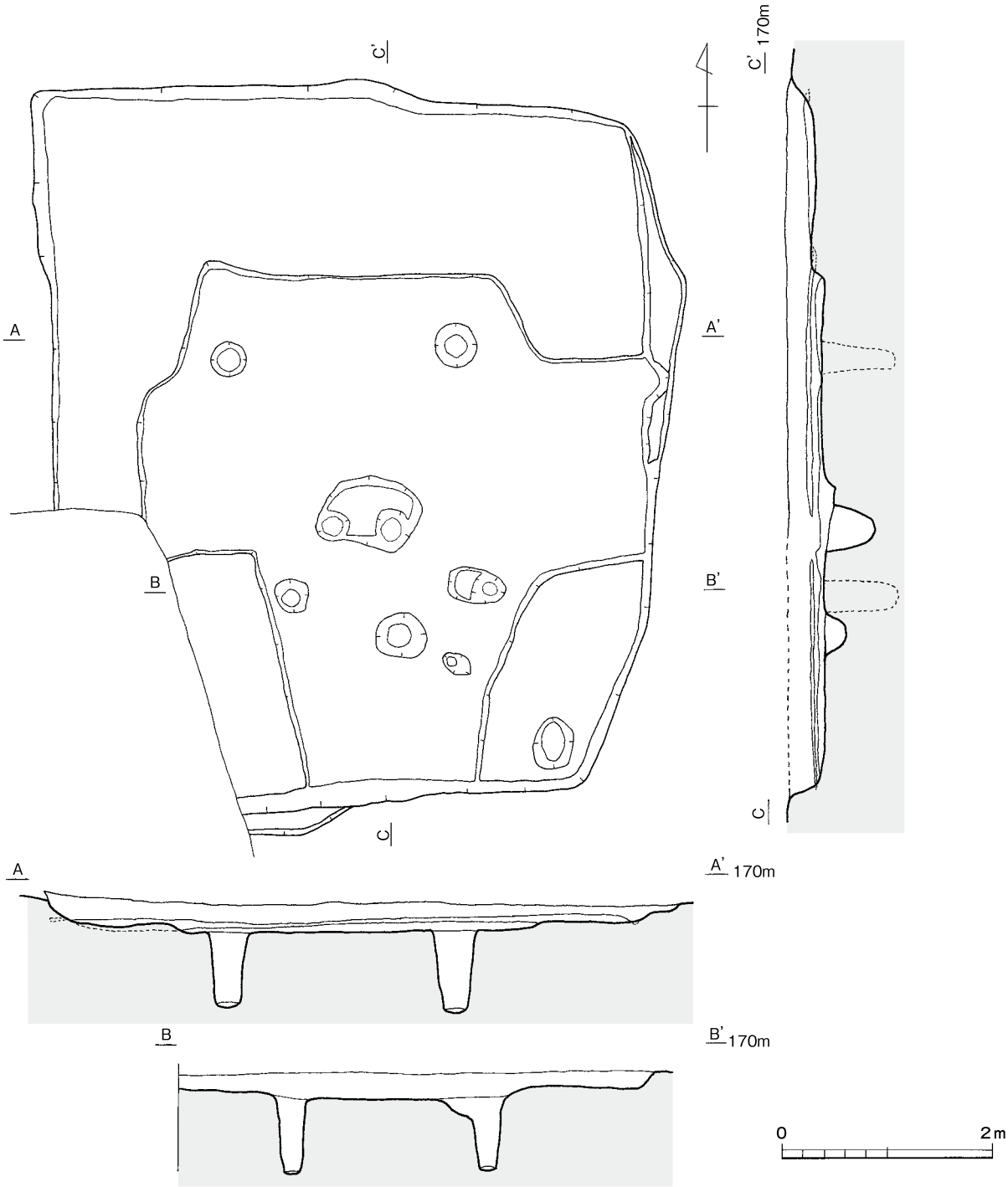
第10図　【２号竪穴住居跡出土遺物実測図　Ｓ＝１／３　28、29：Ｓ＝２／３】

３号竪穴住居跡（SA3）と出土遺物

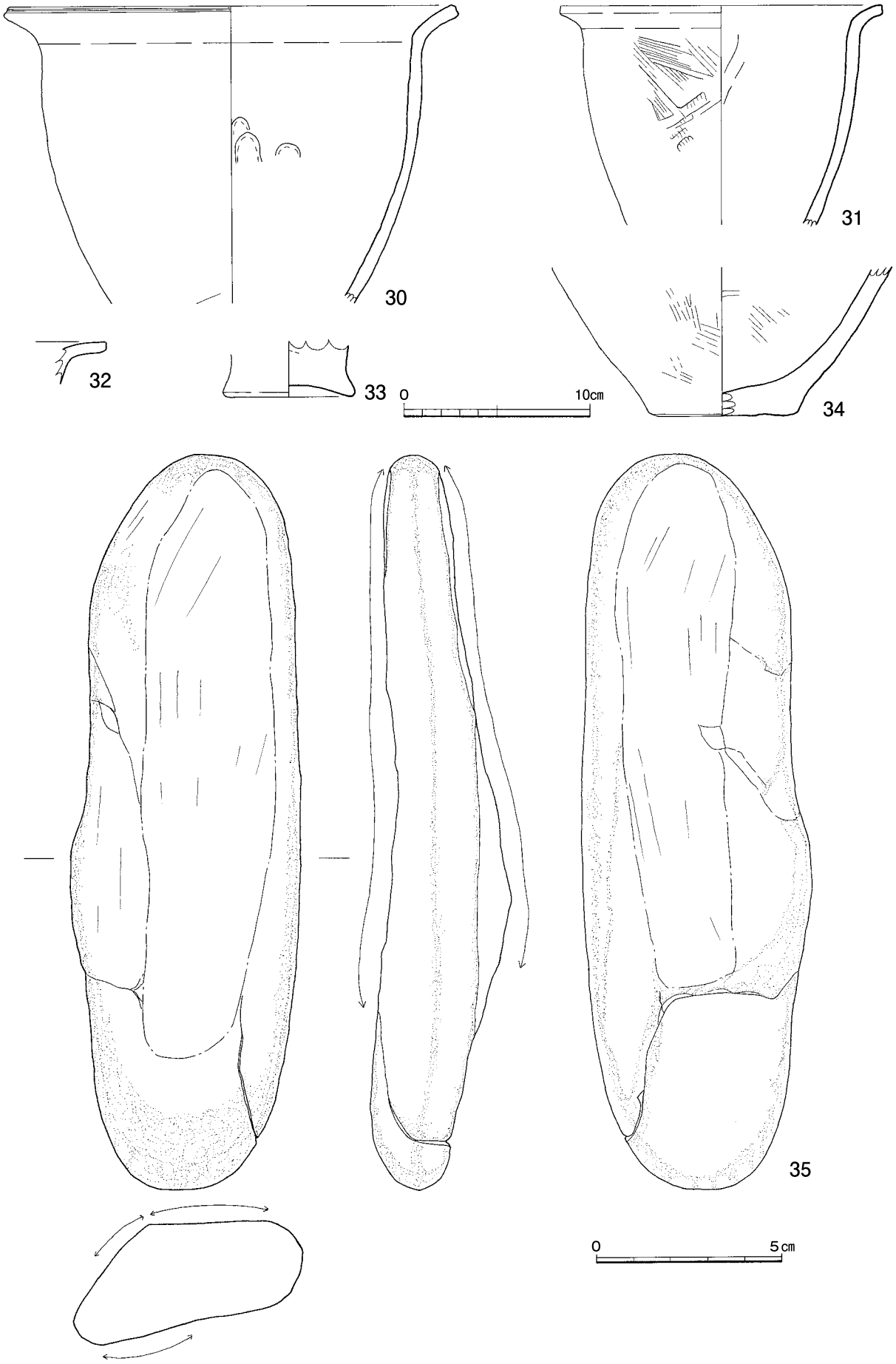
SA3は、調査区Ｃ－９グリッドに位置し、長辺約7.1m、短辺約6.1m、深さ約0.19～0.35mの方形プランを基調とする総床面積約34.5㎡の竪穴住居跡である。主柱穴は４穴である。南西隅がトレンチにより切られ全容は明らかではないが、ベッド状遺構が顕著に残されている。南西隅のベッド状遺構は、面積1.68㎡（トレンチ部分含まず）でトレンチ部分にも残されていたものと考えられる。中央床面との高低差は約0.12m

である。北側のベッド状遺構は、南西隅から約0.8m ～ 1.4mの幅で「コ」の字型でもうけられ、北東隅を経て、東側中央部約2.0mのところまで続いている。面積は約12.7㎡で、床面からの高さは、約0.06 ～ 0.12mである。主柱穴は４穴あり、径約0.26 ～ 0.4m、深さ約0.29 ～ 0.77m、主柱間距離は、南側東西が約1.8m、北側東西が約2.1mを測る。ベッド状遺構からの距離は約0.08 ～ 0.7mである。

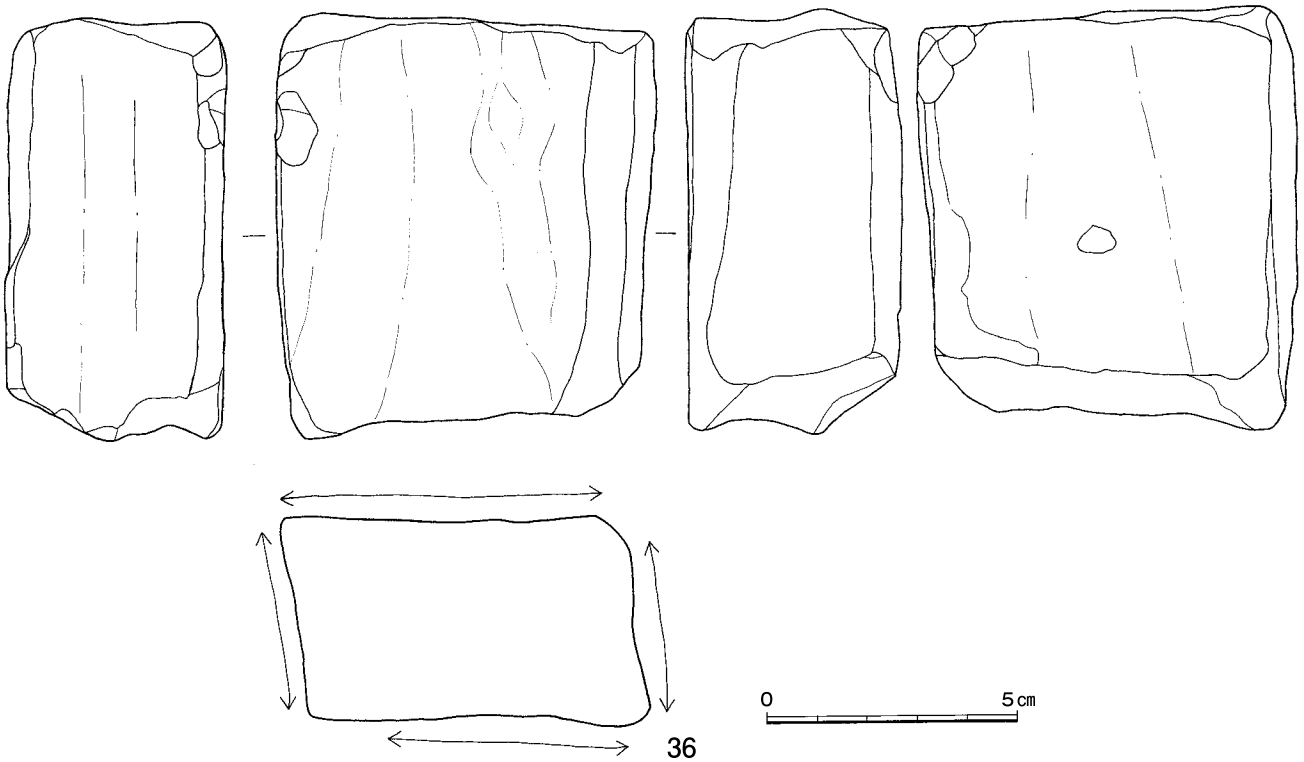
遺物は第12図に示している。30 ～ 33は、甕である。30､31は｢く｣の字状の口縁を呈し､緩やかに外反する。胴部はわずかに張る程度である。30はSA4出土の土器片と接合している。32は、逆Ｌ字状に外反する口縁部をもつ。33は上げ底となる底部で、端部は外を向く。34は壺の底部である。平底を呈し、内外面にナデ調整が入る。35、36は砥石で、いずれも石材は砂岩である。35は表面、左側面、裏面を使用している。36は、全面を砥面として使用している。



第11図　【３号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】



第12図　【３号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３　Ｓ＝２／３】

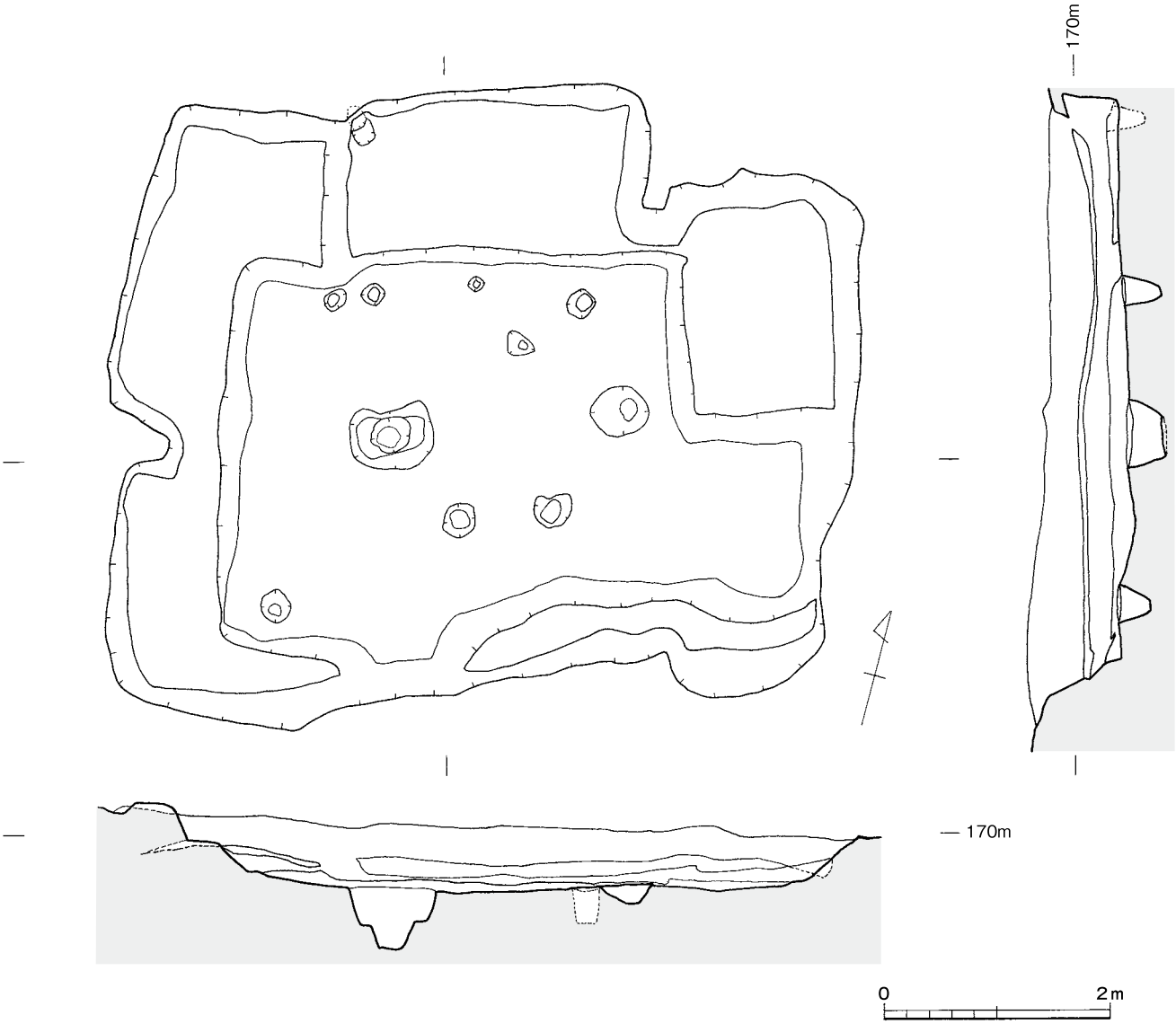


第13図　【３号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝２／３】

４号竪穴住居跡（SA4）と出土遺物

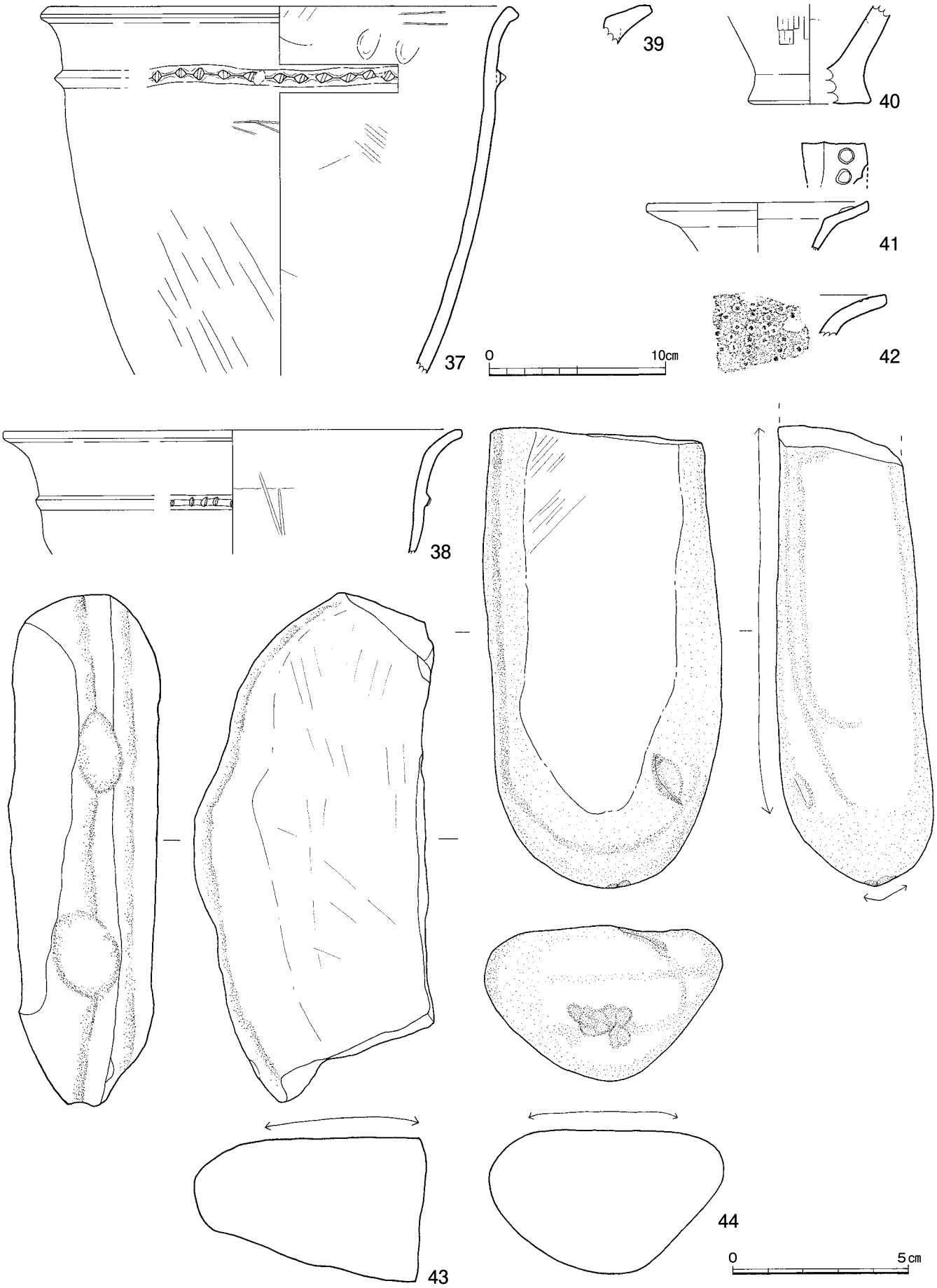
SA4は、調査区中央Ｃ－10、Ｃ－11グリッドに位置する。長辺約6.7m、短辺約5.8m、深さ約0.46 ～ 0.67mの方形プランを基調とし、突出壁を２箇所、主柱穴を２穴有する花弁状住居である。総床面積は約31.7㎡である。突出壁は西側、北側に各々一箇所ある。西側の突出壁は床面からの現高約0.3mで、北西隅より約2.3mの位置に築かれ、東へ向けて約0.7m突出している。この壁を有するベッド状遺構の床面積は約4.25㎡で、中央床面からの比高は約0.3 ～ 0.42mである。北側の突出壁は、北東隅より約1.4m西の位置に設けられ南へ向けて約0.2 ～ 0.8m突出する。中央床面からの比高約0.48m。この壁を有するベッド状遺構の床面積は、約5.37㎡で、中央床面からの高さは約0.1 ～ 0.2mである。主柱穴は、径約0.44 ～ 0.7mで床面からの深さは約0.2 ～ 0.55mである。主柱間距離は約2.0mを測る。この住居の北側ベッド状遺構付近で磨製石鏃やチャートの剥片が出土していることから、作業場としての役割を果たしていた可能性が考えられる。

遺物は、第15図に示している。37 ～ 40は甕である。37は刻目突帯を貼り付け、緩やかな「く」の字状口縁をもつ。口縁端部は平坦である。38は37に比べ外反がやや強いが形態的には同じく中溝式系の甕である。39は山之口式系の甕の口縁部である。口縁端部が上向きとなる。40は底部である。端部が外に広がり、平底を呈す。外面にハケ目を施す。41、42は壺。41は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、円形浮文を施す。42は口縁部のみで、大きく外反し、端部はわずかに丸みを帯びる。43は砂岩製で、表面を砥石として使用する。44は砂岩製の砥石、敲石である。上面を砥石に、下端面を敲面として使用する。45は砂岩製の砥石である。表、裏の２面を使用する。表面はわずかながら溝面ができている。46は砂岩製で磨石としての使用面が残る。47は砂岩製の磨石、敲石である。表面を磨面、上下面を敲面として使用する。48、49はサヌカイト製の打製石鏃である。50 ～ 55は頁岩製の磨製石鏃である。その他の住居と比べると、SA4

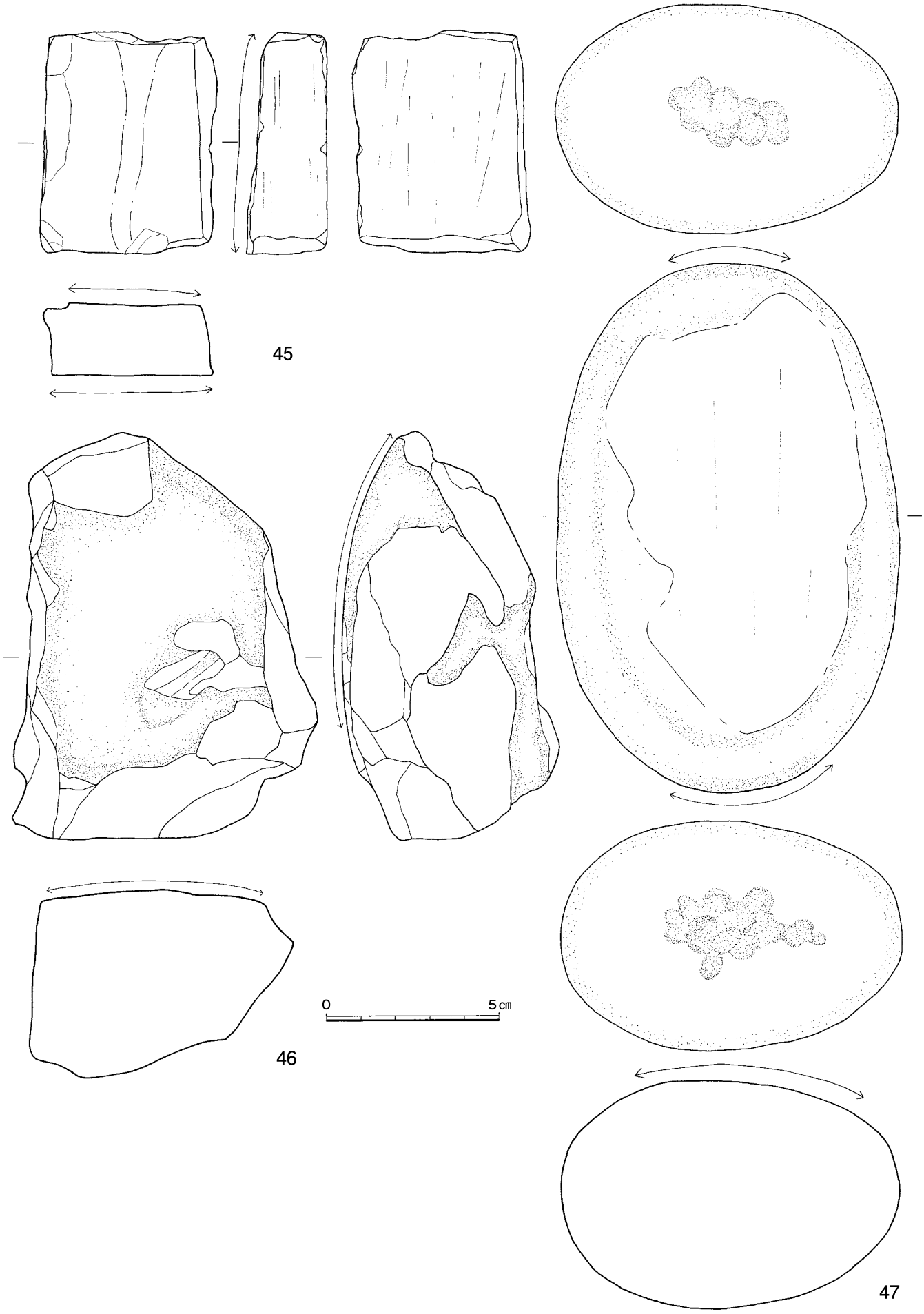


第14図　【４号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】

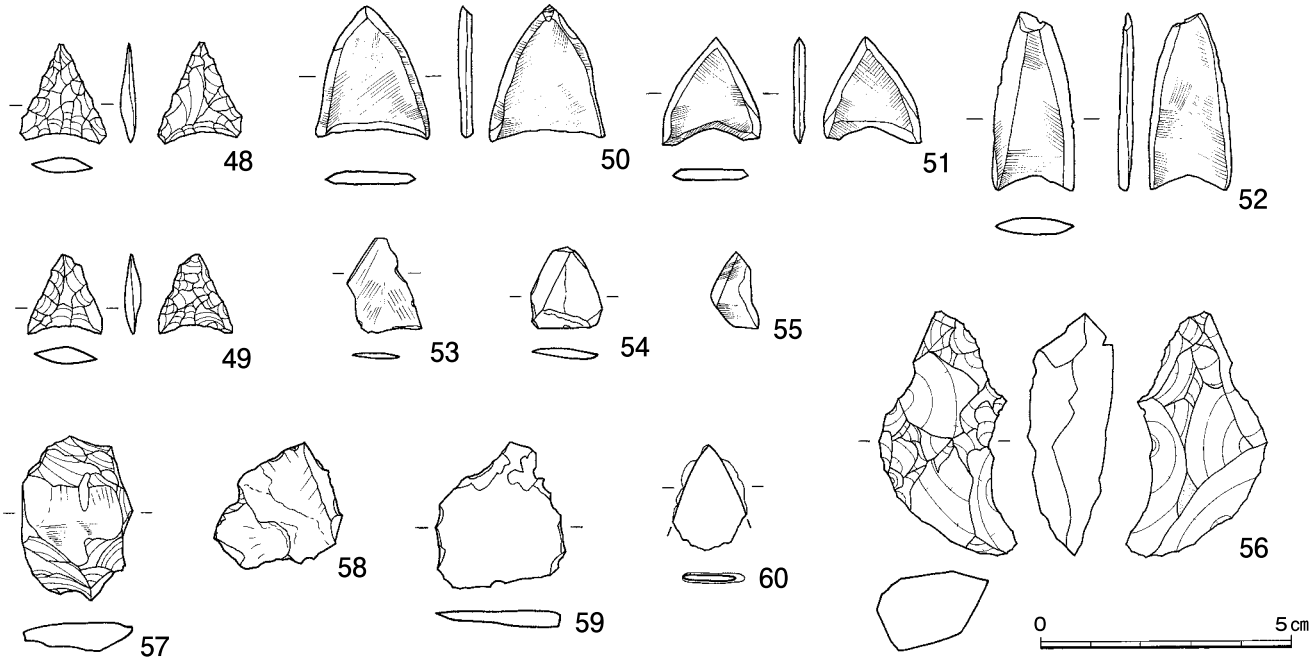
は磨製石鏃がまとまって出土している。56はチャート製の剥片、57、58は頁岩製の剥片、59は緑色頁岩製の剥片である。いずれも形状、大きさなどから石鏃を製作しようとした可能性がある。60は鉄鏃である。刃部先端のみが出土している。なお、包含層一括として柄の部分が出土している。



第15図　【４号竪穴住居跡出土遺物実測図①　37～42：Ｓ＝１／３　43、44：Ｓ＝２／３】



第16図　【４号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝２／３】



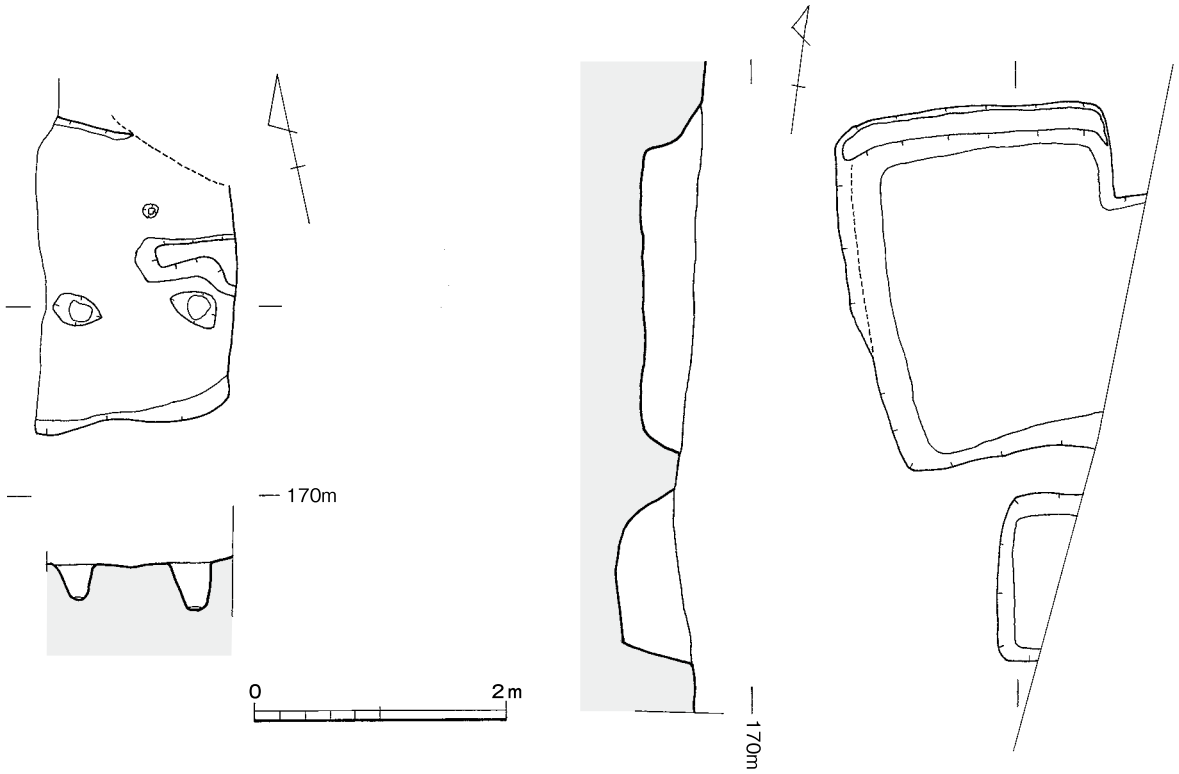
第17図　【４号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝２／３】

５号竪穴住居跡（SA5）、６号竪穴住居跡（SA6）と出土遺物

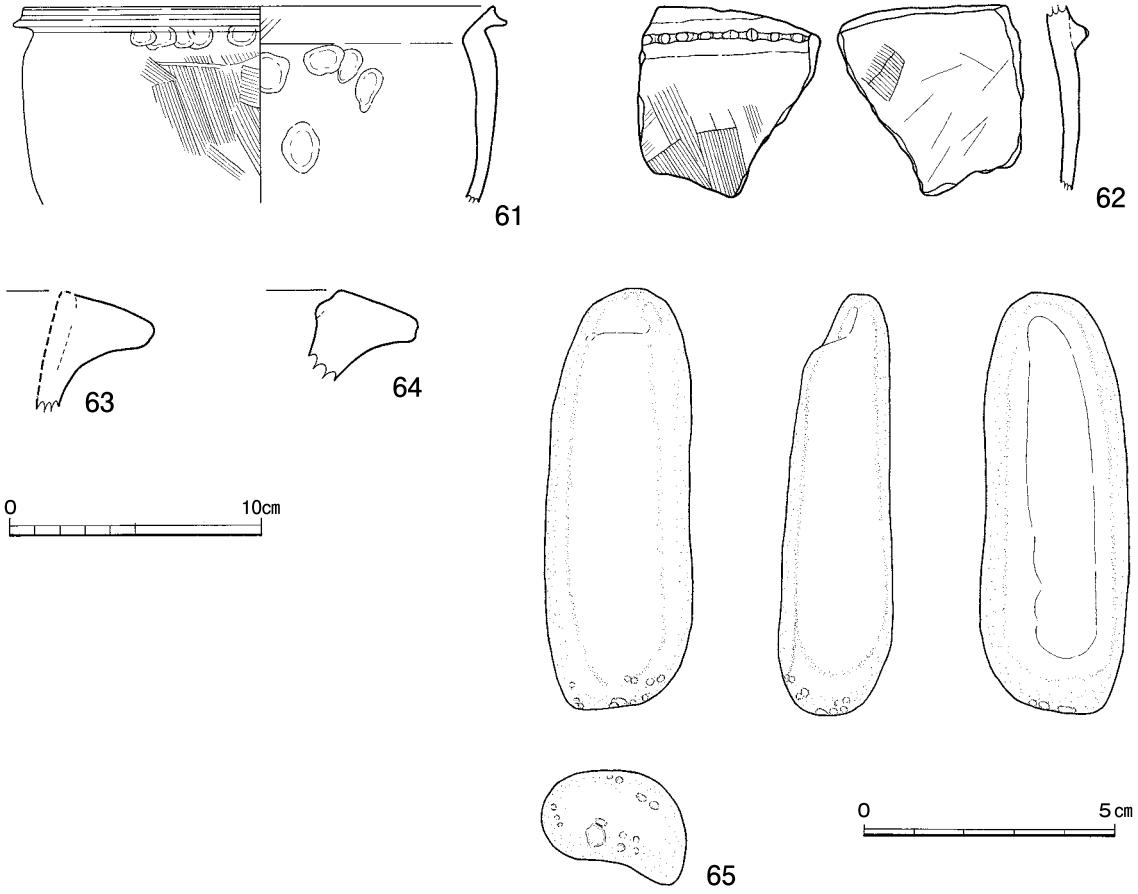
SA5は、Ｅ－10グリッドに位置する。西側にトレンチがあり、東側は調査区外である。そのため、全容は不明である。長辺約2.3m、短辺約1.4m、深さ約0.2 ～ 0.3mの方形プランを基調とする。突出壁が１箇所存在する。突出壁は東壁中央部から約0.8m西へ突出する。床面からの高さは、約0.2mである。柱穴は、径約0.24 ～ 0.4m、深さ約0.29 ～ 0.36mで東西方向に設けられ、主柱間距離は約0.9mを測る。

SA6は、Ｅ11グリッド内調査区中央東側の壁沿いに検出された。SA5同様中央部分は調査区外である。突出壁を２箇所もつ花弁状住居と考えられる。北側の間仕切りを作る突出壁は、北西隅から約1.6mの所で南へ約0.5m突出する。南側の間仕切りを作る突出壁は、約0.6m以上の突出を想定できるが、全容は不明である。後述するSA7と同タイプではないかと考えられる。遺構に伴う遺物はごくわずかでSA2などの土器と接合するものなどがあった。本報告書に掲載できるほどの遺物はなかった。

遺物は、SA5のものである。61は甕。胴部から口縁部にかけて器壁が肥厚し内傾する。「く」の字状口縁となる。口縁部は短めで端部は凹線状となる。外面にハケ目を施し、内外面に指頭痕が残る。62は甕の胴部で刻目突帯を貼り付ける。外面にハケ目を施す。63、64は壺の口縁部である。63はハケ目を施し、端部はやや丸みを帯びる。64は内面に一条の突帯を貼り付ける。65は、砂岩製の砥石である。上下面、側面を使用している。



第18図　【５号竪穴住居跡実測図　６号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】



第19図　【５号竪穴住居跡出土遺物実測図　Ｓ＝１／３　Ｓ＝２／３】

７号竪穴住居跡（SA7）

SA7は、調査区中央付近Ｃ－11グリッドに位置する。SA9と切り合いがみられる。長辺約5.5m、短辺約5.2mの方形プランを基調とする深さ約0.28m、総床面積は、約16.7㎡を測る。北東、東、南東、南西方向の４箇所の突出壁で間仕切られた５箇所の空間を有する花弁状住居である。北東側の突出壁は、床面からの現高約0.1m、北東隅より約0.8mほど西よりで約0.6 ～ 0.8m南へ突出する。間仕切られた西側空間の床面積は約1.9㎡である。東側の突出壁は、東辺のほぼ中央部にあり、床面からの現高約0.27mで、西へ約１ｍ突出する。この壁と北東の壁によって間仕切られた空間の床面積は、約1.7㎡である。南東の突出壁は、現高約0.4m、南東隅より約1.2mの位置に設けられ、北へ向けて約0.6m突出する。この壁と東壁に間仕切られた空間の床面積は約1.8㎡である。南西の突出壁は、現高約0.4mで北へ約0.6m突出する。この壁と南東壁に間仕切られた空間の床面積は約1.13㎡である。この壁とSA9の壁によって切られた空間の床面積は約1.16㎡であるが、住居が左右ほぼ対照であると仮定するならば床面積は若干増えるものと考えられる。主柱穴は、SA9南東側のものと貼床をはずした後に確認できた床面東側ほぼ中央付近のものの2穴と考えられる。径約0.34 ～ 0.46m、深さ約0.7 ～ 0.8mで東西方向に設けられ、主柱間距離は約1.3mを測る。

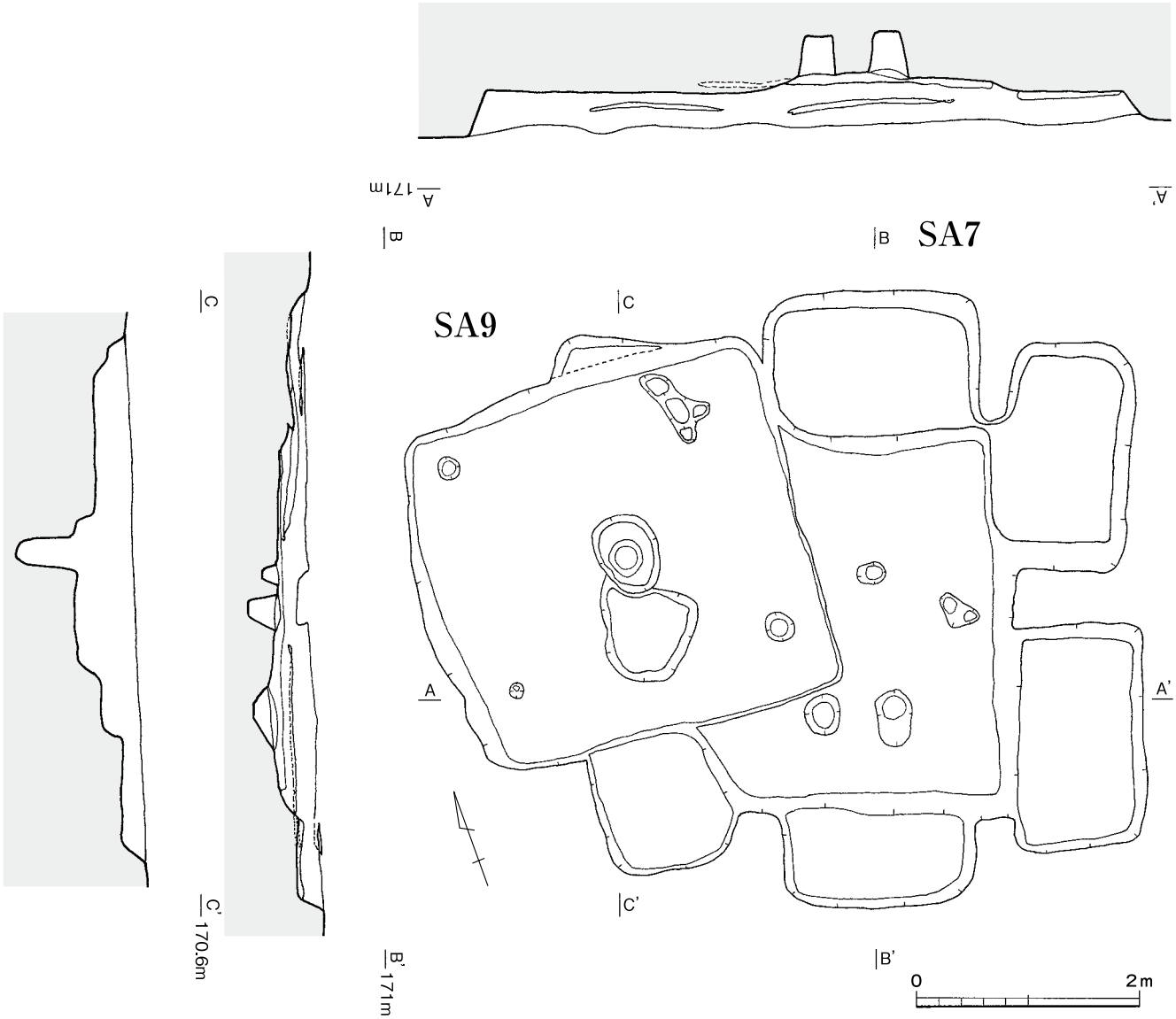
９号竪穴住居跡（SA9）と出土遺物

SA9は、調査区中央部西側Ｂ－11、Ｃ－11グリッドに位置し、SA7を切る状況で検出された。長辺約3.5m、短辺約3.4m、深さ約0.4m、総床面積約9.95㎡の方形プランを基調とする住居跡である。柱穴は径約0.2m、深さが約0.09mと浅いものが多い。そのなかで主柱穴と考えられるのは、中央の１穴で径約0.3m、深さ約0.44mである。周囲が約0.05 ～ 0.2m程度の範囲で、床面より約0.06 ～ 0.07mほど掘り込まれている。南東隅にある柱穴はSA7に伴うものと考えられる。

遺物は第21図に示している。66、67は壺の口縁部である。66は、大きく外反し、円形浮文を２個貼り付ける。端部は平坦である。外面にハケ目が入る。SA7とSA9の土器片が接合している。67 ～ 69の土器はSA9から出土している。67は緩やかに外反し、端部は平坦である。68は三角突帯を貼り付けた甕の頸部である。69は甕の口縁部で、「く」の字状の口縁と考えられる。端部は平坦である。70、71は砥石で、70は表面、裏面、右側面を砥面として使用している。左側面は敲打痕が残る。71は砥石が剥離したものである。72は頁岩製の打製石鏃である。

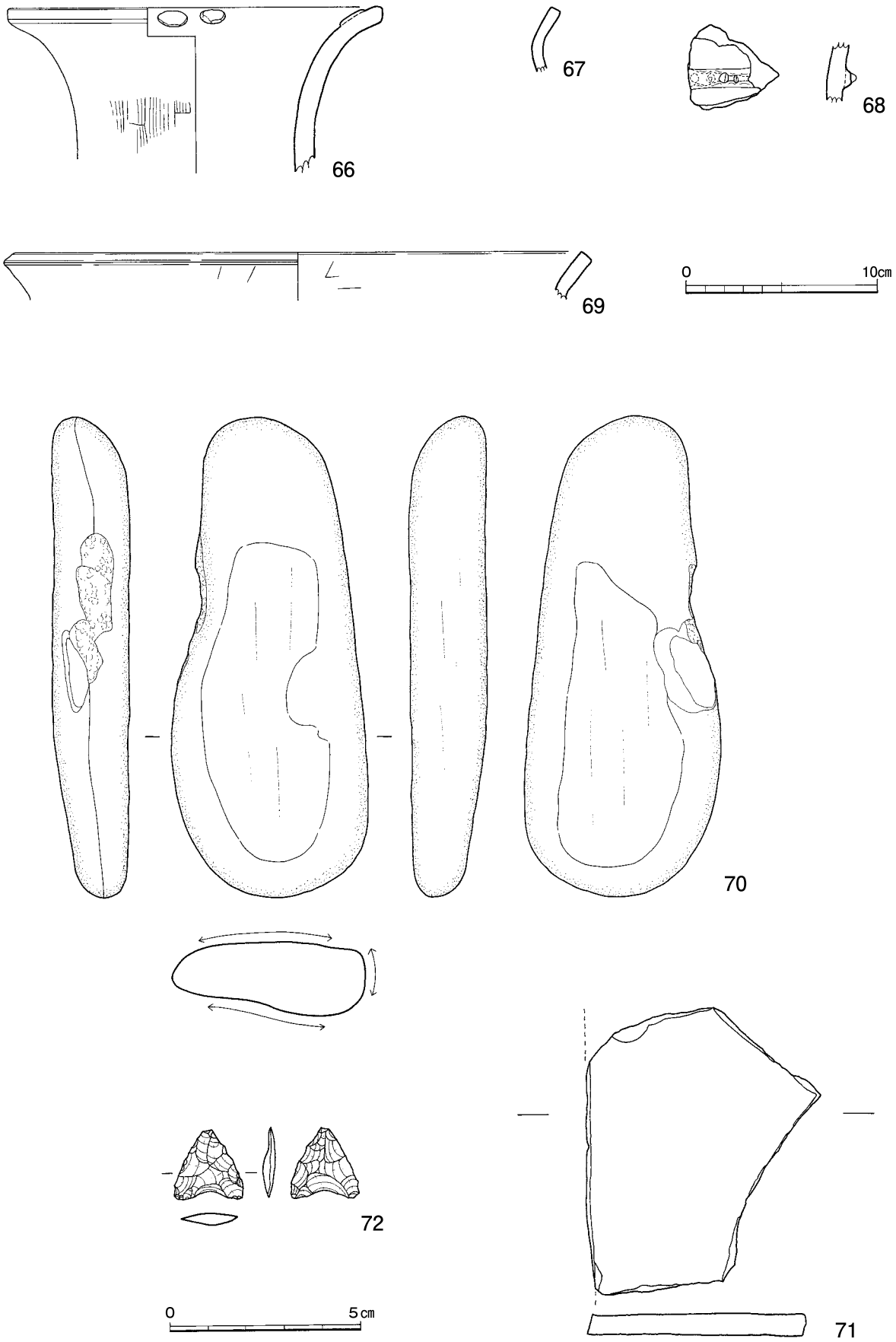
８号竪穴住居跡（SA8）と出土遺物

SA8は、調査区中央付近Ｃ－11、Ｃ－12グリッドに位置する。長辺約3.7m、短辺約3.6m、深さ約0.24mの方形プランを基調とする。総床面積は約12㎡である。重機等の削平により住居上部は消失したようである。柱穴は多数確認できたが、主柱穴は２穴と考えられる。径約0.2 ～ 0.4m、床面からの深さ約0.25 ～ 0.33mである。住居の中央部から南側にかけての径約0.8mの範囲と北側壁中央付近の径0.6mの範囲に焼土が確認できた。また、北側中央部はかなり固く締まった硬化面があった。

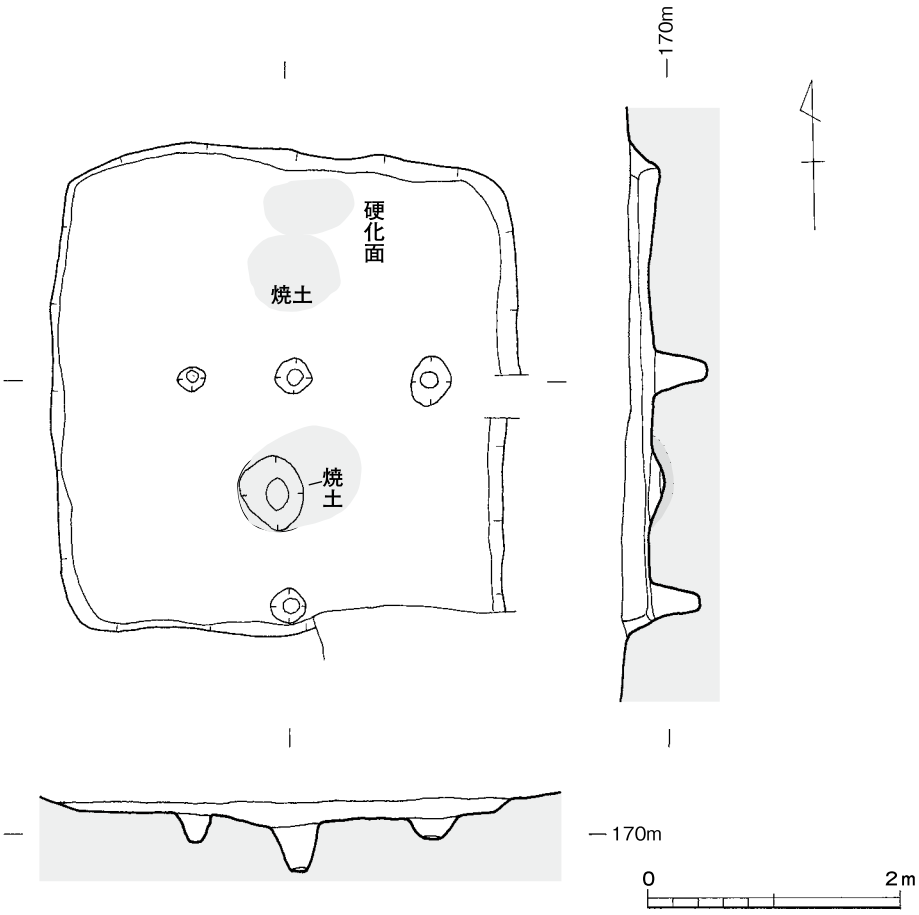


第20図　【７号・９号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】

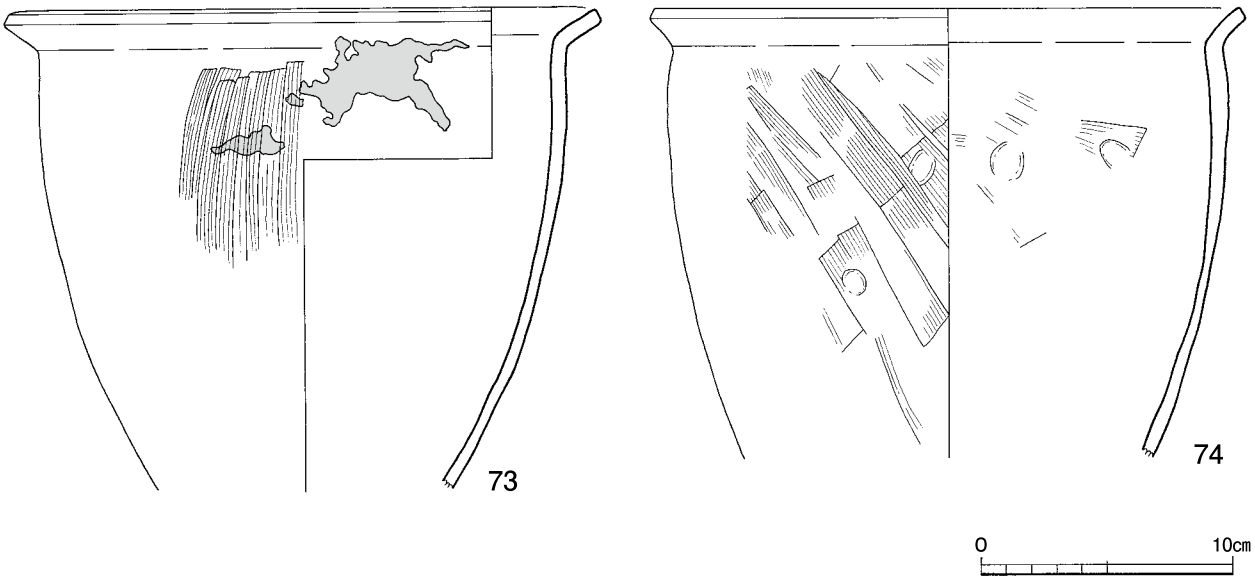
遺物は、第23図、第24図、第25図である。73、74の甕はどちらも底部を欠くが、緩やかな「く」の字状口縁をもち端部は平坦である。73は縦位のハケ目を施し、頸部付近にはススが付着している。74は斜位にハケ目を施す。75の甕は胴部径が口径よりやや広く、緩やかな「く」の字状口縁を呈する。底部は平底である。外面に縦位のハケ目、ナデ調整を施す。76は壺の胴部で、4条の三角突帯を貼り付ける。77は甕の頸部で刻目突帯を貼り付ける。78は砂岩製の砥石で表、裏、両側面を砥面として使用している。81は砂岩製の磨石、敲石である。表面を磨面、側面を敲面として使用している。82は砂岩製の砥石である。右側面以外の面をすべて使用している。79は頁岩製の磨製石鏃である。80は頁岩製の剥片である。用途は不明である。



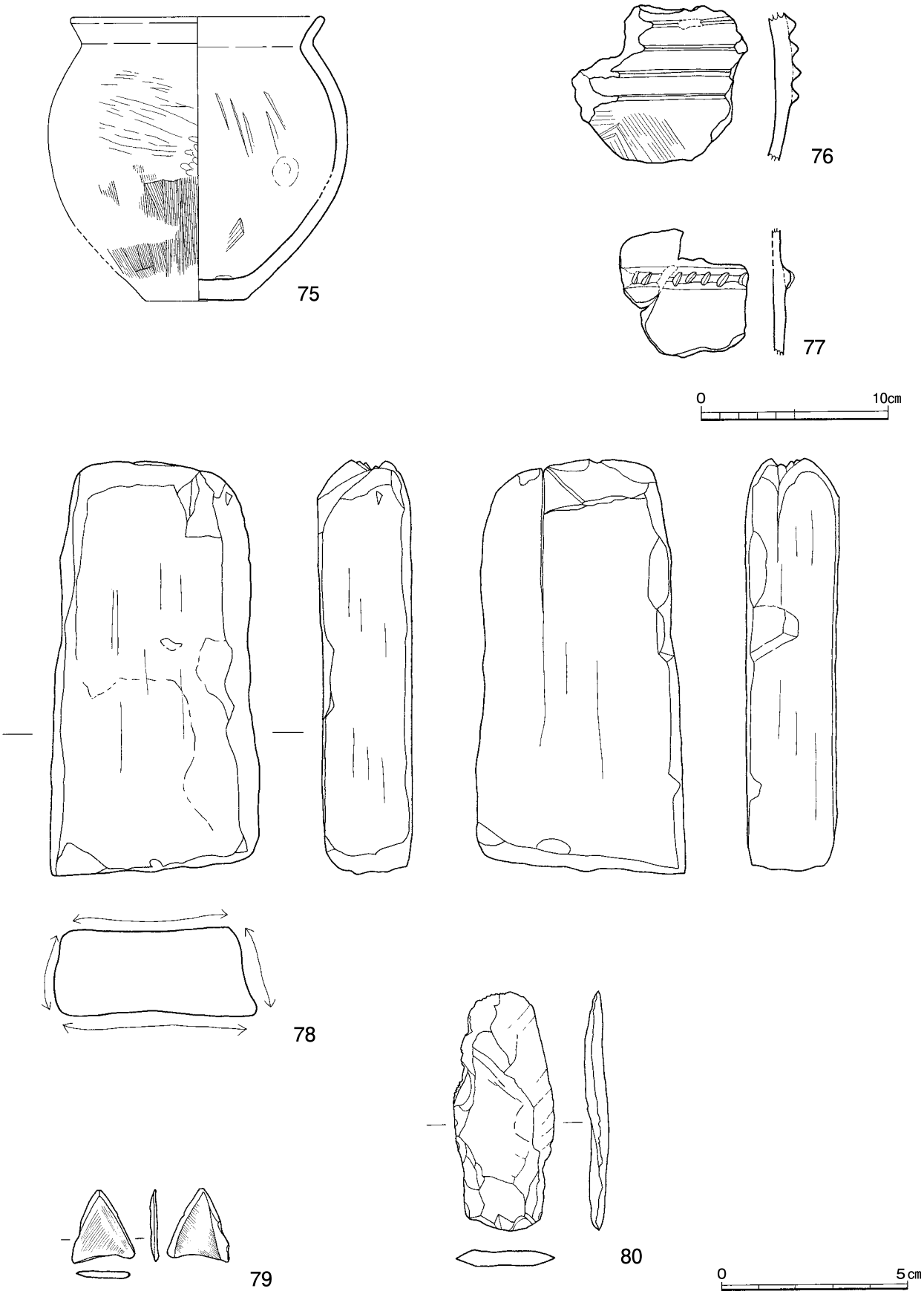
第21図　【９号竪穴住居跡出土遺物実測図　Ｓ＝１／３　Ｓ＝２／３】



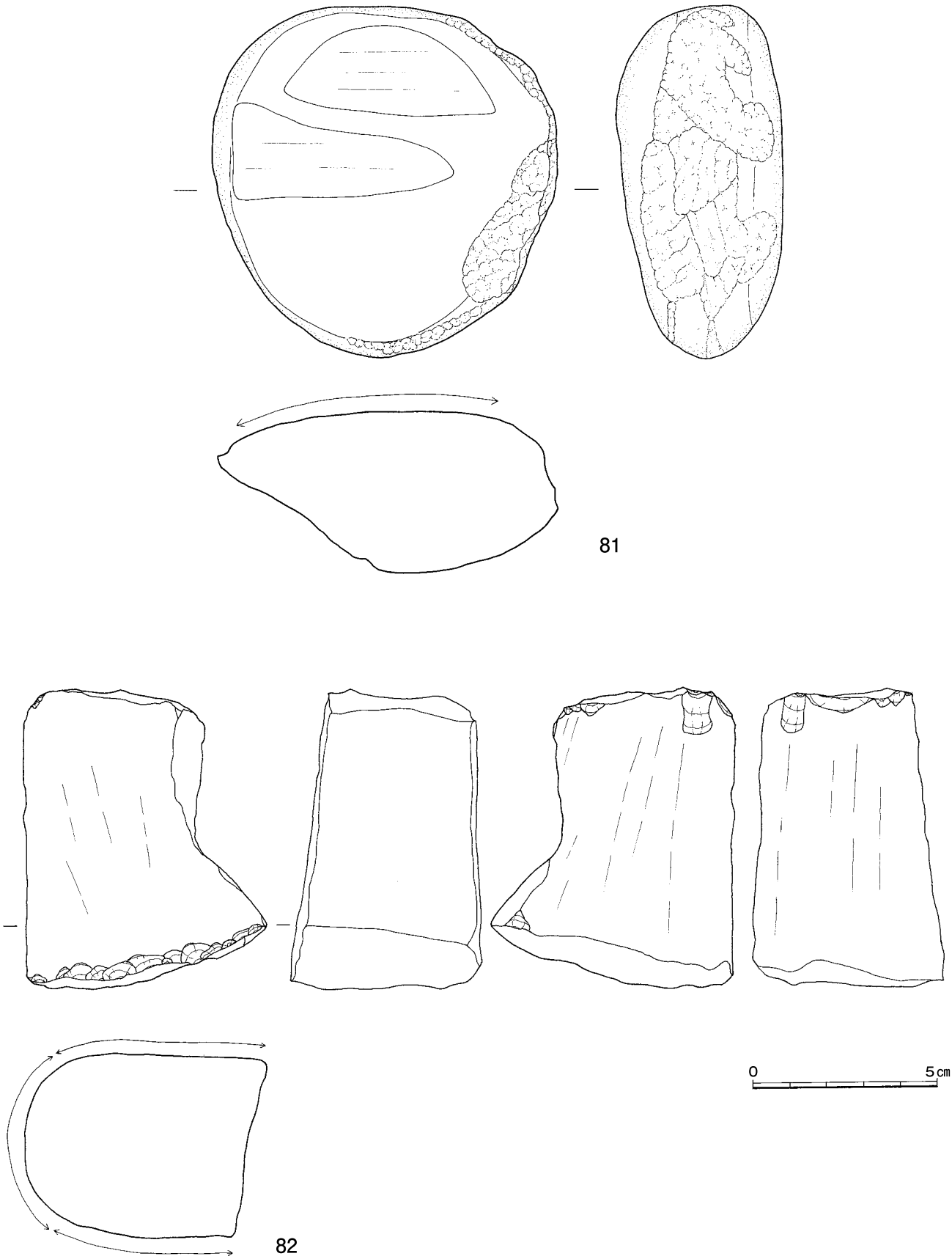
第22図　【８号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60】



第23図　【８号竪穴住居跡出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】



第24図　【８号竪穴住居跡出土遺物実測図②　Ｓ＝１／３　Ｓ＝２／３】

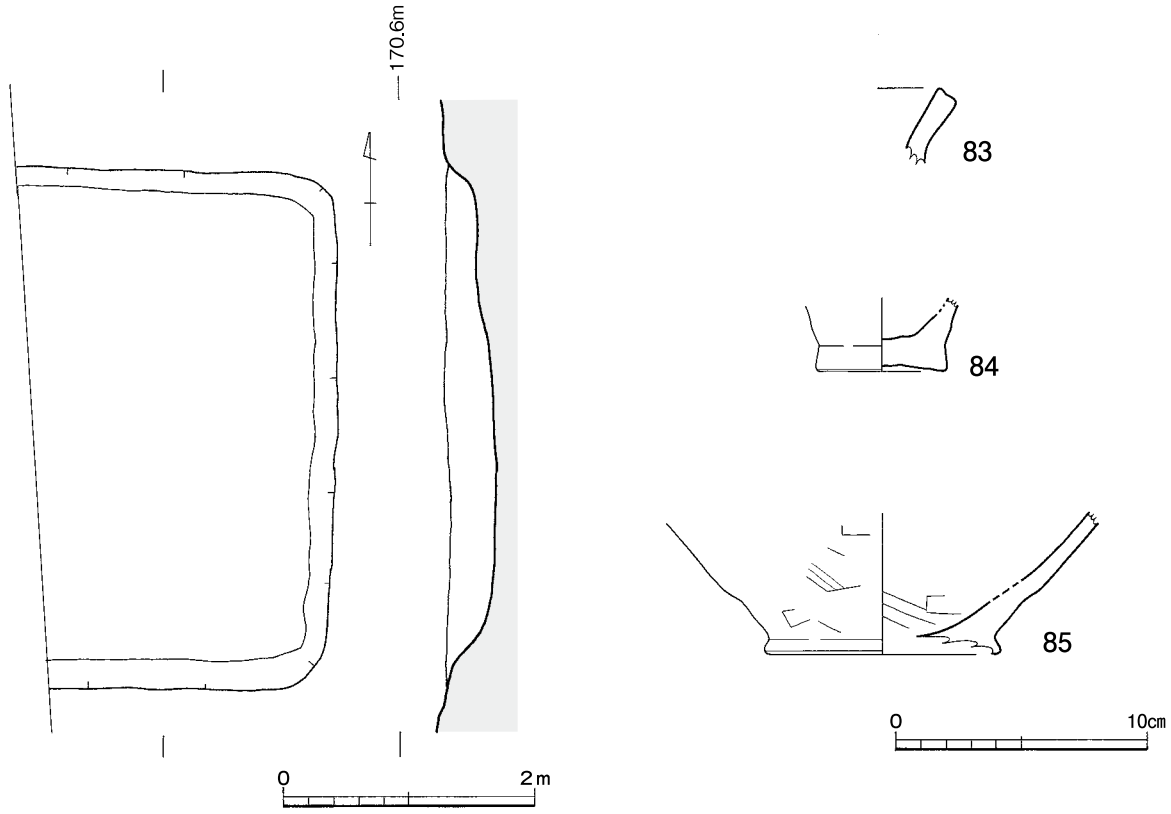


第25図　【８号竪穴住居跡出土遺物実測図③　Ｓ＝２／３】

10号竪穴住居跡（SA10）と出土遺物

SA10は、調査区中央付近Ｂ－９からＢ－10グリッドにかかる位置に検出された。住居の一部が調査区外である。長辺約4.1m、短辺約2.5mの方形プランを基調とする。現状の総床面積は約8.3㎡である。調査区中央部西側は調査前が竹林という状況だったため、竹根による埋土の攪乱がひどく表土をはいだあとでも埋土は柔らかな状態であった。柱穴は確認できなかった。この住居では、比較的良好な状態で炭化材が遺存していた。

遺物は、83が壺の口縁部で、端部が凹線状となる。84は甕の底部。上げ底で端部は広がる。85は壺の底部で、平底を呈し端部はわずかに広がる。

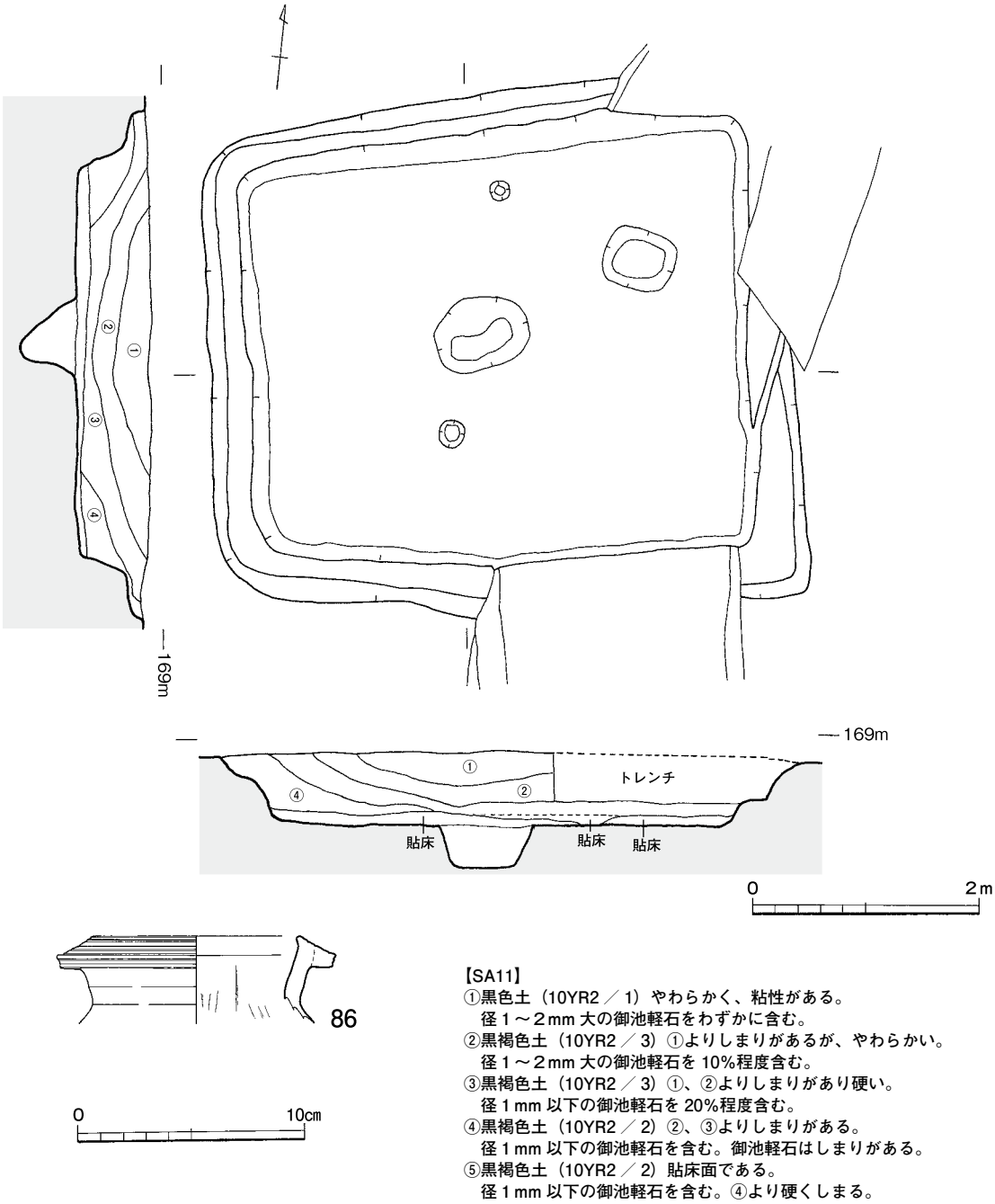


第26図　【10号竪穴住居跡実測図　Ｓ＝１／60　出土遺物実測図　Ｓ＝１／３】

11号竪穴住居跡（SA11）と出土遺物

SA11は、調査区南側Ｃ－15、Ｃ－16グリッドに位置する。一部をトレンチによって切られている。長辺約5.2m、短辺約4.7m、深さ約0.5mの方形プランを基調とする。総床面積は約22.5㎡である。住居の壁は段状になっており、幅約0.1 ～ 0.2mで壁に沿うようにめぐっている。柱穴は数個あるが主柱穴と考えられるものは確認できなかった。

床面のほぼ中央に長径約0.9m、短径約0.7m、深さ約0.5 ～ 0.6mの落ち込みがある。用途は不明であり、焼土もなかった。遺物86は、壺の口縁部である。口縁部は台形突帯を下がり気味に貼り付け、端部はわずかに上向きとなり、内側にわずかに突出がみられる。口唇部や端部には凹線がはいる。



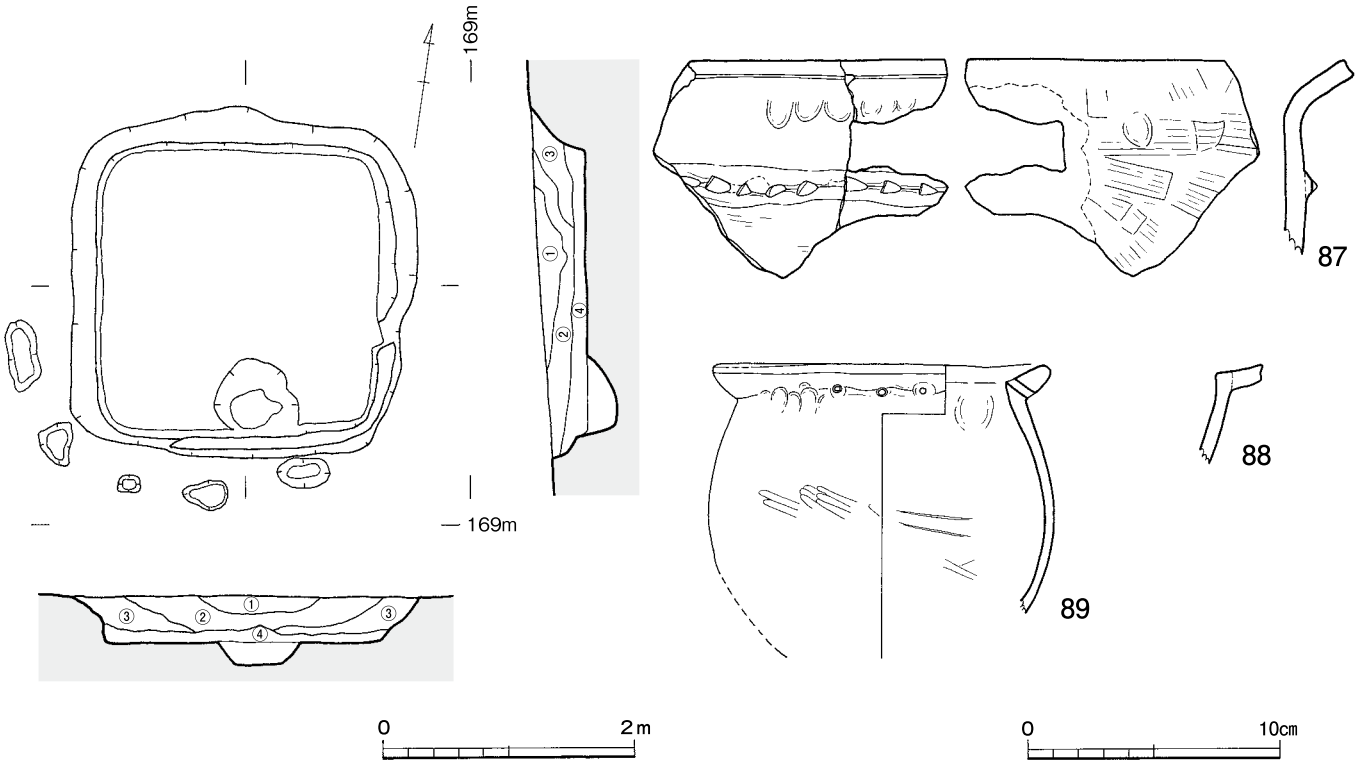
第27図　【11号竪穴住居跡実測図　S＝1／60　出土遺物実測図　S＝1／3】

12号竪穴住居跡（SA12）と出土遺物

SA12は、調査区南側Ｃ－14グリッドに位置し、長辺約2.8m、短辺約2.76m、深さ約0.24 ～ 0.35mの方形プランを基調とし、総床面積約6.76㎡である。主柱穴と考えられるものは認められなかった。

南西の隅周辺に長径約0.12 ～ 0.42m、短径約0.08 ～ 0.18mのピットが5個確認できた。用途は不明である。

遺物は第28図87 ～ 89である。87は甕の口縁部～頸部である。頸部下に三角の突帯を貼り付け、口縁部は「く」の字状に外反し、端部はくぼむ。横ナデや指頭痕が見られる。88は、甕の口縁部である。わずか



【SA12】
①黒色土（7.5YR2／1）やわらかく、もろい。径１～３mm 大の御池軽石を少量含む。
②黒色土（7.5YR2／1）①よりしまりがあり、やや硬い。径１～５mm 大の御池軽石を少量含む。
③黒色土（7.5YR2／1）①、②よりしまりがあり、やや硬い。②層より御池軽石の量は少ない。
④黒色土（7.5YR2／1）しまりがあり、硬い。径１～５mm 大の御池軽石を多量に含む。

第28図　【12号竪穴住居跡実測図　S＝１／60　出土遺物実測図　S＝１／３】

に内傾したのち緩やかな逆Ｌ字状の口縁となる。口縁端部はくぼむ。89は底部が欠けるが、小型の壺と思われる。胴部中央部がやや張りがあり、「く」の字状の口縁となるが、頸部から口縁部にかけて器壁の厚みが増す。頸部に穿孔を２箇所持つ。

（２）　掘立柱建物跡（SB）

１号掘立柱建物跡（SB1）

SB1は、調査区北側Ｂ－７グリッドに位置し、SA1西側に検出した。南北方向に主軸を有する掘立柱建物跡である。規模は、１間×１間であり、桁行約1.26 ～ 1.3m、梁行約0.44 ～ 0.52mを測る。柱穴の深さは検出面から約0.6 ～ 0.68mであり、円形もしくは楕円形である。埋土は、御池軽石が少量混入する黒色土である。出土遺物はなかった。

２号掘立柱建物跡（SB2）

SB2は、調査区北側Ｄ－８からＥ－８グリッドに位置し、東西方向に主軸を有する掘立柱建物跡である。規模は、１間×１間で、桁行約1.5 ～ 1.54m、梁行約0.96 ～ 1.06mを測る。柱穴は、径約0.12 ～ 0.28mの円形もしくは楕円形で、検出面からの深さが、約0.5 ～ 0.59mを測る。埋土は、御池軽石が少量混入する黒色土である。出土遺物はなかった。

３号掘立柱建物跡（SB3）

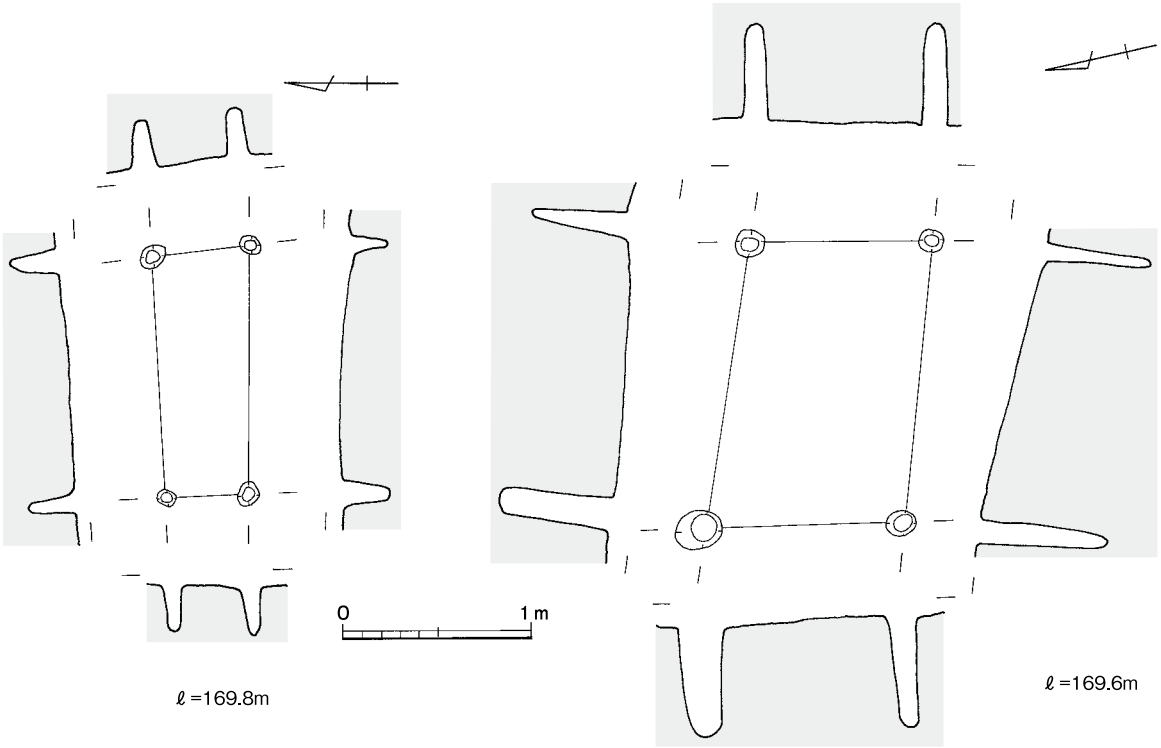
SB3は、調査区中央部付近Ｃ－10グリッドに位置し、南北方向に主軸を有する掘立柱建物跡である。規模は、１間×１間であり、桁行約0.96 ～ 1.16m、梁行約0.88 ～ 1.16mを測る。柱穴は、径約0.1 ～ 0.18mの円形または楕円形の掘形で、検出面からの深さは約0.07 ～ 0.29mを測る。埋土は、御池軽石が少量混入する黒色土である。出土遺物はなかった。

４号掘立柱建物跡（SB4）

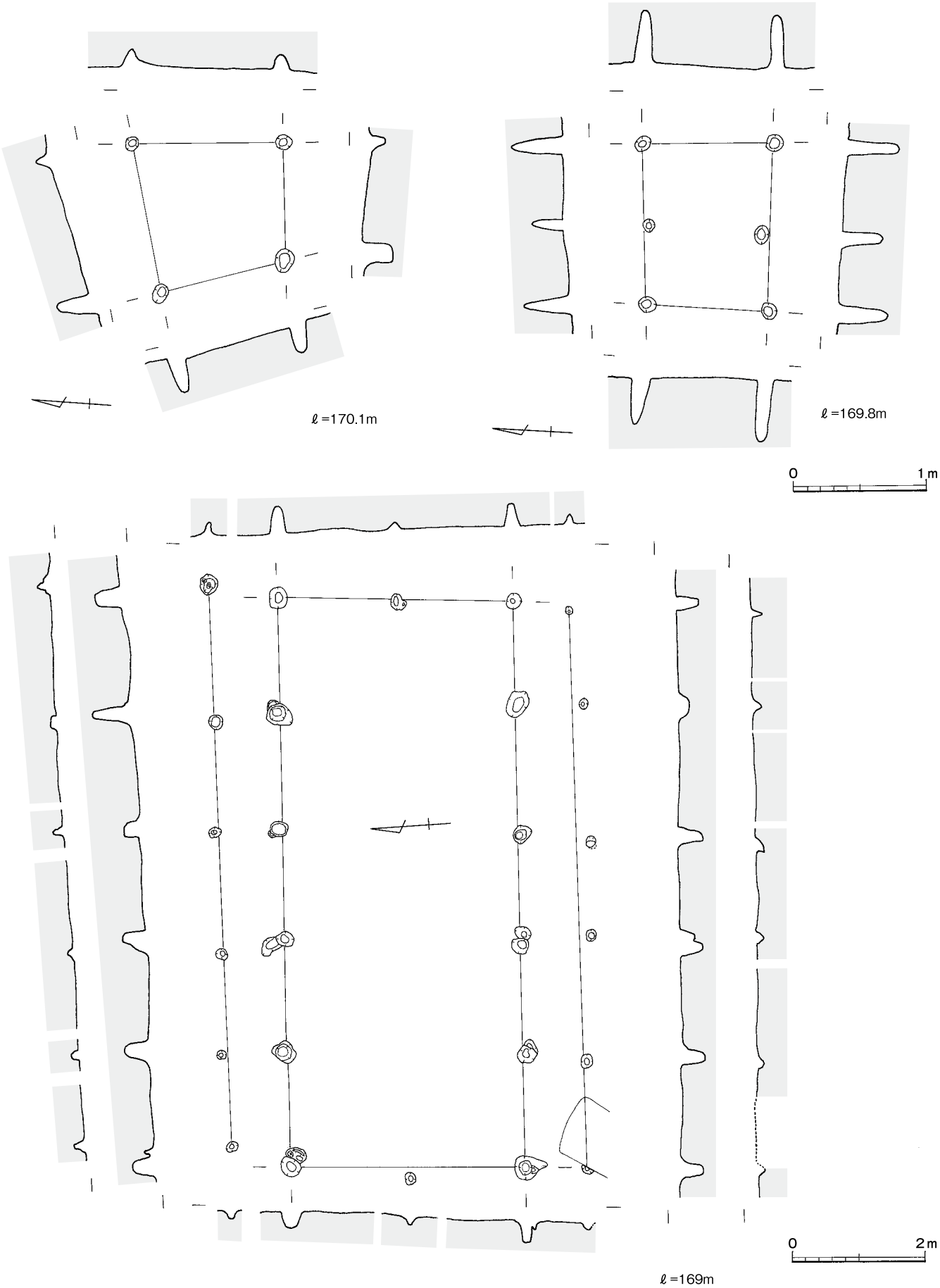
SB4は、調査区中央部付近Ｄ－10グリッドに位置し、東西方向に軸を有する掘立柱建物跡である。規模は１間×２間で、桁行約1.2 ～ 1.28m、梁行約0.92 ～ 1.0m、桁行柱間は約0.5 ～ 0.7mを測る。柱穴は、径約0.1 ～ 0.12mの円形または楕円形の掘形で、検出面からの深さは、約0.36 ～ 0.4mである。埋土は、御池軽石を少量含む黒色土である。出土遺物はなかった。

５号掘立柱建物跡（SB5）

SB5は、調査区南側Ｄ－14、Ｅ－14、Ｄ－15、Ｅ－15グリッドに位置し、SA11，SA12の東側で検出した。東西方向に主軸を有し、両妻側の中央と南北に庇用の柱を持つ庇付掘立柱建物跡である。規模は２間×５間であり、桁行約8.46 ～ 8.52m、梁行約3.5m、桁行間約1.56 ～ 1.96m、梁行間約1.72 ～ 1.78mを測る。柱穴は径約0.24 ～ 0.36mの円形あるいは楕円形で検出面からの深さは約0.27 ～ 0.63mを測る。庇の柱穴は掘立柱穴に対してそれぞれ南北に向かって約0.84 ～ 1.1mの距離で設定されている。柱穴は約0.13 ～ 0.2mの円形または楕円形の掘形で、検出面からの深さは、約0.08 ～ 0.2mである。埋土は黒色土で柱穴内から弥生土器の小片が１点出土したが、これのみで時期を確定するのは困難と思われる。



第29図　【１号・２号掘立柱建物跡実測図　Ｓ＝１／40】

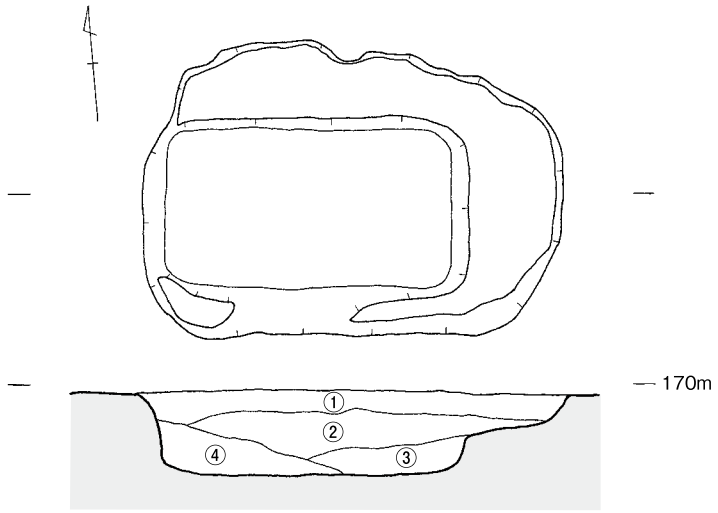


第30図　【３号・４号・５号掘立柱建物跡実測図　Ｓ＝１／40　Ｓ＝１／80】

（３） 土坑（SC）

１号土坑（SC1）

１号土坑は調査区北側Ｂ－５グリッドに位置する。長径約2.2m、短径約1.6m、深さ約0.4 ～ 0.45mを測る。検出面から約0.07 ～ 0.11m下がって平坦面がみられる。最深部は長辺約1.7m、短辺約0.9mの長方形の空間となる。床面積は約1.53㎡である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

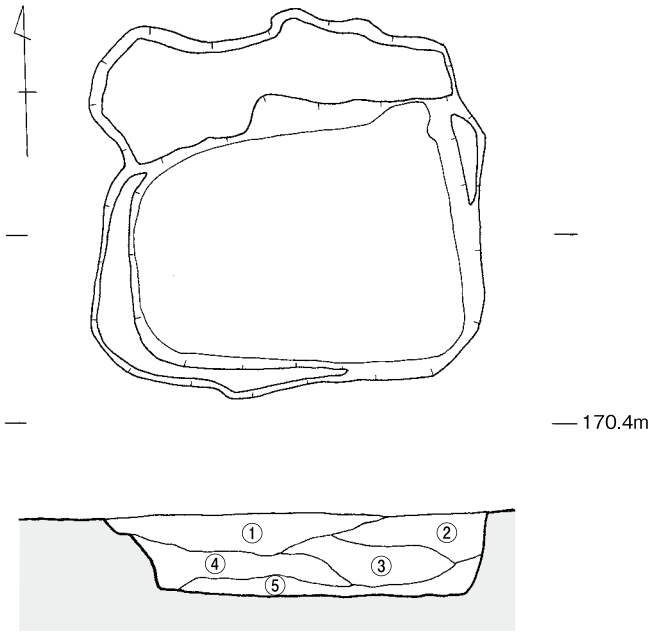


【SC １】
①黒褐色土（7.5YR3 ／ 1）ややしまりがあるが柔らかい。径１～５mm 大の御池ボラを多量に含む。
②黒褐色土（7.5YR3 ／ 1）しまりがありやや硬い。径２～６mm 大の御池ボラを多量に含み①層よりやや暗い。
①層よりボラの粒が大きい。
③黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）しまりがあり硬い。径１～３mm 大の御池ボラを多量に含み粒が細かい。
④黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）しまりがあり硬い。径１～３mm 大の御池ボラを④層よりも多量に含み明るい。

第31図 【１号土坑実測図 Ｓ＝１／40】

２号土坑（SC2）

２号土坑は調査区北側Ｂ－６グリッドに位置する。長径約2.1m、短径約2.0m、深さ約0.44 ～ 0.49mを測る。検出面から約0.09 ～ 0.16m下がって平坦面がある。最深部は長辺約1.8m、短辺約1.4mの長方形の空間となる。床面積は約2.52㎡である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。



【SC ２】
①黒褐色土（7.5YR3 ／ 1）しまりがあり、硬い。径１～５mm 大の御池ボラを多量に含む。
②黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）しまりがあり、硬い。径１～３mm 大の御池ボラを含む。
③黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）しまりがあり、やや硬い。径２～３mm 大の御池ボラを含む。
④黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）③層とほぼ同じであるが、やや暗く、径３～５mm の御池ボラと粒が大きい。
⑤黒褐色土（7.5YR2 ／ 1）③層より明るく硬い。しまりもある。

0 1m

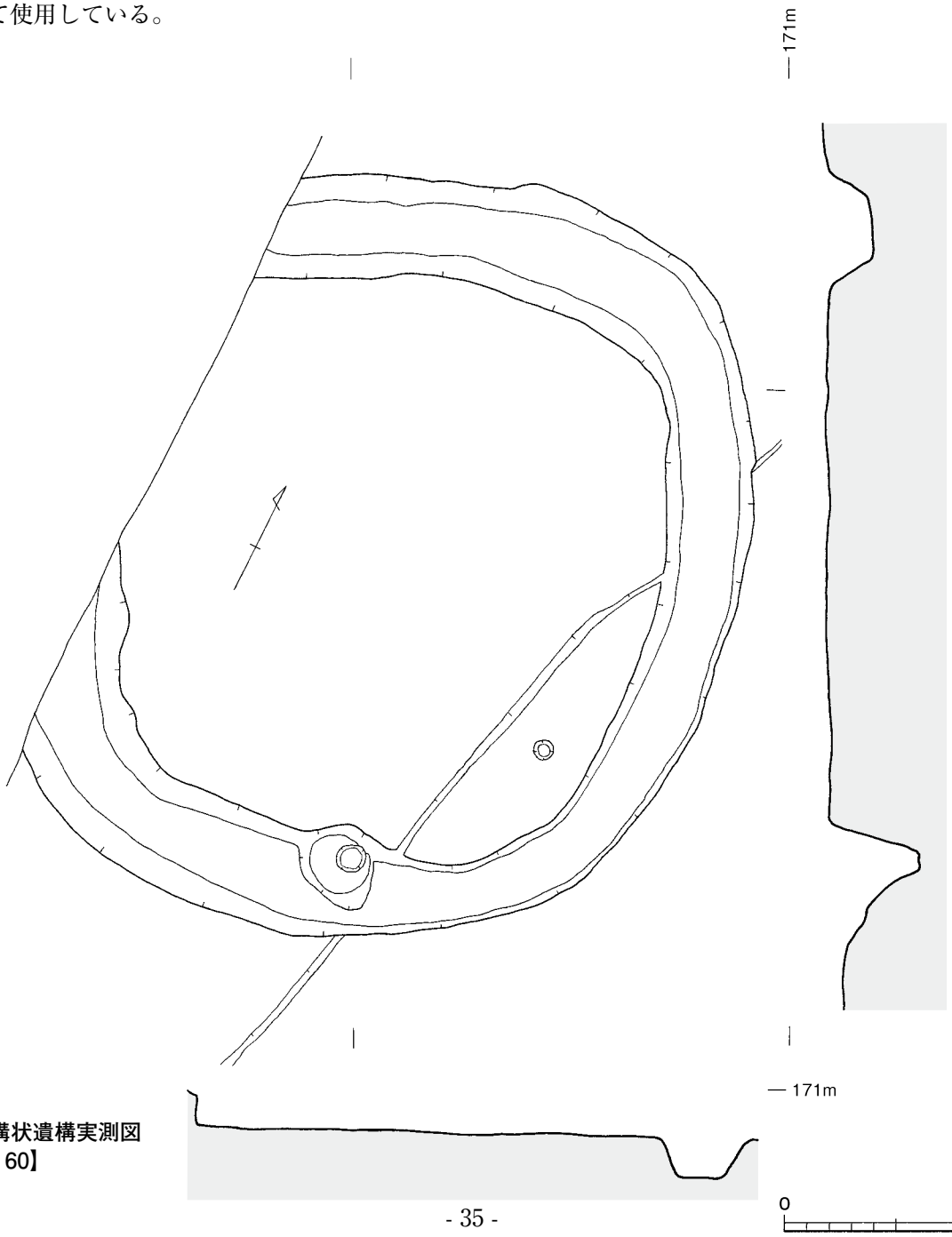
第32図 【２号土坑実測図 Ｓ＝１／40】

（4） 周溝状遺構

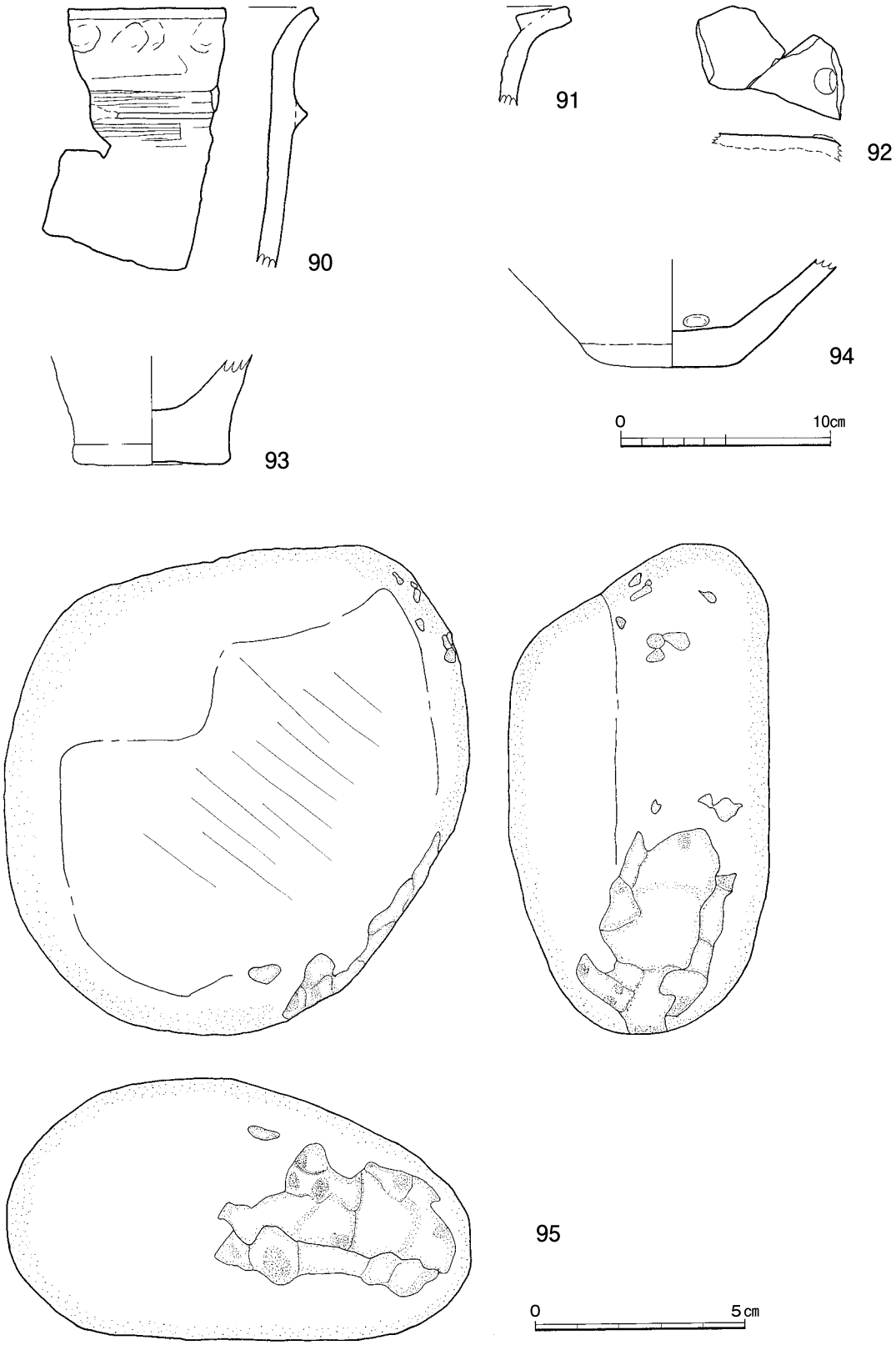
１号周溝状遺構（SL1）

SL1は、調査区西側Ｂ－12グリッドで検出した。上位層が竹根等によって撹乱を受けており、重機による表土剥ぎで検出面まで一挙に掘り下げた。遺構の一部が調査区外にあり、全容は明らかではないが、外径約6.8 ～ 7.4m、内径約4.8 ～ 5.6m、周溝の深さは検出面から約0.05 ～ 0.4mである。なお、SL2は、調査区中央付近Ｂ－10、Ｂ－11グリッドに位置し、遺構のほとんどが調査区外で、一部が検出された。全容は不明である。

遺物は、第34図に示している。90、91は甕である。90は三角の突帯を貼り付け、緩やかな「く」の字状を呈する口縁をもつ。91は厚みのある底部である。92 ～ 94は壺である。92は口縁部で、内面に三角突帯を貼り付け、外反する。口縁端部はわずかに丸みを帯び、中央部はわずかに凹線状を呈する。93は欠損が多いが、口縁部と考えられる。円形浮文を貼り付ける。94は底部で、丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。内面に指頭痕が認められる。95は敲石、磨石の両用である。上下面を磨面として使用し、右側面下部を敲面として使用している。



第33図
【１号周溝状遺構実測図
Ｓ＝１／60】

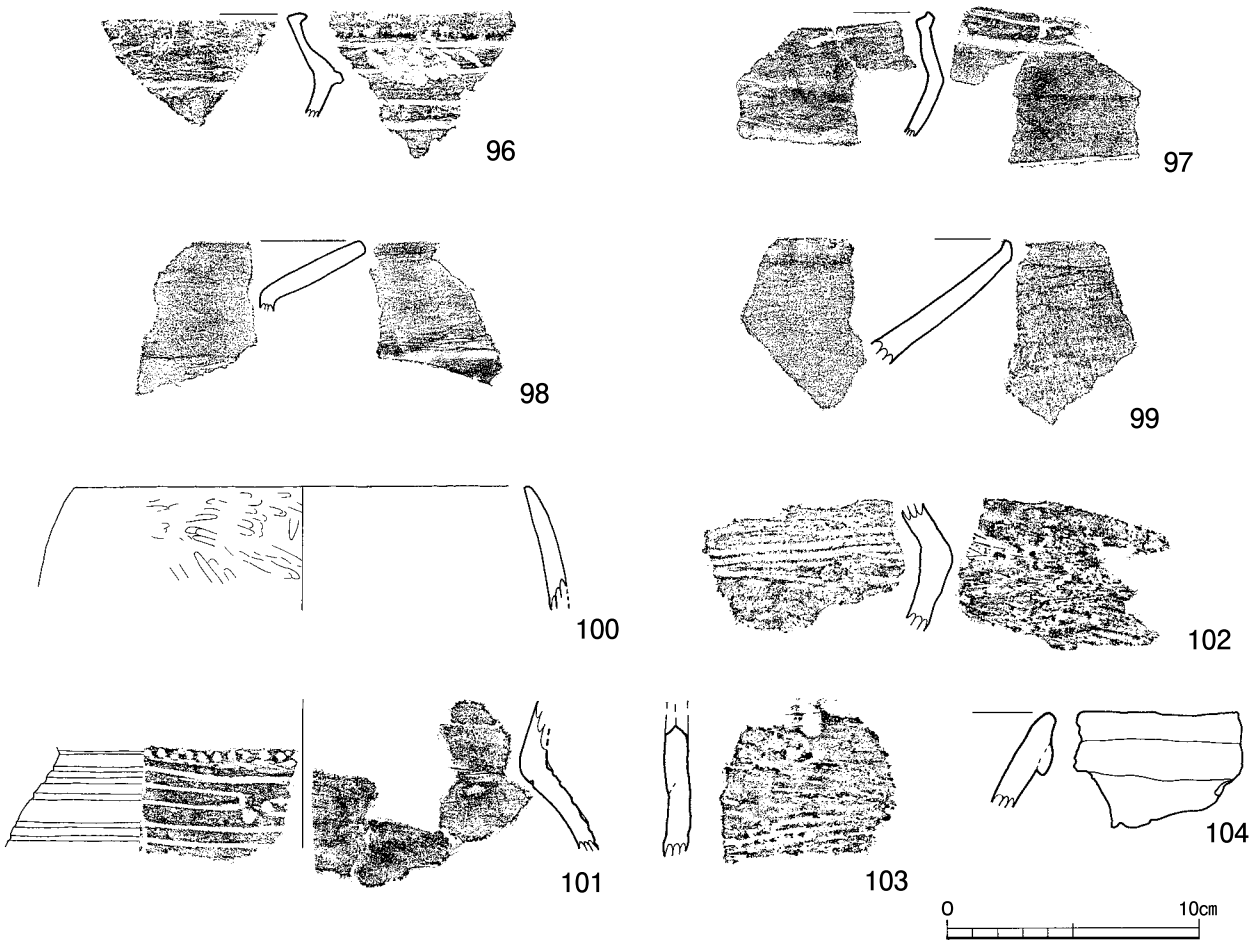


第34図　【１号周溝状遺構出土遺物実測図　Ｓ＝１／３　Ｓ＝２／３】

第２節　包含層出土の遺物

（１）縄文土器

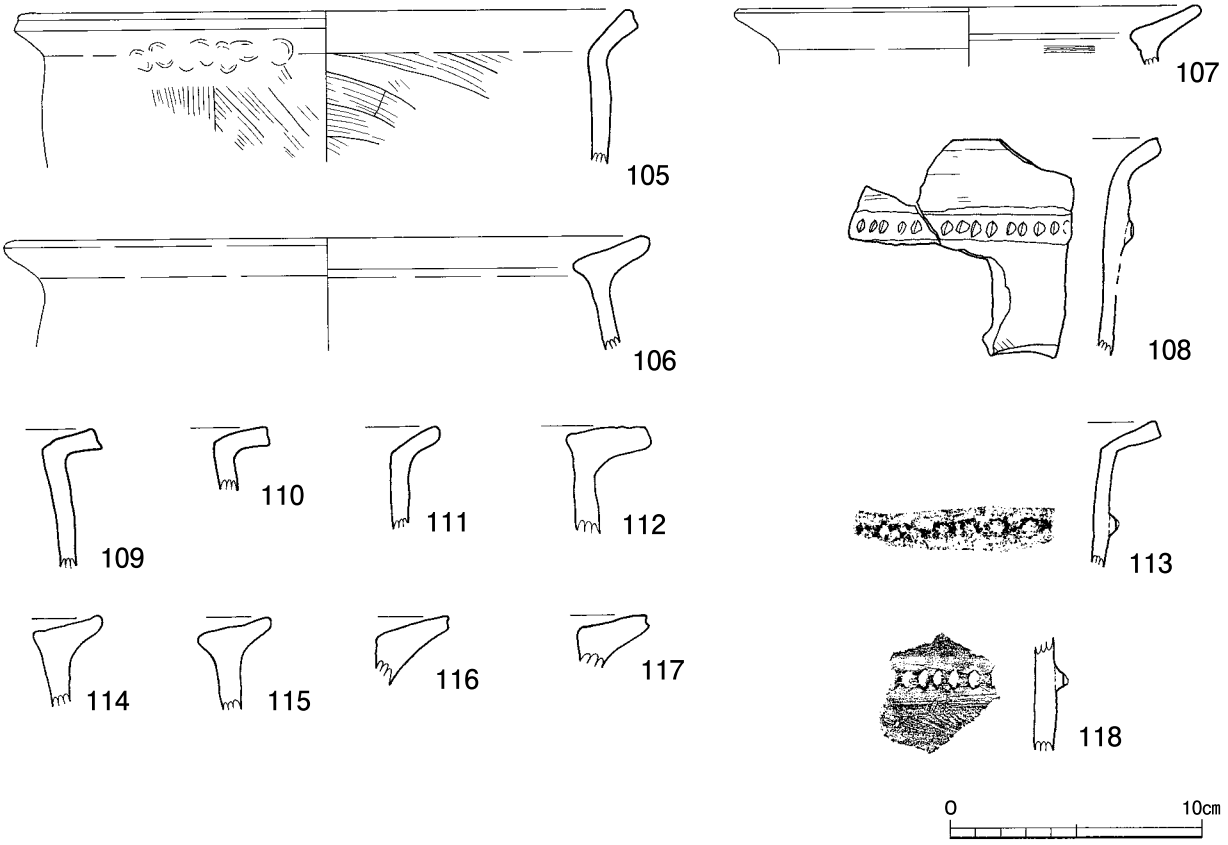
遺物は第35図に示している。96は晩期の精製浅鉢である。胴部で大きく屈曲して内傾する。屈曲した部分に突帯文を施し、突帯上部と屈曲部～口縁部に沈線文を施す。口縁端部にも突帯文を施す。外面は、丁寧なナデを施す。97は晩期の精製浅鉢である。96と同じように胴部中央部で逆「く」の字状に屈曲して内傾する。口縁端部は沈線文を施す。内外面はミガキ調整である。98は後期後半から晩期にかけての深鉢である。「く」の字状に大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は平坦である。外面にミガキ、内面に丁寧なナデ調整が施される。99は晩期の鉢の口縁部である。外面にミガキ、内面に丁寧なナデ調整が施される。緩やかに内傾しやや丸みを帯びてすぼまる。破断面には、粘土帯の接合痕が観察される。100は晩期の鉢である。口縁端部はすぼまって上向きとなる。外面胴部に縦位、口縁部には横位のミガキ、内面に丁寧なナデ調整が施される。外面は黒色を帯びる。101は後期後半の精製深鉢である。頸部に棒状工具による連続刺突文が施され、その下位には、横位の沈線文が施され、屈曲部内面には、明瞭な稜が観察される。102は粗製深鉢である。96、97のように胴部でゆるやかに屈曲して内傾する。内面は、条痕調整で外面は沈線文が入る。103は深鉢の胴部である。横位と斜位に条痕文が入り、穿孔もみられる。104は突帯を貼り付け、下方に垂れ下がる。



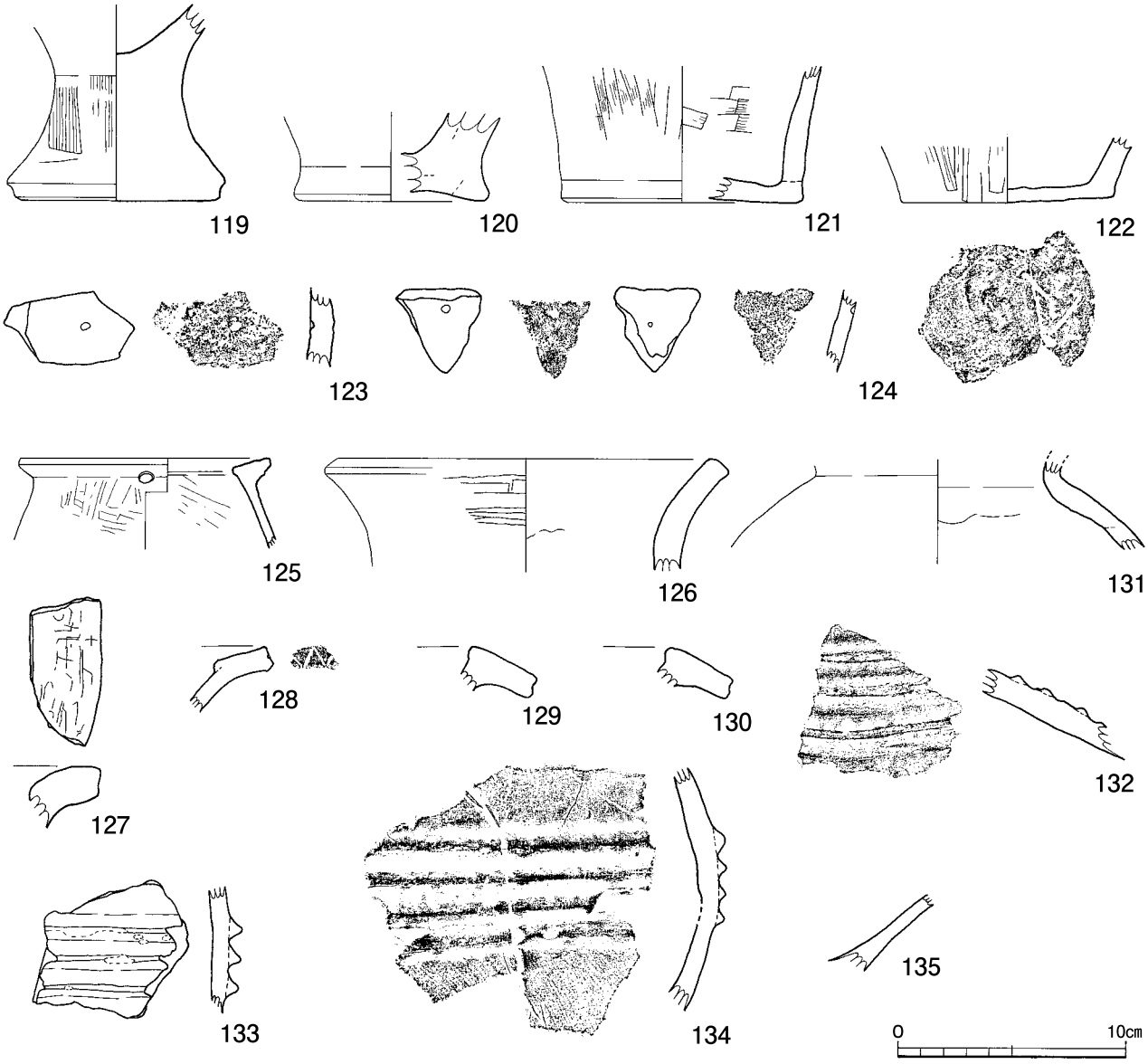
第35図　【包含層出土遺物実測図①　Ｓ＝１／３】

（2）弥生土器と石器

遺物は第36図に示している。105 ～ 124は甕、105 ～ 117はその口縁部である。105、108、109、110、111、113は、「く」の字状の口縁部で、106、107、112、114、115は鋤先状の口縁部である。116、117は、台形状の突帯を貼り付けた口縁部である。105、110、116、117は、口縁端部が凹線状となり、106、107、108、109、114、115はやや丸みを帯びる。108、113、118は頸部下に刻目突帯を貼り付ける。119 ～ 122は甕の底部。119は平底で端部は外方に向き、凹線状にくぼむ。外面にハケ目を施している。120はやや上げ底で端部は外方に向く。121、122は平底で緩やかに外反しながら胴部へと続く。外面は縦位のナデ、121は内面に横位のナデ調整が施される。123は内面に、124は内外面に種子痕を残す。125 ～ 135は壺。125 ～ 130はその口縁部である。125は鋤先状の口縁を持つ小型の壺で、頸部に穿孔が入る。126は緩やかに外反し、外面にはハケ目が施される。127は126がより大きく外反した状況のものと思われる。127は内面に突帯状を貼り付け、端部は鋸歯状の沈線文が入る。129、130は台形状の突帯を貼り付け垂れ下がる。端部は凹線状となる。131 ～ 135は頸部、胴部である。131は胴部から頸部付近である。132は肩部あたりで3条の突帯を貼り付ける。133、134は胴部。133は３条の突帯を、134は４条の突帯を貼り付ける。135は底部付近である。136 ～ 143はⅢ層出土の石器である。136は砂岩製で敲石・磨石として使用された。敲面は、表面上部、表面下部、側面中央部で磨面は表面、右側面、裏面である。137は砂岩製の打製石斧である。側辺を左右ともに数箇所打ち欠いている。138、139はともに砂岩製の敲石・磨石である。138は表、裏面、右側面を磨面として使用し、表面下部を敲面として使用している。139は半分近くが欠損している。表、裏面を磨面とし、側面は全面を敲面として使用している。140は砂岩製の砥石である。下部を欠損しているが、表面、右側面、裏面を砥面として使用している。141は砂岩製の台石である。表面、裏面の中央部



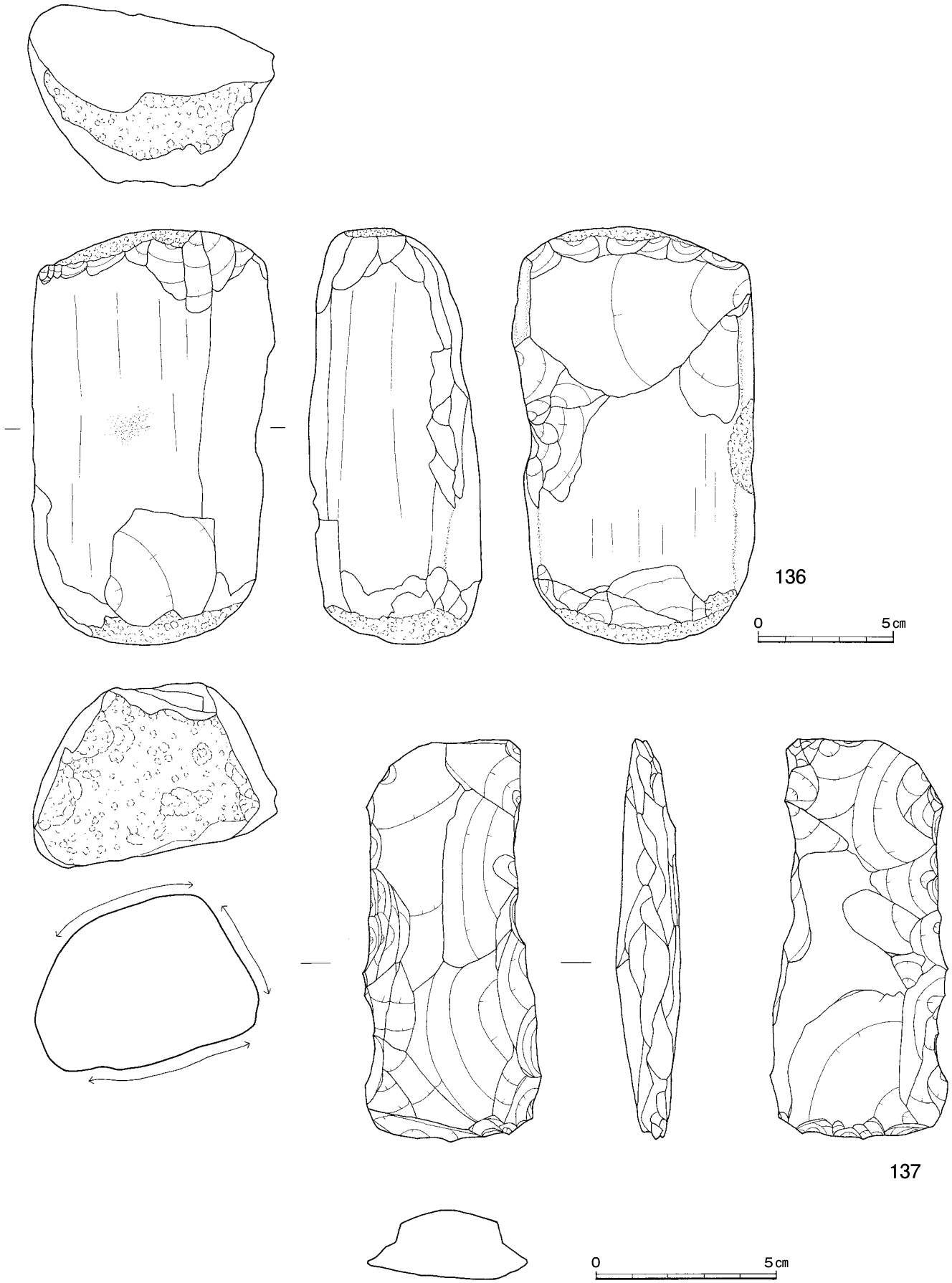
第36図　【包含層出土遺物実測図②　S＝1／3】



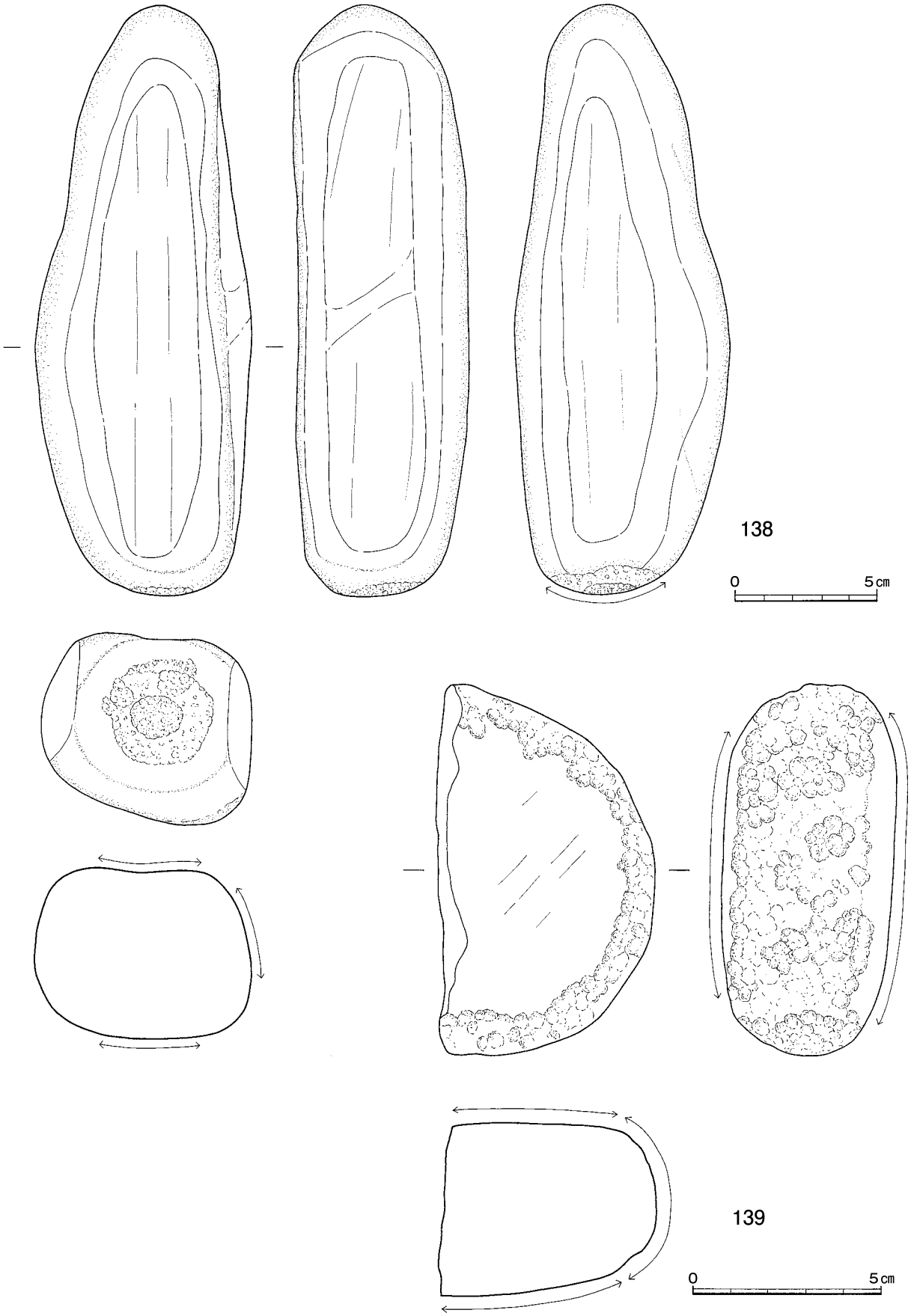
第37図 【包含層出土遺物実測図③ S＝1／3】

を使用している。142、143は砂岩製の砥石である。142は表面、表面下部、裏面を砥面としている。143は上部が欠損している。表面、表面下部、裏面を砥面として使用している。144は頁岩製の磨製石鏃で先端が欠損している。

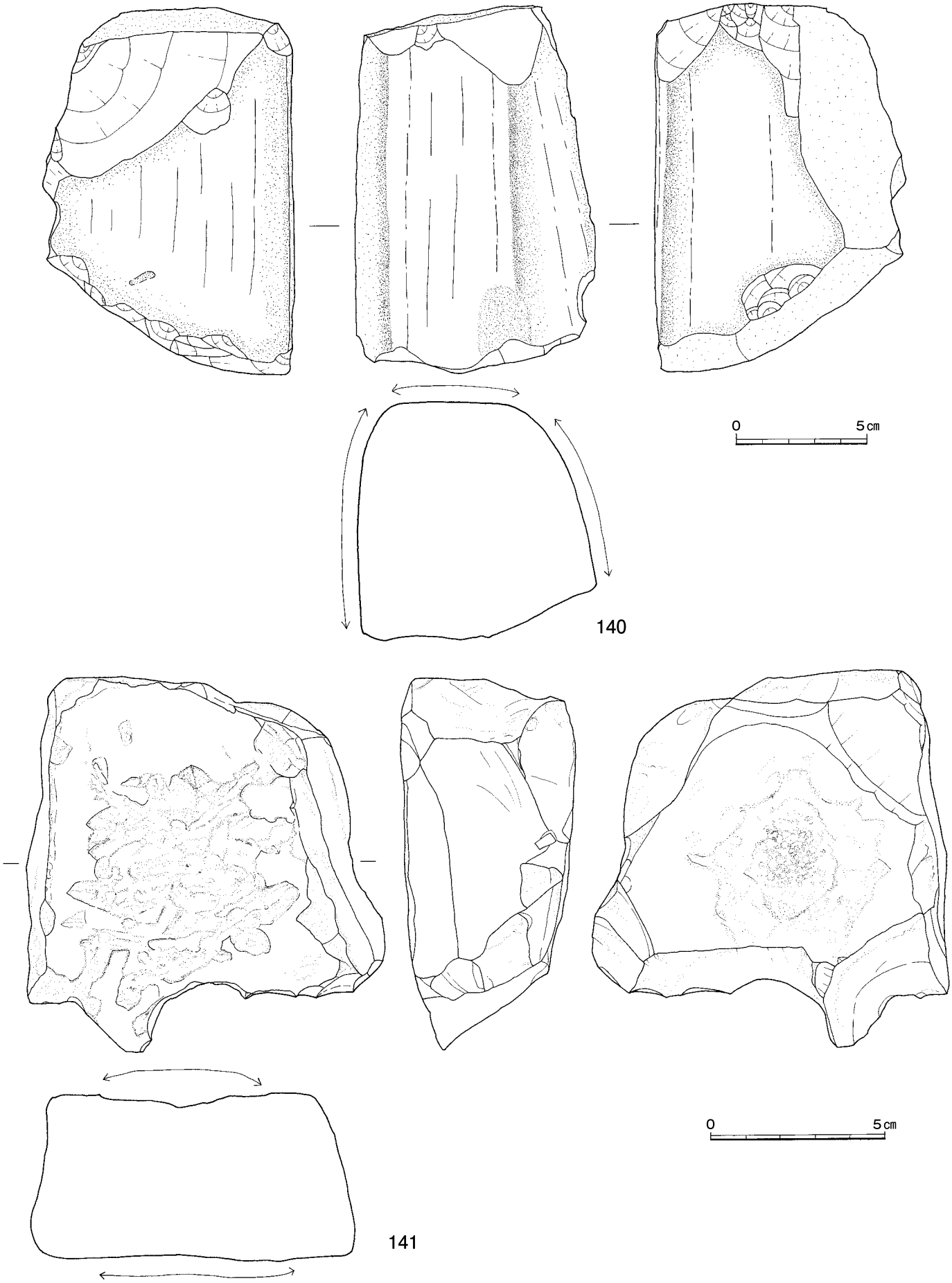
145から177までは包含層（第Ⅳa層、第Ⅳb層）出土の遺物である。145 ～ 161は甕である。145は頸部下に三角突帯を貼り付け、「く」の字状の口縁をもつ。口縁端部はわずかにくぼむ。146は頸部下に刻目突帯を貼り付け、「く」の字状の口縁をもつ。口縁端部はわずかにくぼみ、上向きとなる。147は鋤先状の口縁でわずかに内傾し、口縁端部は丸みを帯びる。148は内傾する口縁部に台形状の突帯を貼り付け、刻目を施す。149は緩やかな「く」の字状口縁で口縁端部はわずかにくぼむ。突帯を貼り付けていたと思われ、突帯部分が剥落している。150は三角突帯を貼り付け、「く」の字状口縁をもつ。口縁端部はわずかにくぼむ。151 ～ 153はいずれも「く」の字状の口縁で、口縁端部はわずかにくぼむ。154は鋤先状の口縁で、緩やかに外反する。155は肥厚の台形状突帯を貼り付け、緩やかに外反する。156は口縁部の一部で剥落が激しい。わずかに内傾し、ゆるやかに外反するタイプと考えられる。157 ～ 159は突帯を貼り付けた部分で、



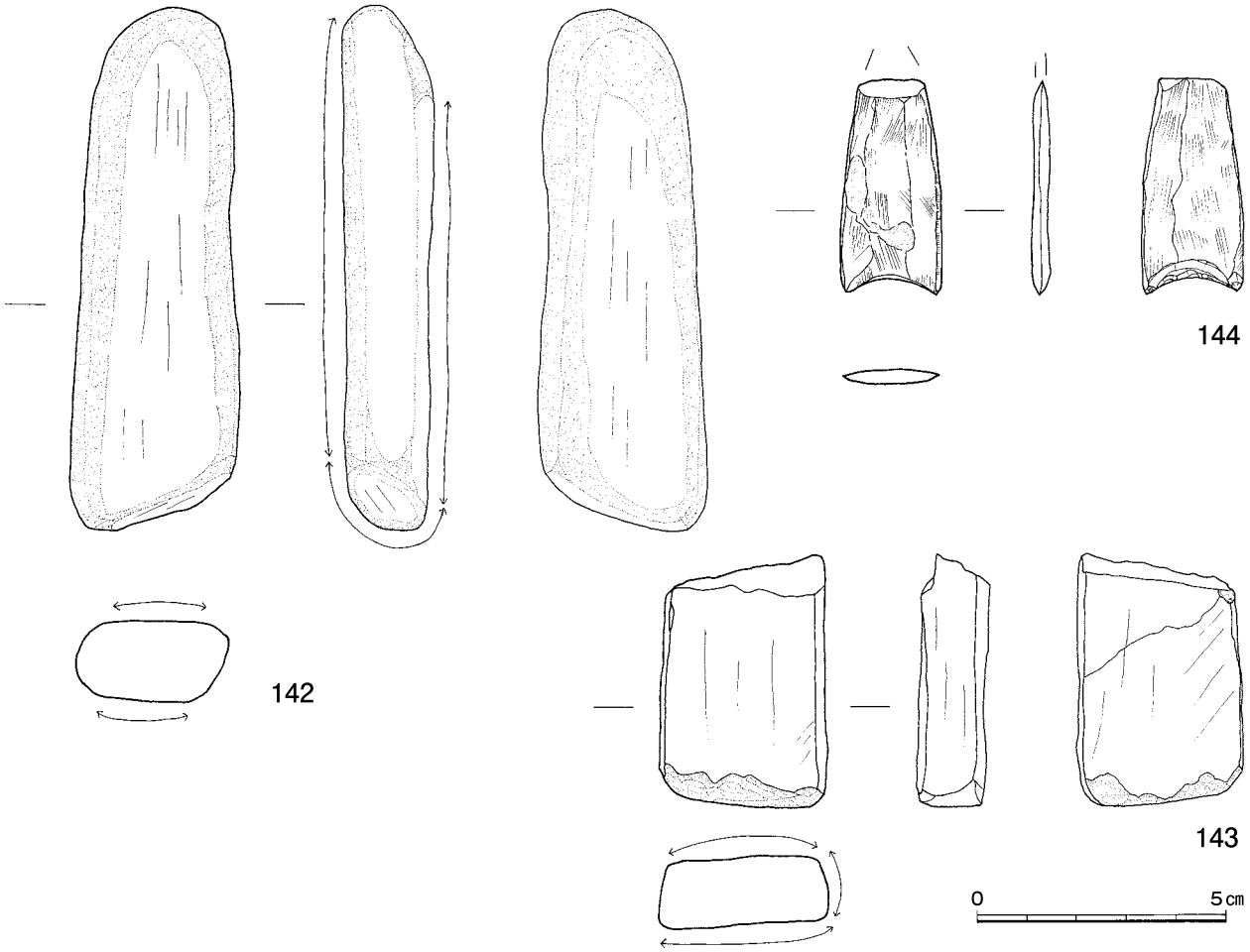
第38図　【包含層出土遺物実測図④　S＝1／2　S＝2／3】



第39図　【包含層出土遺物実測図⑤　S＝1／2　S＝2／3】



第40図　【包含層出土遺物実測図⑥　S＝1／2　S＝2／3】

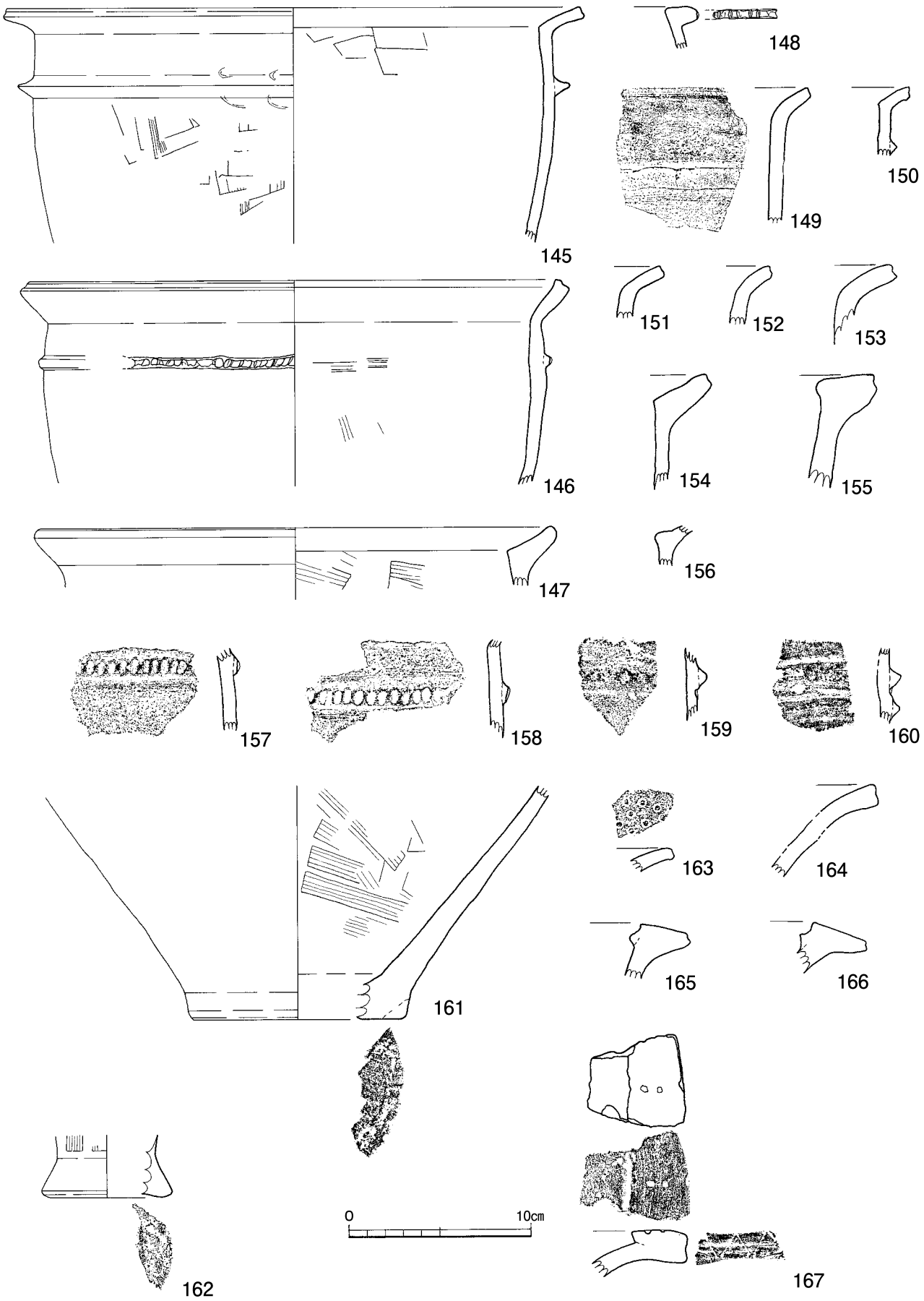


第41図 【包含層出土遺物実測図⑦ S＝2／3】

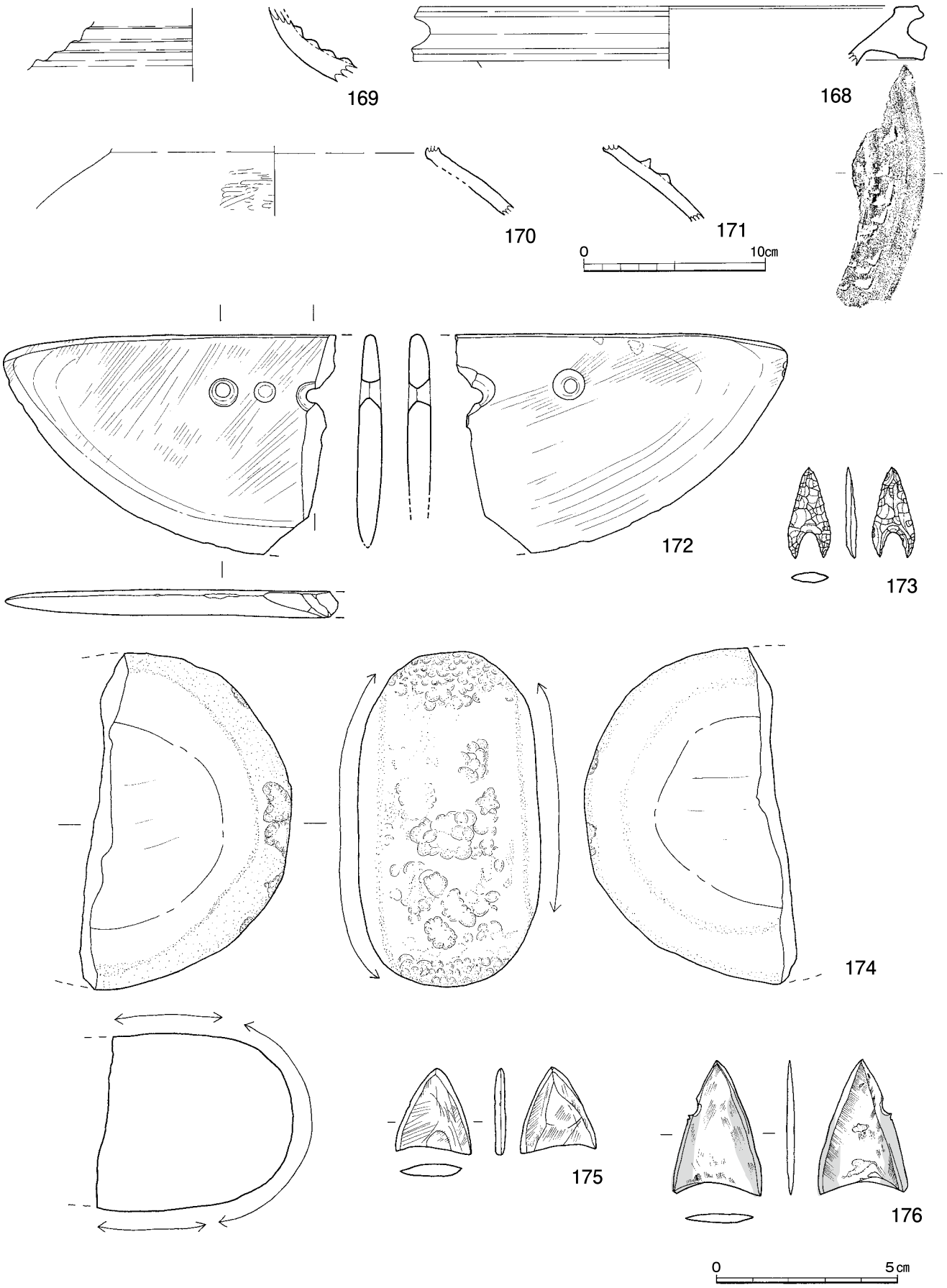
刻目を施す。161は平底の底部で、木の葉底となる。内面にハケ目を施す。162は平底の底部で端部は外に向く。163 ～ 167は壺の口縁部である。163、164は大きく外反し、163は内面に円形の竹管文を施す。164は端部がくぼむ。165、166は内面に突帯を貼り付け、口縁部は下方に下がる。167は口縁部に厚みを持たせ、内面が段状となるように貼り付けられる。168は壺の口縁部で、二又状をなす。外面に工具痕を残す。169、170、171は壺の肩部～頸部付近で169は4条の三角突帯を、171は2条の三角突帯を貼り付ける。172は頁岩製の石庖丁で穿孔を2箇所、未穿孔を1箇所もつ。途中で欠損しており、原形はわからない。両面、側面、背部を丁寧に研磨している。173は流紋岩製の打製石鏃である。全体が二等辺三角形を呈し、基部中央に抉りを大きく入れ、脚部を作り出している。174は砂岩製の敲石、磨石である。欠損しているが、表面、裏面ともに磨面として使用し、側面は敲面として使用し、上部、下部敲打痕が残る。175、176は頁岩製の磨製石鏃である。全体が二等辺三角形を呈し基部に浅い抉りが施される。177は砂岩製の凹石、砥石、敲石として使用されている。表面、裏面中央に径5 ～ 7cm程度の範囲でくぼみが見られ、中央部に著しい。その周辺は砥面として使用されている。上部は敲面として使用している。

（3） 古墳時代以降の遺物

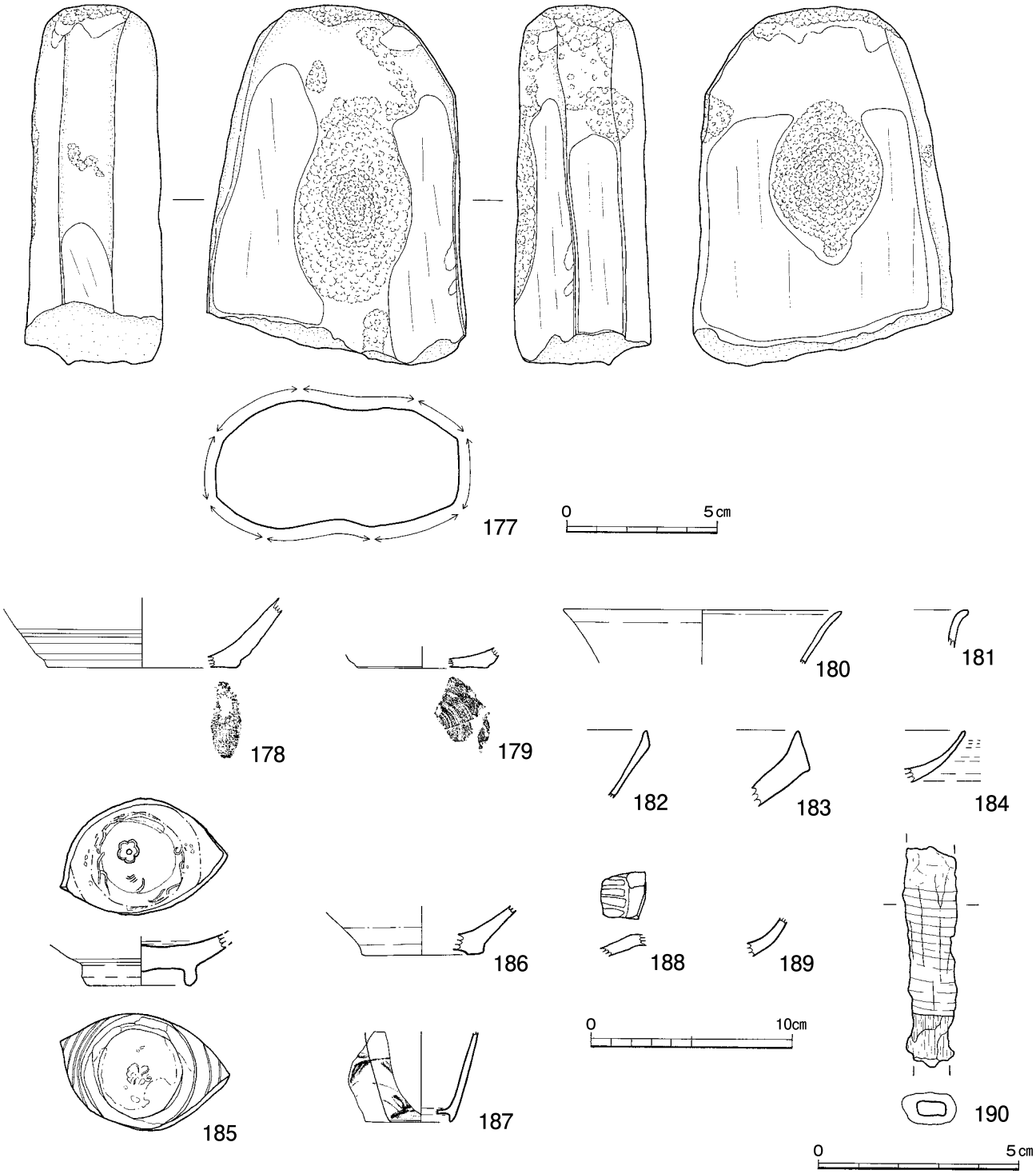
178、179はいずれも土師器である。178は坏の胴部から底部で、ヘラ切りで製作している。179は皿の



第42図　【包含層出土遺物実測図⑧　S＝1／3】



第43図　【包含層出土遺物実測図⑨　S＝1／3　S＝2／3】



第44図 【包含層出土遺物実測図⑩ S＝1／2 S＝1／3 S＝2／3】

底部で糸切り底である。180は白磁の碗。13C後半から14C前半の中国産と見られる。181は白磁の丸碗で、龍泉窯（D類）とみられる。182は白磁の碗、Ⅱ類白磁とみられる。183は擂鉢で、備前焼である。184は中国産の白磁。皿または坏であろう。15Cとみられる。185は青磁の碗。中国産で14C後半～15C前半とみられる。186は白磁の碗。11C後半～12C前半とみられる。187は磁器で肥前系の蕎麦猪口。188は青磁の盤。龍泉窯D類で13C後半～14C前半とみられる。189は陶器の碗。近世のもので薩摩とみられる。190は鉄鏃の茎である。木質が残存しており、樹皮で巻かれていた。

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
1	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1	(49.7)	－	－	横ナデ 横・縦方向のハケ目	横・斜方向のハケ目	良好	橙	橙	３mm以下の赤褐色・白色鉱物粒 ２mm以下の黒色・白色光沢鉱物粒 ２mm以下の灰白色粒を含む	貼付突帯
2	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1 SA10	(26.8)	－	－	縦・斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	橙	にぶい褐	３mm以下の無色光沢・赤褐色・白色鉱物粒を含む	刻目突帯
3	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1 SA10	(30.7)	－	－	沈線文 横ナデ	横方向のハケ目 ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	４mm以下の褐色粒 ２mm以下の黒雲母鉱物粒 微細な黄褐色粒を含む	
4	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1 SA3	(25.1)	－	－	縦・斜方向のハケ目 のあとミガキ	横ナデ 斜方向のハケ目のあと丁寧なナデ	良好	橙 にぶい橙	橙	２mm以下の灰白色・黒褐色・暗褐色鉱物粒を含む	スス付着
5	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1	－	－	－	横ナデ 縦方向のハケ目	縦方向のあと横方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１mm以下の無色透明鉱物粒 １mm以下の黒色粒 微細な灰褐色粒を含む	スス付着 刻目に布目痕
6	弥生土器	甕 口縁	SA1	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	灰黄褐	灰黄褐	１mm以下の金雲母鉱物粒 ２mm以下の白色半透明鉱物粒 微細なにぶい黄橙色粒を含む	スス付着
7	弥生土器	甕 胴部	SA1	－	－	－	縦・斜方向のハケ目	斜方向のハケ目	良好	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい橙	１mm以下の褐色・灰褐色砂粒 １mm以下の白色光沢鉱物粒を含む	スス付着
8	弥生土器	甕 胴部～底部	SA1	－	(8.3)	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい赤褐	にぶい黄褐	４mm以下の白色半透明鉱物粒 ３mm以下の金雲母鉱物粒 微細な黄褐色にぶい光沢粒を含む	
9	弥生土器	甕 胴部～底部	SA1	－	(7.0)	－	縦方向のナデ 風化	横方向のハケ目	良好	橙	黒褐	１mm以下の透明光沢粒 ３mm以下の明赤褐色・淡赤橙色・暗赤灰色・にぶい赤褐色粒を含む	底部剥落 指頭痕
10	弥生土器	甕 胴部～底部	SA1	－	(7.4)	－	縦・斜方向にハケ目	斜方向のハケ目	良好	浅黄	にぶい橙	１mm以下の黒色鈍光沢鉱物粒 １mm以下の灰白色・浅黄橙色粒 ５mm以下の灰白色鉱物粒を含む	
11	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA1 SA10	(25.2)	－	－	縦・斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい橙	２mm以下の赤褐色粒 １mm以下の灰褐色砂粒 １mm以下の白色光沢鉱物粒を含む	刻目突帯 スス付着
12	弥生土器	甕 口縁~底部付近	SA1 SA10	(26.7)	－	－	縦方向のハケ目	横ナデ 斜・横方向のハケ目	良好	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい橙	2.5mm以下の褐色粒 １mm以下の灰褐色砂粒 １mm以下の白色光沢鉱物粒を含む	刻目突帯 スス付着
13	弥生土器	甕 胴部～底部	SA1	－	－	－	ハケ目のあと横ナデ	風化あり	良好	灰黄 暗灰黄	灰黄 黒褐	１～２mmの灰褐色粒 １mm以下の透明光沢鉱物粒を含む	スス付着
14	弥生土器	壺 口縁～胴部	SA1	(8.8)	－	－	斜方向のハケ目 ミガキ 横ナデ	横方向のハケ目 縦方向のナデ 黒斑あり	良好	橙 にぶい褐	橙 黒褐	微細な無色透明光沢粒 ３mm以下の黒色・白色光沢鉱物粒 ４mm以下の赤褐色・灰白色粒を含む	
15	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA1	(25.3)	－	－	横ナデ	ミガキ	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	２mm以下の黄褐色粒 １mm以下の金雲母鉱物粒を含む	スス付着
16	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA1	(25.4)	－	－	横ナデ	横・縦ナデ 黒斑あり	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	３mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 ２mm以下の金雲母鉱物粒を含む	
17	弥生土器	壺 底部	SA1	－	(6.0)	－	横ナデ	剥離多く不明	良好	浅黄 黄灰	灰黄	１～２mmの灰色・黄色粒 １mm前後の透明・針状黒色光沢粒を含む	全体的に剥離
21	弥生土器	甕 口縁～底部	SA2	19.6	－	－	横ナデ 縦方向のハケ目 風化気味	横ナデ	良好	黒褐	にぶい褐	１mm以下の乳白色・灰色粒 １mm以下の透明光沢鉱物粒 ２mm以下の針状黒色光沢鉱物粒を含む	工具痕 指頭痕
22	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA2	－	－	－	横ナデ 縦方向のハケ目 黒変あり	横ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	１mm以下の透明光沢粒 ２mm以下の茶色・灰色・黒灰色粒を含む	
23	弥生土器	甕 口縁～頸部	SA2	－	－	－	横ナデ 縦・斜方向のハケ目	横方向のハケ目	良好	黒褐	にぶい黄橙	１mm以下の黒色・茶色・乳白色粒 微細な透明・黒色光沢鉱物粒 １mm前後の透明光沢鉱物粒を含む	
24	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA2 SA4 SA6 SA10	(40.8)	－	－	横ナデ 斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄橙	２mm以下の褐灰色・黒褐色粒 微細な無色・角錐状黒色光沢鉱物粒を含む	スス付着 指頭痕
25	弥生土器	甕 底部	SA2	－	5.5	－	横方向のハケ目 縦方向のナデ	風化あり	良好	灰褐 橙	橙	１mm以下の灰白色・明褐灰色・にぶい橙色粒 １mm前後の白色半透明鉱物粒を含む	
26	弥生土器	甕 底部	SA2	－	(7.4)	－	縦方向のハケ目 横ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	黒	１mm以下の褐灰色・暗赤褐色・灰白色粒 0.5mm以下の金雲母・黒色鋭光沢鉱物粒を含む	
27	弥生土器	甕 胴部～底部	SA2	－	5.4	－	横ナデ 著しい風化	横ナデ	良好	にぶい赤褐 にぶい橙	黒褐	２mm以下の赤褐色・黄褐色砂粒 ３mm以下の白色やや透明な鈍光沢粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	

第１表　【土器観察表１】

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
30	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA3 SA4	(23.2)	－	－	横ナデ 斜方向のナデ	横ナデ 斜方向のナデ	良好	にぶい橙 橙	にぶい橙	６mm以下の暗赤褐色・にぶい赤褐色・黒褐色・褐灰色・黒色粒を含む	凹線 指頭痕 スス付着
31	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA3	(17.3)	－	－	斜・縦方向のナデ	横ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	２mm以下の暗赤褐色・にぶい赤褐色粒 １mm以下の灰白色粒を含む	スス付着
32	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA3	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	黄橙	黄橙	２mm以下の褐灰色・灰褐色・灰白色粒 ２mm以下の角柱状黒色鋭光沢鉱物粒を含む	指頭痕
33	弥生土器	甕 底部	SA3	－	7.1	－	横ナデ	―	良好	にぶい橙	―	１mm以下のにぶい褐色･褐灰色･灰褐色･灰黄褐色粒を含む	
34	弥生土器	壺 胴部～底部	SA3	－	(8.0)	－	縦・斜方向のハケ目のあとミガキ	横方向のハケ目のあとミガキ	良好	にぶい褐 黒 赤橙	にぶい褐 にぶい黒	２mm以下の明赤褐色・にぶい橙色・灰白色・黒褐色・褐灰色粒を含む	スス付着
37	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA4	27.1	－	－	横ナデ 斜方向のハケ目のあとナデ	横ナデ 斜方向のハケ目のあとナデ	良好	灰黄褐 黒	にぶい黄橙 褐灰	２mm以下の灰乳白色・褐色粒 ２mm以下の透明・黒色光沢鉱物粒を含む	刻目突帯 スス付着
38	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA4	28	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	橙	橙	1.5mm以下の灰褐色・灰白色粒 １mm以下の白色透明・黒色光沢鉱物粒を含む	刻目突帯 工具痕
39	弥生土器	甕 口縁	SA4	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	黒褐	暗褐	４mm以下の橙色・暗赤褐色・灰白色粒 ３mm以下の金雲母鉱物粒を含む	
40	弥生土器	甕 胴部～底部	SA4	－	7.0	－	縦方向のハケ目 横ナデ	横ナデ 黒斑	良好	橙	にぶい橙	５mm以下の褐灰色・灰白色・黒褐色・黒色粒を含む	スス付着
41	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA4	12.4	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	橙	橙	２mm以下の暗赤褐色・明褐灰色・黒褐色粒を含む	
42	弥生土器	壺 口縁	SA4	－	－	－	横ナデ	横ナデ 黒斑	良好	橙	にぶい橙	１mm以下の褐灰色・黒褐色粒 １mm以下の白色透明鉱物粒を含む	竹管文
61	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA5	(19.6)	－	－	横ナデ 斜・縦方向のハケ目	横ナデ 斜・縦方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色透明鈍光沢粒 １mm以下のにぶい赤褐色・褐灰色粒を含む	指頭痕 スス付着
62	弥生土器	甕 胴部	SA5	－	－	－	斜方向のハケ目	斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	６mm以下の暗赤褐色黒褐色・にぶい赤褐色・褐灰色粒を含む	貼付突帯 工具痕
63	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA5	－	－	－	横ナデ	風化著しく横ナデわずかに残る	良好	灰黄褐	灰黄褐	３mm以下の茶色・乳白色粒 １mm以下の白色不透明・透明光沢・角柱状黒色鋭光沢鉱物粒を含む	
64	弥生土器	壺 口縁	SA5	－	－	－	横・斜方向のナデ	横ナデ	良好	灰黄褐	灰黄褐	２mm以下の灰色・黒色・乳白色粒 １mm以下の白色不透明・透明光沢・角柱状黒色鋭光沢鉱物粒を含む	
66	弥生土器	壺 口縁～胴部	SA7 SA9	(19.6)	－	－	横ナデ ハケ目	横ナデ 黒斑	良好	橙	灰黄褐	１mm以下のにぶい赤褐色・褐灰色・灰白色粒 0.5mm以下の黒色・白色鋭光沢鉱物粒を含む	円形浮文 工具痕
67	弥生土器	甕 口縁	SA9	－	－	－	横ナデ 横方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	褐灰	にぶい黄橙	１mm以下の透明光沢鉱物粒 １mm以下の赤褐色粒 微細な黒色粒を含む	スス付着
68	弥生土器	甕 頸部	SA9	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	灰黄褐	にぶい黄橙	１mm以下の透明光沢鉱物粒 １mm以下の褐色・灰色・白色・乳白色粒を含む	刻目突帯 スス付着
69	弥生土器	甕 口縁	SA9	(29.6)	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい褐 にぶい橙	にぶい橙	１mm以下の透明光沢・白色不透明鉱物粒 １mm以下の黒色・灰色・茶褐色・褐色粒を含む	
73	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA8 SL1	(23.8)	－	－	斜方向のハケ目 ナデ 風化気味	斜方向のナデ	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	0.2mm以下の透明光沢・灰色・灰黄色・淡橙色粒を含む	スス付着
74	弥生土器	甕 口縁～底部	SA8	(23.3)	－	－	横ナデ 斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	にぶい黄褐 黒褐	灰黄褐 黒褐	２mm以下の灰白色粒 １mm大の黒色光沢・無色鉱物粒を含む	スス付着
75	弥生土器	甕 口縁～底部	SA8 SL1	(13.5)	5.65	(15.2)	横ナデ ミガキ 縦方向のハケ目	横ナデ ナデ ハケ目	良好	灰黄褐 黒橙	灰黄褐 にぶい黄橙	２mm以下の透明光沢・黒色・灰色・乳灰色粒 １mm以下の黒色鋭光沢粒を含む	工具痕 指頭痕 スス付着
76	弥生土器	壺 胴部	SA8	－	－	－	横ナデ 横・斜方向のハケ目	ナデ	良好	にぶい黄橙 黒	灰黄褐	２mm以下の黒色粒 ２mm以下の白色不透明・透明光沢・柱状黒色鋭光沢鉱物粒を含む	貼付突帯
77	弥生土器	甕 胴部	SA8	－	－	－	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	良好	灰黄褐 黒	にぶい黄褐	２mm以下の黒色・灰色・茶色粒 ２mm以下の白色不透明・透明光沢・柱状黒色鋭光沢鉱物粒を含む	刻目突帯

第２表　【土器観察表２】

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
83	弥生土器	甕 口縁	SA10	－	－	－	風化著しい	横ナデ	良好	浅黄 橙	浅黄 橙	１mm以下の褐色・灰色砂粒を含む	
84	弥生土器	甕 底部	SA10	－	(5.2)	－	ナデ 風化気味	ナデ	良好	灰黄褐	黒	１mm以下の灰白色・にぶい赤褐色・橙色砂粒を含む	
85	弥生土器	壺 胴部～底部	SA10	－	(9.1)	－	ハケ目のあとナデ	横・斜方向のナデ	良好	橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の灰白色・灰褐色砂粒を含む	スス付着
86	弥生土器	壺 口縁～頸部	SA11	(9.0)	－	－	横ナデ	縦ナデ	良好	にぶい黄褐	灰黄褐	１mm以下白色・褐色砂粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	瀬戸内系凹線
87	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA12	－	－	－	横ナデ 横方向のハケ目	横ナデ 縦・斜・横方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	３mm以下の赤褐・灰色砂粒 ２mm以下の無色透明光沢鉱物粒を含む	刻目突帯 スス付着
88	弥生土器	甕 口縁～胴部	SA12	－	－	－	横ナデ 斜方向のハケ目	斜ナデ	良好	暗褐	にぶい黄橙	４mm以下で赤褐色砂粒 １mm以下で黒色光沢鉱物粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	スス付着
89	弥生土器	壺 口縁～胴部	SA11 SA12	(13.4)	－	－	横ナデ 斜方向のミガキ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	浅黄橙	１mm以下の赤褐色砂粒 １mm以下の黒色・白色光沢鉱物粒を含む	穿孔 工具痕 スス付着
90	弥生土器	甕 口縁～胴部	SL1	－	－	－	横方向のハケ目 横ナデ	横・縦ナデ 斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	３mm以下の黒色・灰色・褐色粒 ２mm以下の透明光沢・角柱状黒色鋭光沢・乳白色鉱物粒を含む	貼付突帯 指頭痕 スス付着
91	弥生土器	甕 胴部～底部	SL1	－	7.4	－	縦方向のハケ目 ナデ	ナデ	良好	明黄褐	にぶい黄橙	１mm以下の透明光沢鉱物粒 ２mm以下の黒色・白色・赤褐色鉱物粒を含む	
92	弥生土器	壺 口縁	SL1	－	－	－	横ナデ 斜・縦方向のハケ目	横ナデ	良好	橙	にぶい橙 黒	２mm以下の乳白色・透明光沢鉱物粒 ３mm以下の灰色・褐色粒を含む	
93	弥生土器	壺 口縁	SL1	－	－	－	剥離多く不明	縦・横ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	３mm以下の赤褐色粒 ２mm以下の黒色・白色光沢鉱物粒を含む	円形浮文
94	弥生土器	壺 胴部～底部	SL1	－	(6.6)	－	縦方向のハケ目 ナデ	ナデ	良好	にぶい褐	褐灰	１mm以下の白色砂粒 ２mm以下の白色鈍光沢粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	葉痕
96	縄文土器	浅鉢 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１mm以下の灰色砂粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	スス付着 沈線文
97	縄文土器	浅鉢 口縁	Ⅲ層	－	－	－	ミガキ 丁寧なナデ	丁寧な横ナデ	良好	黒褐	黒褐 にぶい褐	１mm以下の褐色砂粒 微細な無色光沢鉱物粒を含む	スス付着 沈線文
98	縄文土器	鉢 口縁	Ⅳa層	－	－	－	ミガキ	丁寧なナデ	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐 褐灰	微細な無色光沢鉱物粒 微細な黄褐色砂粒を含む	赤色顔料
99	縄文土器	鉢 口縁	Ⅳa層	(18.0)	－	－	ミガキ	丁寧なナデ	良好	黒褐	灰黄褐	微細な無色光沢鉱物粒 １mm以下の黄褐色砂粒を含む	
100	縄文土器	鉢 口縁	Ⅳa層	－	－	－	縦方向のミガキ 横ナデ	丁寧なナデ 指頭痕	良好	黒	黒褐	微細な無色光沢鉱物粒 １mm以下の黄褐色砂粒を含む	
101	縄文土器	鉢 頸部～胴部	Ⅲ Ⅳa層	－	－	－	棒状工具による横方向の連続刺突文 ナデ	横ナデ	良好	黒褐 にぶい橙	黒褐 にぶい橙	１mm以下の無色光沢鉱物粒 ２mm以下の黄褐色砂粒を含む	沈線文 種子圧痕
102	縄文土器	鉢 頸部～肩部	Ⅳb層	－	－	－	横方向の条痕	横方向の条痕のあとナデ	良好	にぶい黄褐	灰黄褐	１mm以下の透明光沢・白色鉱物粒 ４mm以下の黒色・灰色・茶色・白色粒を含む	
103	縄文土器	鉢 胴部	Ⅲ層	－	－	－	タタキ	横ナデ	良好	橙	にぶい褐	1mm以下の角柱状黒色光沢・白色・透明鉱物粒 1mm以下の赤褐色・にぶい赤褐色・灰白色・にぶい橙色・黒褐色・褐灰色粒を含む	穿孔 スス付着
104	縄文土器	鉢 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	強いナデ 横ナデ	横・斜方向のハケ目 黒斑	良好	橙	にぶい橙	１mm以下の無色鈍光沢鉱物粒 ２mm以下の灰白色・褐灰色・にぶい黄橙色・黒褐色粒を含む	貼付突帯 スス付着
105	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	(24.2)	－	－	横ナデ ハケ目 一部黒変	横・斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２mm以下の白色不透明・黒色鋭光沢鉱物粒 ２mm以下の茶色・灰色・黒灰色粒を含む	沈線文 指頭痕
106	弥生土器	甕 口縁	Ⅲ層	(24.7)	－	－	横ナデ	横ナデ 強いナデ	良好	にぶい黄 明黄褐	にぶい黄橙 橙	１mm以下の無色鈍光沢鉱物粒 ２mm以下の灰白色・にぶい橙色・黒褐色・褐灰色粒を含む	
107	弥生土器	甕 口縁	Ⅲ層	(18.2)	－	－	横ナデ	横ナデ ハケ目 黒斑	良好	灰黄褐	灰黄	微細な無色透明鈍光沢粒 ２mm以下の明黄褐色・灰白色・にぶい橙色粒を含む	

第３表　【土器観察表３】

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
108	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 横・斜方向のハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	浅黄橙	にぶい橙	微細で無色光沢鉱物粒 １mm以下の褐色・灰色・黒色砂粒を含む	刻目突帯
109	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ 一部黒変	良好	橙	にぶい黄橙	２mm以下の茶色・灰色・黒灰色粒 １mm以下の透明光沢・白色不透明鉱物粒を含む	
110	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１mm以下の灰色・黒灰色粒 １mm以下の白色不透明・透明光沢・黒色光沢鉱物粒を含む	
111	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 一部ハケ目	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	褐灰	にぶい橙	微細な無色透明鈍光沢粒 ３mm以下のにぶい赤褐色･黒色･灰白色･にぶい黄橙色粒を含む	
112	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 横方向のハケ目	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１mm以下の無色透明鈍光沢粒 １mm以下の浅黄橙色・灰白色粒を含む	
113	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	風化著しい	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	橙	橙	１mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 １mm以下で灰色・黒色砂粒を含む	刻目突帯
114	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ ハケ目	横ナデ ハケ目	良好	灰黄褐	にぶい黄橙	１mm以下の透明光沢鉱物粒 １mm以下の茶褐色・灰色粒を含む	工具痕 スス付着
115	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ，ハケ目 ハケ目のあと強い横ナデ	横ナデ ハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	１mm以下の針状黒色・透明光沢鉱物粒 １mm以下の茶褐色・灰色粒を含む	工具痕
116	弥生土器	甕 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	黒褐 褐	灰褐	１mm前後の透明光沢粒 １～２mmの白色半透明鉱物粒 微細な金色砂粒を含む	沈線文
117	弥生土器	甕 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	黒褐	灰黄褐	２mm以下の透明光沢・白色半透明・金色鉱物粒 ２mm以下の白色・茶色粒を含む	沈線文
118	弥生土器	甕 胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 斜方向のハケ目	横ナデ 横方向のハケ目	良好	灰黄褐	灰黄褐	微細な無色光沢鉱物粒 １mm以下の白色鉱物粒 １mm以下の灰色砂粒を含む	刻目突帯 スス付着
119	弥生土器	甕 胴部～底部	Ⅲ層	－	(8.9)	－	横ナデ 縦方向のハケ目	ナデ 黒斑	良好	明赤褐	黒褐	２mm以下の金色光沢・白色鉱物粒 １mm以下の無色透明光沢鉱物粒 １mm以下の黒褐色・にぶい黄橙色粒を含む	
120	弥生土器	甕 底部	Ⅲ層	－	(8.6)	－	横ナデ ナデ	ナデ 黒斑	良好	灰黄褐	黒褐	３mm以下の白色鈍・透明・黒色光沢鉱物粒 ２mm以下の褐色・灰色・白色粒 ５～10mmの灰色岩片を含む	
121	弥生土器	甕 胴部～底部	Ⅲ層	－	(10.6)	－	縦方向のハケ目	ナデ 斜・横方向のハケ目	良好	にぶい黄橙 黒褐	褐灰 灰黄褐	２mm以下の白色不透明鉱物粒 ２mm以下の黒色・灰色・茶色・黄白色粒を含む	
122	弥生土器	甕 胴部～底部	Ⅲ層	－	(9.4)	－	縦方向のハケ目	ナデ 剥離あり	良好	にぶい褐	にぶい黄橙	５mm以下の白色鈍光沢・黒色鉱物粒 ２mm以下の灰白色粒を含む	葉脈痕
123	弥生土器	甕 胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ ナデ	良好	にぶい橙	にぶい黄橙	１mm以下の無色・黒色光沢鉱物粒 ３mm以下の赤褐色粒 １mm以下の灰色砂粒を含む	種子圧痕
124	弥生土器	甕 胴部	Ⅲ層	－	－	－	ナデ	横ナデ	良好	にぶい赤褐	にぶい黄褐	微細な無色透明光沢・１mm以下の黒色鈍光沢・４mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 ３mm以下の黄褐色不定形粒を含む	種子圧痕 スス付着
125	弥生土器	壺 口縁～胴部	Ⅲ層	(10.9)	－	－	横ナデ 縦・横方向のハケ目	斜方向のハケ目	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２mm以下の赤褐色粒 １mm以下の灰褐色粒を含む	穿孔
126	弥生土器	壺 口縁～頸部	Ⅲ層	(16.4)	－	－	横方向のハケ目 横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	微細な黒色光沢鉱物粒 １mm以下の赤褐色・にぶい赤褐色・黒色砂粒を含む	
127	弥生土器	壺 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	にぶい黄橙	褐灰	微細な光沢鉱物粒 １mm以下の黒色・褐灰色・灰白色・にぶい褐色粒を含む	
128	弥生土器	壺 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ 風化気味	横ナデ	良好	にぶい黄褐	にぶい黄橙	１～２mmの白色半透明鉱物粒 微細な光沢粒を含む	沈線文
129	弥生土器	壺 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	明黄褐	にぶい橙	１mm以下の黒色鋭光沢鉱物粒 ２mm以下の赤褐粒 １mm以下の黄褐色粒を含む	
130	弥生土器	壺 口縁	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	明黄褐	明黄褐	１mm以下の黒色鋭光沢鉱物粒 １mm以下の黄褐色粒を含む	
131	弥生土器	壺 頸部～胴部	Ⅲ層	－	－	－	ナデ	ナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	２mm以下の透明・角柱状黒色光沢鉱物粒 ３mm以下の茶色・黒色粒 １mm以下の白色粒を含む	

第４表　【土器観察表４】

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
132	弥生土器	壺 胴部	Ⅲ層	－	－	－	横ナデ	ナデ	良好	にぶい橙	橙	1mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 1mm以下の黒色・透明光沢鉱物粒 1mm以下の褐色・黄白色粒を含む	貼付突帯
133	弥生土器	壺 胴部	Ⅲ層	－	－	－	ナデ 一部風化気味	全体的に風化	良好	褐灰	にぶい黄褐	微細な透明・黒色光沢鉱物粒 4mm以下の白色不透明鉱物粒 2mm以下の茶色粒を含む	貼付突帯
134	弥生土器	壺 胴部	Ⅲ層 Ⅳa層	－	－	－	ナデ 斜方向のハケ目 一部黒斑	ナデ 風化気味 一部黒斑	良好	にぶい褐 褐灰	にぶい褐 褐灰	2mm以下の金雲母・透明光沢・黒色・金色鉱物粒 3mm以下の赤褐色・白色不透明鉱物粒 1mm以下の黄白色粒を含む	貼付突帯
135	弥生土器	壺 胴部	SB5	－	－	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ 黒斑	良好	明黄褐色	にぶい黄褐	2mm以下の灰白色・灰色粒 1mm以下の黒色・透明光沢鉱物粒含む	指頭痕
145	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	(31.4)	－	－	横・縦方向のナデ	ナデ，黒斑 一部横方向のハケ目	良好	にぶい橙	灰褐	1mm以下の角柱状黒色光沢・白色透明鉱物粒 2mm以下の白色・黒色鉱物粒 5mm以下の褐色岩片を含む	貼付突帯 指頭痕 スス付着
146	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	(28.7)	－	－	風化気味 横ナデ	横ナデ 横・斜方向のハケ目 のあとナデ	良好	橙	明褐	2mm以下の白色鉱物粒 2mm以下の黒褐色・暗褐色・褐色・灰白色・褐灰色粒を含む	刻目突帯 凹線 スス付着
147	弥生土器	甕 口縁	Ⅳa層	(27.7)	－	－	横ナデ	横ナデ 斜方向のハケ目	良好	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の透明・黒色光沢鉱物粒 2mm以下の白色鉱物粒 2mm以下の茶色・褐色・灰色粒を含む	
148	弥生土器	甕 口縁	Ⅳa層	－	－	－	縦方向のハケ目 横ナデ 風化気味	横ナデ	良好	橙	橙	2mm以下の白色光沢鉱物粒 1mm以下の無色透明鉱物粒 1mm以下の暗褐色・褐色・灰白色粒を含む	刻目突帯 指頭痕
149	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい褐	1mm以下の黒色・白色光沢鉱物粒 1mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 2mm以下の灰褐色粒を含む	スス付着 突帯剥離
150	弥生土器	甕 口縁	Ⅳb層	－	－	－	横ナデ	横ナデ 黒斑	良好	灰黄褐	褐灰 黒褐	1mm以下の透明・黒色光沢鉱物粒 1mm以下の灰色・白色粒を含む	貼付突帯 指頭痕
151	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙	橙	3mm以下の赤褐色鈍光沢・白色鉱物粒 2mm以下の褐灰色粒を含む	スス付着
152	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白色・透明光沢鉱物粒 2mm以下の赤褐色・灰白色粒を含む	スス付着
153	弥生土器	甕 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ 一部風化	横ナデ 一部斜方向のナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい褐 黒褐	微細な無色光沢鉱物粒 1mm以下の褐色・黄褐色砂粒 5mm以下の灰色岩片を含む	スス付着
154	弥生土器	甕 口縁～胴部	Ⅳa層	－	－	－	ナデ 横ナデ 一部風化	横ナデ 強い横ナデ	良好	暗褐色	にぶい黄褐	3mm以下の黒色・赤褐色鈍光沢鉱物粒 3mm以下の金色・白色鉱物粒 1mm大の灰白色粒を含む	スス付着
155	弥生土器	甕 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ 横方向のハケ目	横ナデ 横方向のハケ目 やや強いナデ	良好	にぶい橙	にぶい褐	1mm以下の金雲母鉱物粒 1mm以下の白色・赤褐色砂粒 2mm以下の白色鈍光沢鉱物粒を含む	スス付着
156	弥生土器	甕 口縁	Ⅳa層	－	－	－	ナデ	ナデ	良好	黒褐 褐灰	橙	1mm以下の透明光沢鉱物粒 1mm以下の黒色・灰色・茶色・白色粒を含む	スス付着
157	弥生土器	甕 胴部	Ⅳa層	－	－	－	横・斜方向のハケ目	横方向のハケ目 黒斑	良好	にぶい褐	褐灰	1mm以下の黒色・透明光沢鉱物粒 2mm以下の黒色・灰色・茶色・白色粒を含む	刻目突帯 布痕
158	弥生土器	甕 胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の乳白色鉱物粒 3mm以下の黒色・灰色・褐色・茶色粒を含む	刻目突帯 スス付着
159	弥生土器	甕 胴部	Ⅳa層	－	－	－	風化著しい	ハケ目のあと横ナデ	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の白色不透明鉱物粒 2mm以下の黒色光沢鉱物粒 4mm以下の黒色・灰色・褐色粒を含む	刻目突帯 種子圧痕
160	弥生土器	甕 胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	風化著しい	良好	灰黄褐	灰褐	微細な透明光沢鉱物粒 2mm以下の白色不透明鉱物粒 4mm以下の灰色・褐色・黄白色粒を含む	貼付突帯 種子圧痕
161	弥生土器	甕 胴部～底部	Ⅳa層	－	(11.7)	－	風化著しい	横・斜方向のハケ目 横ナデ	良好	にぶい褐 褐灰	褐 黒褐	1mm以下の黒色鋭・無色透明光沢鉱物粒 1mm以下の白色鉱物粒 5mm以下の黒褐色・褐灰色・明赤褐色粒を含む	木の葉底
162	弥生土器	甕 底部	Ⅳa層	－	(7.2)	－	縦方向のハケ目，横ナデ	―	良好	橙	―	1mm以下の無色透明光沢・白色鉱物粒 4mm以下の褐灰色・黒褐色・黄灰色粒を含む	
163	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	橙	橙 にぶい褐	微細な無色光沢鉱物粒 1mm以下の褐色・灰色砂粒を含む	竹管文
164	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ 縦方向のハケ目	横ナデ ナデ 一部風化	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	微細な無色光沢鉱物粒 1mm以下で褐色・黄褐色砂粒を含む	

第５表　【土器観察表５】

番号	種別	器種部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
165	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ 一部縦ナデ	横ナデ	良好	灰褐	灰褐	２mm以下の金雲母・白色不透明鉱物粒 １mm以下の赤色・黄白色粒を含む	
166	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	褐	褐	２mm以下の金雲母・白色不透明鉱物粒 １mm以下の黄白色粒を含む	指頭痕
167	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	－	－	－	横・縦ナデ	横・縦・斜方向のナデ	良好	にぶい橙	にぶい橙	４mm以下の白色鈍光沢鉱物粒 微細な透明光沢鉱物粒 １mm以下の灰色・茶色・白色粒を含む	沈線文 種子圧痕
168	弥生土器	壺 口縁	Ⅳa層	(27.3)	－	－	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい褐 黒褐	褐 黒褐	微細な金色鉱物粒 ３mm以下の金雲母・白色・黒色・赤色鉱物粒 微細な黄白色粒を含む	工具痕
169	弥生土器	壺 頸部	Ⅳa層	－	－	－	－	縦ナデ	良好	にぶい橙	にぶい黄褐	１mm以下の金雲母鉱物粒 ３～５mmの赤褐色粒 １mm以下の黄褐色砂粒を含む	突帯（４条）
170	弥生土器	壺 頸部～胴部	Ⅳa層	－	－	－	横方向のミガキ 一部風化	ナデ 剥離多い	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	微細な無色光沢鉱物粒 １mm以下の赤褐色・褐色・灰色砂粒を含む	
171	弥生土器	壺 頸部～胴部	Ⅳa層	－	－	－	横ナデ 縦方向のハケ目	横ナデ	良好	灰黄褐	黒褐	１mm以下の黒色鈍光沢・無色光沢鉱物粒 ２mm以下の黄褐色粒を含む	スス付着 突帯（２条）
178	土師器	坏 胴部～底部	Ⅲ層	－	(9.4)	－	回転ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄橙	橙	微細な透明光沢鉱物粒 微細な黒色粒を含む	ヘラ切り
179	土師器	皿 底部	Ⅲ層	－	(6.6)	－	回転ナデ	回転ナデ	良好	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な透明光沢鉱物粒 微細な黒色粒を含む	糸切り底
180	白磁	碗 口縁	カクラン	(13.8)	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉 露胎（口縁端部）	堅致	灰白	灰白	精良	太宰府分類Ⅸ類，13c後半～14c前半
181	青磁	碗 口縁	Ⅲ層	－	－	－	回転ナデ 施釉（貫入）	回転ナデ 施釉（貫入）	堅致	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	龍泉窯Ⅲ類
182	白磁	碗 口縁	Ⅲ層	－	－	－	回転ナデ 施釉（貫入）	回転ナデ 施釉（貫入）	堅致	灰白	灰白	精良	太宰府分類Ⅱ類
183	陶器	擂鉢 口縁	Ⅲ層	－	－	－	回転ナデ 施釉 露胎（口縁端部）	回転ナデ 施釉 露胎（口縁端部）	堅致	黒褐	黒褐	精良	備前
184	白磁	Ⅲor坏 口縁～胴部	Ⅲ層	－	－	－	回転ナデ 施釉（貫入）	回転ナデ 施釉（貫入）	堅致	灰白	灰白	精良	中国産15c
185	青磁	碗 底部	Ⅲ層	－	(5.2)	－	回転ナデ 施釉 露胎（高台）	回転ナデ 施釉 蛇の目釉剥ぎ	堅致	灰	灰	精良	龍泉窯Ⅳ類14C後半～15C前半
186	白磁	碗 胴部～底部	一括	－	(6.0)	－	回転ナデ 施釉 露胎（高台）	回転ナデ 化粧土を施したのち施釉（貫入）	堅致	灰白	灰白	精良	太宰府分類Ⅱ類，11C後半～12C前半
187	磁器	小坏 胴部～底部	一括	－	3.3	－	回転ナデ 施釉 露胎（畳付）	回転ナデ 施釉	堅致	灰白 青灰	灰白	精良	肥前系，蕎麦猪口18C後半
188	青磁	盤 肩部	一括	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	堅致	灰オリーブ	灰オリーブ	精良	龍泉窯13C後半～14C前半
189	陶器	碗 胴部~底部付近	一括	－	－	－	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉 露胎	堅致	黒褐	黒褐	精良	近世，さつま

第６表　【土器観察表６】

番号	器種	石材	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）
18	磨製石鏃	緑色頁岩	SA1	2.5	2.45	2.0	1.3
19	磨石	安山岩	SA1	26.4	18.1	9.0	4810.4
20	砥石　敲石	砂岩	SA1	10.7	6.9	6.3	640.9
28	剥片	緑色頁岩	SA2	2.3	1.6	0.3	1.1
29	剥片	頁岩	SA2	1.1	1.9	1.5	0.9
35	砥石	砂岩	SA3	19.7	6.1	3.8	461.5
36	砥石	砂岩	SA3	8.4	7.55	4.25	486.7
43	砥石	砂岩	SA4	14.42	6.8	4.15	537.5
44	砥石　敲石	砂岩	SA4	13.1	6.7	4.4	556.2
45	砥石	砂岩	SA4	6.41	5.1	2.3	140.3
46	磨石	砂岩	SA4	11.7	8.8	6.25	666.8
47	磨石　敲石	砂岩	SA4	15.25	9.85	6.6	1497.2
48	打製石鏃	サヌカイト	SA4	1.98	1.7	0.24	0.7
49	打製石鏃	サヌカイト	SA4	1.6	1.52	0.33	0.6
50	磨製石鏃	頁岩	SA4	2.45	2.2	2.5	1.8
51	磨製石鏃	緑色頁岩	SA4	1.8	2.0	2.0	1.2
52	磨製石鏃	頁岩	SA4	3.35	1.5	2.5	2.1
53	磨製石鏃	頁岩	SA4	1.85	1.15	0.2	0.4
54	磨製石鏃	頁岩	SA4	1.6	1.4	0.2	0.7
55	磨製石鏃	頁岩	SA4	1.5	0.6	0.15	0.3
56	剥片	チャート	SA4	4.8	2.8	1.7	16.5
57	剥片	頁岩	SA4	3.1	1.15	5.5	4.5
58	剥片	頁岩	SA4	2.2	2.4	0.15	1.1
59	剥片	緑色頁岩	SA4	2.9	2.6	0.4	2.4
65	砥石　敲石	砂岩	SA5	8.3	2.9	19.5	77.4
70	砥石	砂岩	SA7	25.5	10.4	4.2	1526.5
71	砥石	砂岩	SA9	7.48	6.13	0.6	44.4
72	打製石鏃	頁岩	SA9	1.8	1.8	0.35	0.8
78	砥石	砂岩	SA8	11.05	5.5	2.35	277.1
79	磨石　敲石	砂岩	SA8	9.5	9.3	4.5	460
80	砥石	砂岩	SA8	7.35	6.05	5.15	362.2
81	磨製石鏃	頁岩	SA8	1.95	16.8	0.2	0.6
82	剥片	頁岩	SA8	6.35	2.15	0.55	10.5
95	敲石	砂岩	SL1	11.6	6.2	6.2	1092.9
136	敲石　磨石	砂岩	Ⅲ層	15.3	8.9	6.4	1206.3
137	打製石斧	砂岩	Ⅲ層	11.05	4.95	1.8	111
138	敲石　磨石	砂岩	Ⅲ層	20.8	7.6	6.2	1497.6
139	敲石　磨石	砂岩	Ⅲ層	9.8	5.8	4.55	379.6
140	砥石	砂岩	Ⅲ層	14.1	9.1	9.15	1711.9
141	台石	砂岩	Ⅲ層	16.0	5.0	10.25	749.2
142	砥石	砂岩	Ⅲ層	10.4	3.4	2.05	103.1
143	砥石	砂岩	Ⅲ層	5.0	3.3	1.35	41.4
144	磨製石鏃	頁岩	Ⅲ層	4.2	2.0	0.35	4.1
172	石庖丁	頁岩	Ⅳa層	9.2	6.05	0.75	51.6
173	打製石鏃	流紋岩	Ⅳa層	2.55	1.25	2.5	0.6
174	敲石　磨石	砂岩	Ⅳa層	10.2	5.9	4.9	366.9
175	磨製石鏃	頁岩	Ⅳa層	2.4	2.5	0.3	1.5
176	磨製石鏃	頁岩	Ⅳa層	3.7	2.45	0.2	2.5
177	凹石　砥石　敲石	砂岩	Ⅳa層	11.4	8.6	4.2	679.6

第７表　【石器計測表】

番号	器種	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
60	鉄鏃	SA4	2.0	1.5	0.1	（刃部先端のみ）
190	鉄鏃	一括	5.5	0.9	0.8	（茎のみ）

第８表　【鉄器計測表】

第Ⅳ章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

第１節　放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の^{14}C濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に換算する必要がある。

２．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
№１	SA ４、モモ核	炭化種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
№２	SA ７、炭化材	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
№３	SA ８、甕付着スス	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
№４	SA10、炭化材	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
№５	SL １、炭化米	炭化米	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

表１に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示し、図１に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）δ（デルタ）　^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。BPはBefore Physics (Present)。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた（実際の半減期は5,730年）。統計誤差は１σ（68.2％確率）である。

（３）暦年代（Calendar Age）

^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるため、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の

^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24,050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10,450年まで）。

暦年代は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で示し、較正プログラムOxCal3.1の確率法により１σ（シグマ）（68.2％確率）と２σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・２σ値が表記される場合もある。（）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。CalはCalibratedの略。BCは西暦紀元前、ADは紀元後を示す。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№１では2050±20年BP（２σの暦年代でBC160 ～ BC130、BC120 ～ AD10年）、№２では2030±20年BP（BC100 ～ AD30年）、№３では2080±20年BP（BC170 ～ BC40年）、№４では2065±20年BP（BC170 ～ BC20、BC10 ～ AD0年）、№５では2105±20年BP（BC200 ～ BC50年）の年代値が得られた。

文献

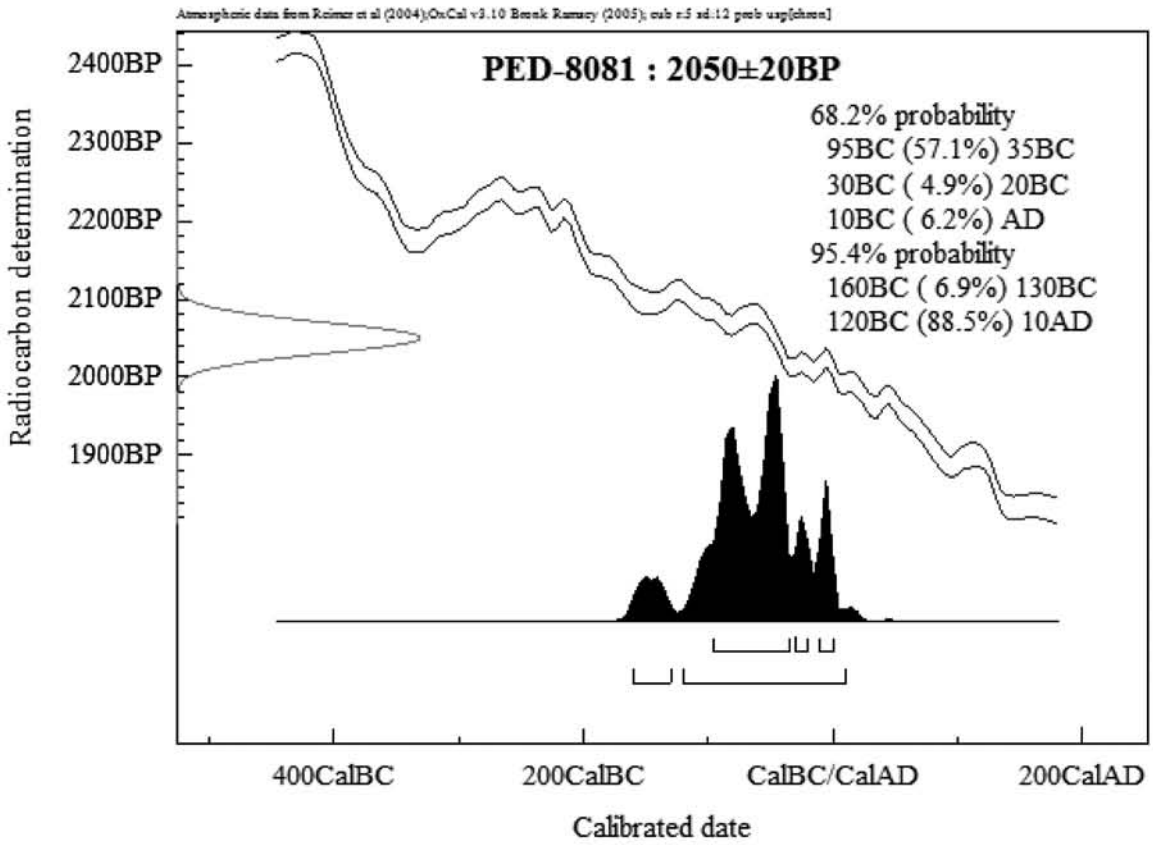
Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№３－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－, p.14-15.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, p.3-20.


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-8081 : 2050±20BP
68.2% probability
95BC (57.1%) 35BC
30BC (4.9%) 20BC
10BC (6.2%) AD
95.4% probability
160BC (6.9%) 130BC
120BC (88.5%) 10AD
Radiocarbon determination
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
400CalBC
200CalBC
CalBC/CalAD
200CalAD
Calibrated date

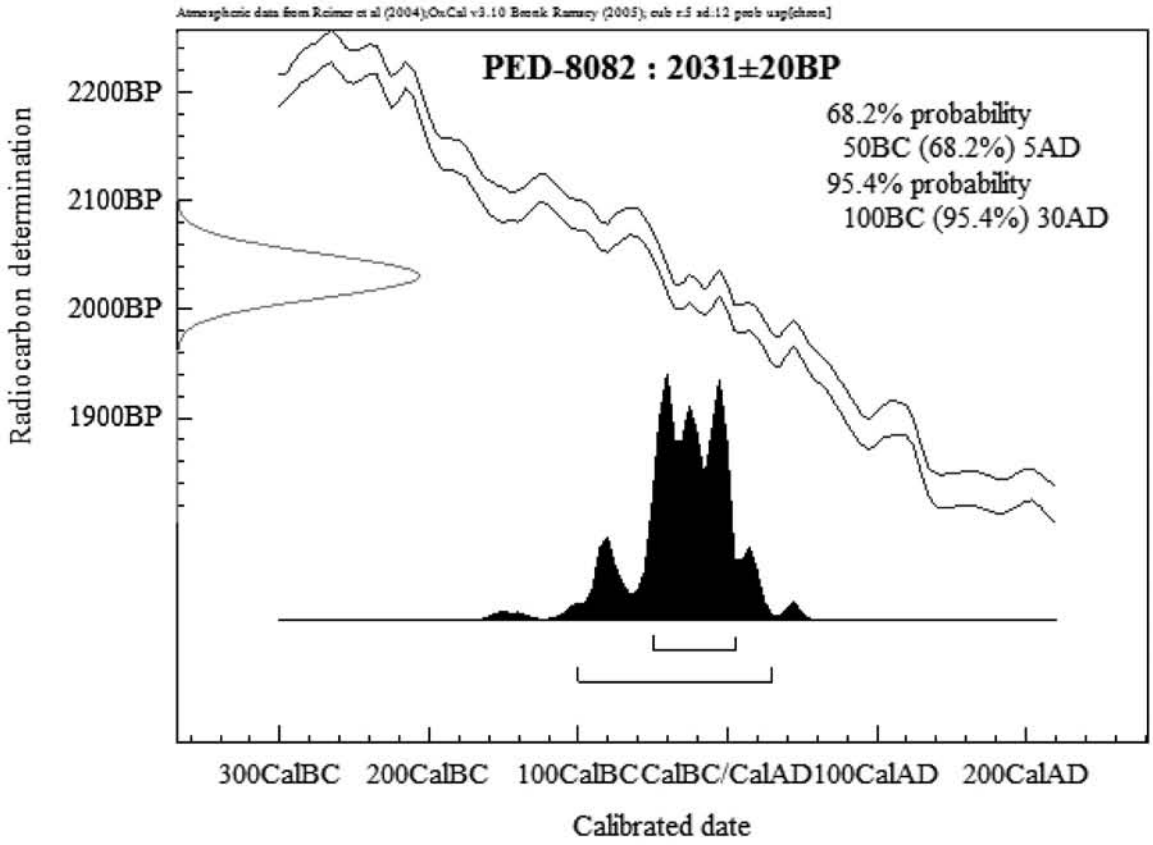
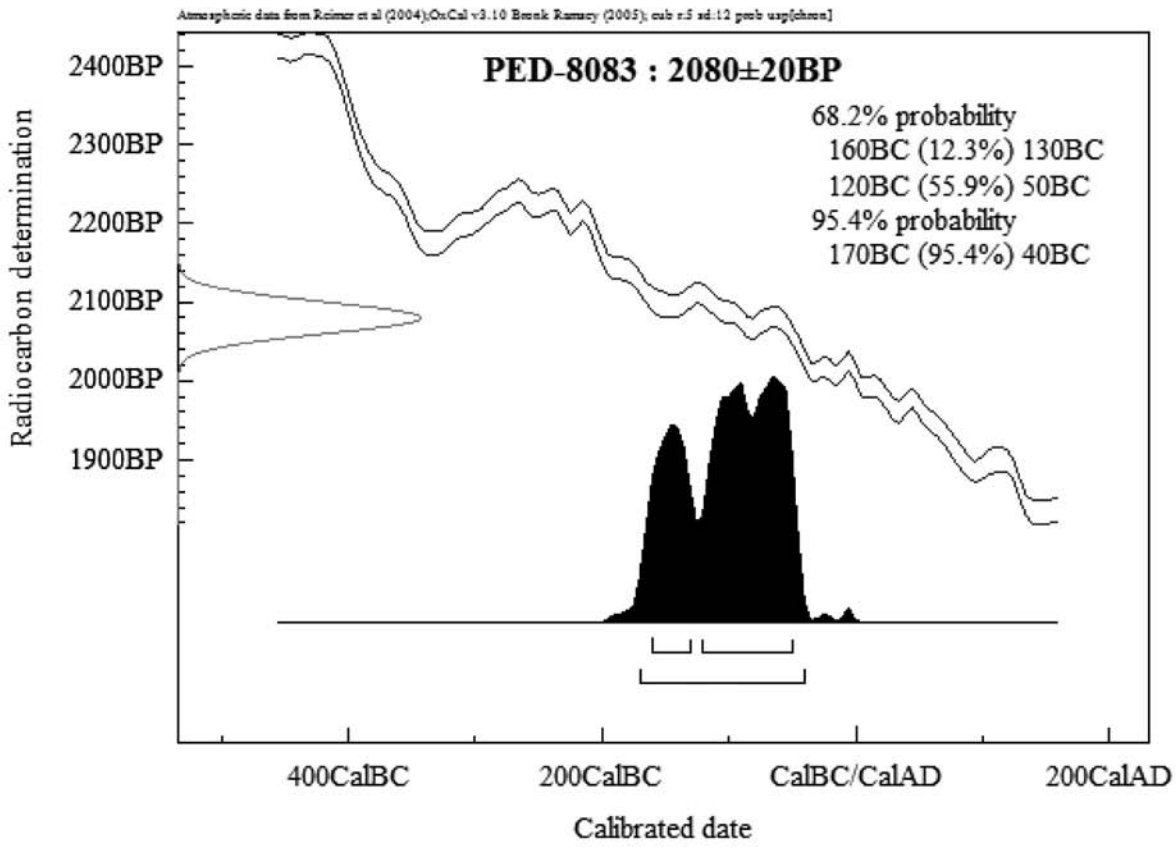
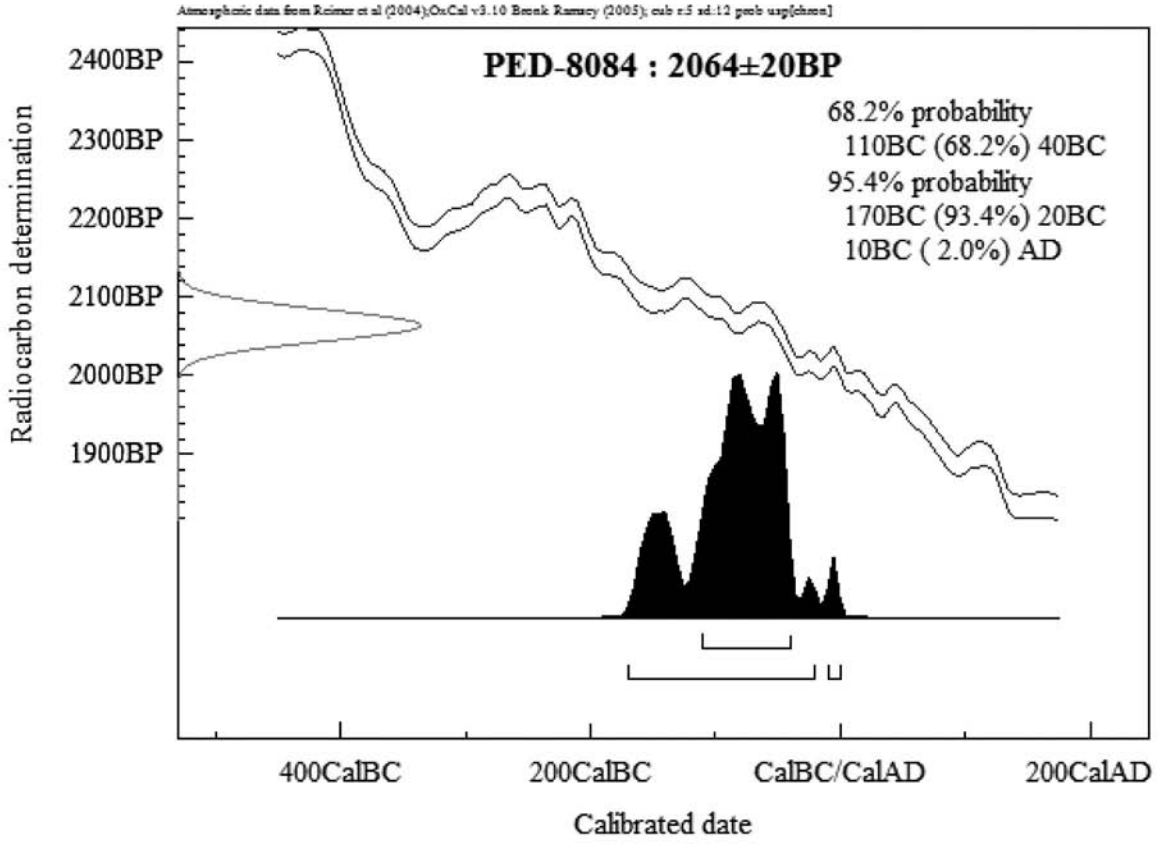
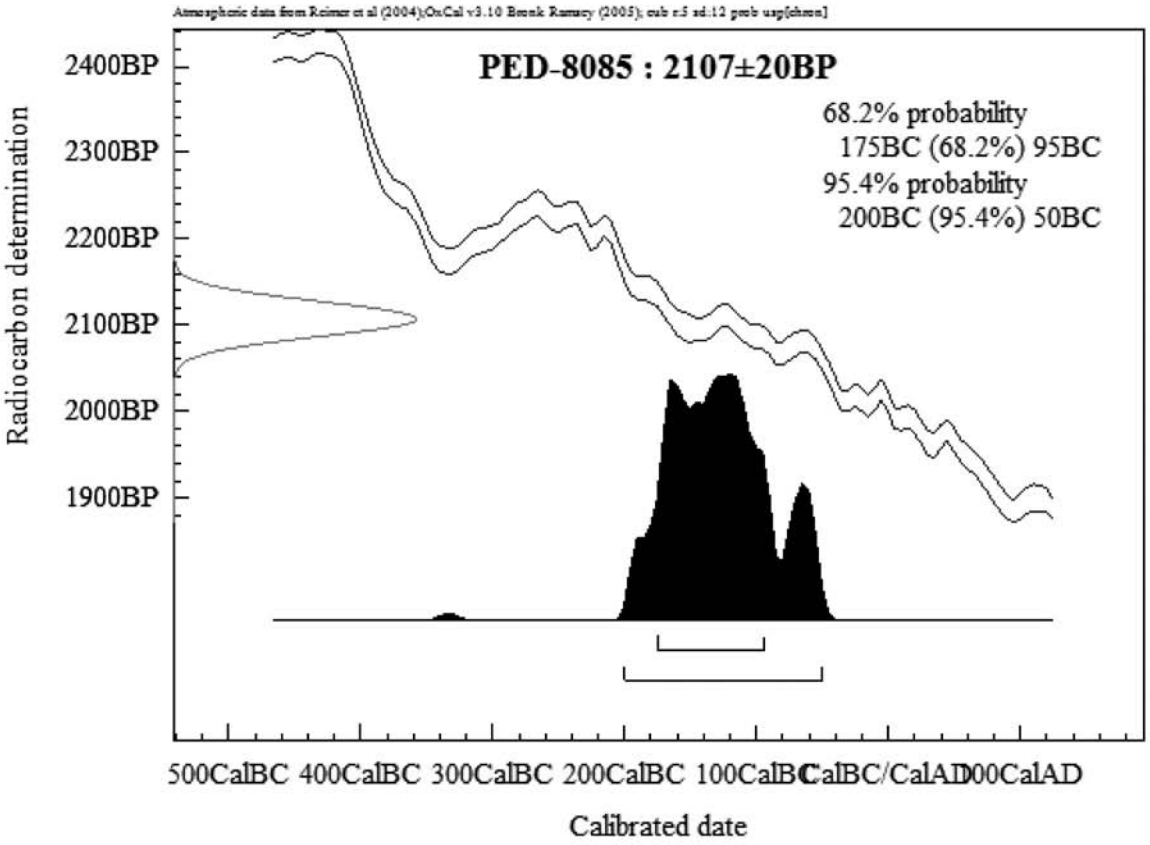

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-8082 : 2031±20BP
68.2% probability
50BC (68.2%) 5AD
95.4% probability
100BC (95.4%) 30AD
Radiocarbon determination
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
300CalBC
200CalBC
100CalBC
CalBC/CalAD
100CalAD
200CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-8083 : 2080±20BP
68.2% probability
160BC (12.3%) 130BC
120BC (55.9%) 50BC
95.4% probability
170BC (95.4%) 40BC
Radiocarbon determination
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
400CalBC
200CalBC
CalBC/CalAD
200CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PED-8084 : 2064±20BP
68.2% probability
110BC (68.2%) 40BC
95.4% probability
170BC (93.4%) 20BC
10BC (2.0%) AD
Radiocarbon determination
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
400CalBC
200CalBC
CalBC/CalAD
200CalAD
Calibrated date



第２節　樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、SA ７およびSA10から採取された炭化材２点である。

３．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目)、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50 ～ 1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属クヌギ節　*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科　図版１・２

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

５．所見

分析の結果、SA ７およびSA10から採取された炭化材は、いずれもコナラ属クヌギ節と同定された。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉広葉樹である。乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。

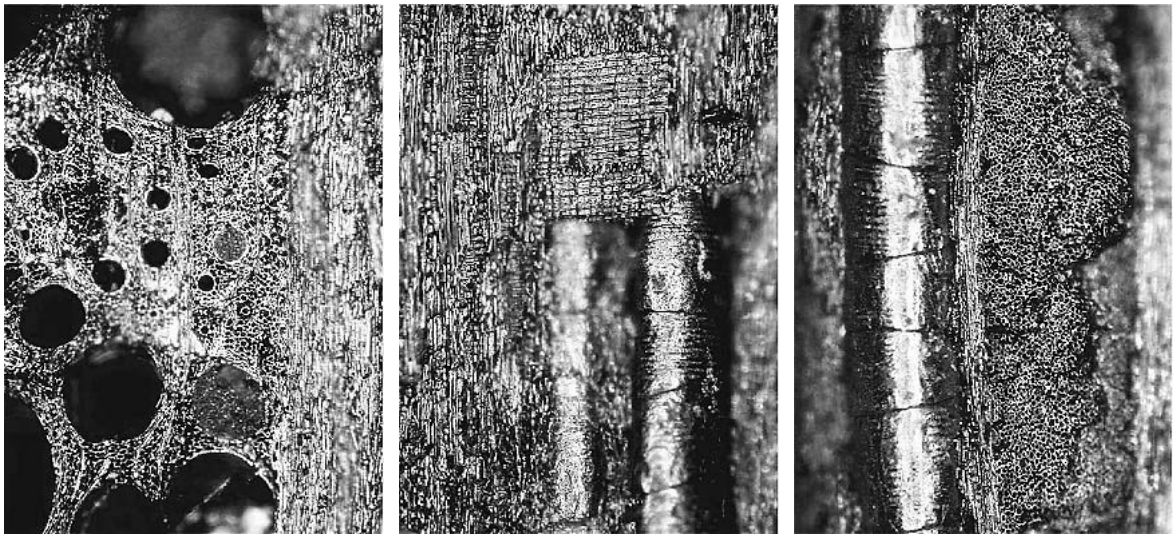
文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

諸麦遺跡の炭化材

図版1



横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

1. 試料1（SA7）　コナラ属クヌギ節

横断面 ―――― : 0.4mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

2. 試料2（SA10）　コナラ属クヌギ節

第３節　種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、SA4およびSL1から出土した選別済み試料１式（19ケース）である。

３．方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

４．結果

（１）分類群

樹木４、草本５の計９分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schotty.　子葉（完形・半形）　ブナ科

黒褐色で広卵形を呈し、表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

イヌブナ　*Fagus japonica* Maxim　堅果　ブナ科

暗黄褐色や灰褐色で卵状３稜形を呈す。稜は鋭く、先端は細く尖る。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核（破片）　バラ科

黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

カキノキ　*Diospyros kaki* Thunb.　種子　カキノキ科

黒褐色で非対称的広倒卵形を呈し、偏平である。直線状の腹面は稜をなす。ヘソ部が柔らかいため欠落している。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa L.*　果実　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

アワ　*Setaria italica* Beauv. 果実　イネ科

黒褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。胚の部分がくぼむ。

ササゲ属　*Vigna*　子葉（完形・半形・破片）　マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

ササゲ属？　*Vigna*？　子葉（破片）　マメ科

破片であり、炭化の度合いが著しく発泡しているためササゲ属？とした。

マメ科　Leguminosae　子葉（半形）　マメ科

黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。初生葉が欠落し観察できないためマメ科とした。

キケマン属　Corydalis　種子　ケシ科

黒色の円形でやや扁平を呈す。へそ部分はやや凹む。

不明種実

種実ではあるが破片であり、発泡し炭化の度合いが著しいため不明種実とした。SL1-1は種実核片であり、断定はできないがオニグルミまたはモモの可能性が考えられる。

不明

発泡し炭化の度合いが著しく種実かどうか不明。

（２）種実群集の特徴

１）SA4

試料１：ツブラジイ１、ササゲ属１が同定された。

試料２：イネ３が同定された。

試料３：ササゲ属２、キケマン属１が同定された。

試料４：ツブラジイ１が同定された。

試料５：イヌブナ１が同定された。

試料６：マメ科３、不明種実３が同定された。

試料７：不明種実２、不明３が同定された。

試料８：アワ２が同定された。

試料９：モモ２が同定された。

試料10：不明１が同定された。

２）SL1

試料１：不明種実８が同定された。

試料２：イネ４が同定された。

試料３：ツブラジイ３、マメ科１、カキノキ８が同定された。

試料４：カキノキ３が同定された。

試料５：ササゲ属？９が同定された。

試料６：植物体片（節等）16が同定された。

試料７：ササゲ属８が同定された。

試料８：ササゲ属？４が同定された。

試料９：イネ３、ササゲ属？４が同定された。

５．考察

（１）SA4

種実同定の結果、樹木ではツブラジイ、イヌブナ、モモ、草本ではイネ、アワ、ササゲ属、マメ科、キケマン属が同定された。このうち、モモ、イネ、アワ、ササゲ属は食用となる栽培植物であり、ツブラジイ、イヌブナも食用となる。

（２）SL1

種実同定の結果、樹木ではツブラジイ、カキノキ、草本ではイネ、ササゲ属が同定された。このうち、イネ、ササゲ属は食用となる栽培植物であり、ツブラジイ、カキノキも食用となる。カキノキは日本原産であり、モモなどとともに栽培や半栽培された可能性が考えられる。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15-19.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p. ２-14.
渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

諸麦遺跡の種実 Ⅰ

・SA4

No.1 ツブラジイ子葉 1.0mm

No.1 ササゲ属子葉

同左 1.0mm

No.2 イネ果実 1.0mm

No.3 ササゲ属子葉

同左 1.0mm

No.3 キケマン属 1.0mm

No.4 ツブラジイ子葉 1.0mm

No.5 イヌブナ堅果 1.0mm

No.6 マメ科子葉

同左 1.0mm

No.6 不明種実 1.0mm

No.7 不明種実 1.0mm

No.8 アワ果実 0.5mm

No.9 モモ核 1.0mm

図版3

諸麦遺跡の種実 II

・SL1

No.1 不明種実

1.0mm

No.2 イネ果実

1.0mm

No.3 ツブラジイ子葉

1.0mm

No.3 カキノキ種子

1.0mm

No.3 マメ科子葉

同左

1.0mm

No.5 ササゲ属子葉

No.5 同左

1.0mm

No.7 ササゲ属子葉

同左

1.0mm

No.8 ササゲ属子葉?

同左

1.0mm

No.4 カキノキ種子

1.0mm

No.9 イネ果実

1.0mm

No.9 ササゲ属子葉?

同左

1.0mm

第Ⅴ章　フローテーションについて

自然科学分析に先立ち、遺構の埋土からフローテーションにより、炭化物を抽出した。その方法は次の通りである。

ア　遺構（SA4、SL1）の埋土重量を量る。SA4 ～ 276.4kg　SL1 ～ 168.3kg

イ　コンテナ別にフローテーションを行う。

ウ　フローテーションによって流れ出た炭化物は網（編目の大きい順に）を並べて、拾い集める。

エ　集まった炭化物を編目の異なるものが混じらないように乾かす。

オ　炭化物とボラ土を選別する。

カ　炭化物は大きさの程度でおおまかに選別する。種子、イネと考えられる炭化物と木片と考えられる炭化物は選り分ける。

上記のウの作業は、当初、流水状態で落ちてくる炭化物を拾い集める方法で行っていた。しかし、作業途中からは、容器に埋土を入れたら、水は流さずに、浮いてきたものをまず先に取り上げるようにした。これによって、水の節約と作業の効率化を図ろうとした。また、容器に入れる前に、篩にかけ大粒の炭化物の選別を行った。これにより、水を使った作業の時間を短縮することができた。

作業の結果は、別表の通りである。

種子、イネ、カキノキなど種実同定したものの特徴をふまえ、観察によって、同じ形状のものと判断し、選別したものである。（欠落したものを含む。）

これらから判断すると、どちらの遺構からもイネを確認することができた。また、モモの核についてはSA4では調査中の埋土や網で篩いをかけていた観察の段階で、すでに確認できていた。フローテーションによっては確認できなかった。SL1では観察、フローテーションどちらでも確認できなかった。一方カキノキは、SL1でのみ確認することができた。SA4の不明種実の中に含まれる可能性もあるが、形状や大きさなどからSA4に含まれる可能性は低いと考えられる。

また、ササゲ属やキケマン属についてもそれぞれSA4、SL1では確認できなかった。

なお、表中のナンバー付きとあるのは、どちらの遺構のものか不明のものである。

		SA4		SL1		№付き	
		g	粒数	g	粒数	g	粒数
イネ	完形	0.32g	56	1.25g	203	0.12g	14
	一部	0.34g	76	1.62g	380	−	−
カキノキ	完形	−	−	1.17g	32	−	−
	一部	−	−	1.44g	105	−	−
マメ科	完形	0.01g	3	−	−	−	−
	一部	−	−	0.03g	12	−	−
ササゲ属	完形	−	−	0.07g	11	−	−
	一部	−	−	0.31g	60	−	−
キケマン属	完形	0.01g	2	−	−	−	−
	一部	−	−	−	−	−	−
イヌブナ	完形	−	−	0.04g	1	−	−
モモ核	一部	0.92g	3	−	−	−	−
不明種実１							
	完形	0.03g	22	0.15g	19	−	−
	一部	0.14g	7	4.34g	298	−	−
２mm以下		0.01g	（細片）	2.64g	1258	−	−
２mm ～５mm		0.20g	63	5.01g	542	−	−
５mm以上		0.08g	12	3.60g	207	−	−
炭化材							
０～１mm		3.53g	−	15.07g	−	0.22g	−
１mm ～２mm		16.49g	−	33.30g	−	1.14g	−
２mm ～５mm		14.17g	−	44.57g	−	1.77g	−
５mm以上		16.48g	−	49.59g	−	3.77g	−
計		52.73g	244	163.2g	3128	6.9g	14

第９表【フローテーション炭化物集計表】

第Ⅵ章　まとめ

本遺跡では、遺構として、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、周溝状遺構が確認できた。次のようにまとめる。

1　竪穴住居跡について

本遺跡の竪穴住居跡は、花弁状住居６軒（可能性を含む)、方形住居６軒である。花弁状住居は方形基調プランであり、SA1、SA4は部分的間仕切り型、SA2が一方間仕切り型である。SA6、SA7はいずれも切り合いや一部検出であり全容不明であるが、全周間仕切りの可能性がある。本遺跡の竪穴住居跡の時期については、切り合いの状況から、SA7より、SA9がわずかに古いといえるが、その他の住居跡からは、出土した遺物などから、中期中葉から後期初頭にかけての集落と考えられるものの、集落の変遷については判断が困難である。

	住居形態	長辺×短辺（m）	面積（㎡）	主柱穴数	壁	残存状況	主軸の向き
１号竪穴住居	花弁状住居	6.3×5.5	30.0	2	３カ所	完形	N－34°－E
２号竪穴住居	花弁状住居	5.0×4.4	19.0	2	１＋α	一部	N－２°－W
３号竪穴住居	方形住居	7.1×6.1	34.5	4	－	完形	N－３°－W
４号竪穴住居	花弁状住居	6.7×5.8	31.7	2	2	完形	N－104°－E
５号竪穴住居	花弁状住居（？）	2.3×1.4	3.3	不明	１＋α	一部	N－９°－W
６号竪穴住居	花弁状住居（？）	－	－	不明	２＋α	一部	N－17°－W
７号竪穴住居	花弁状住居	5.5×5.2	16.7	不明	４＋α	一部	N－17°－E
８号竪穴住居	方形住居	3.7×3.6	12.0	2	－	完形	N－２°－W
９号竪穴住居	方形住居	3.5×3.4	9.95	不明	－	完形	N－90°－E
10号竪穴住居	方形住居	4.1×2.5	8.3	不明	－	一部	N－６°－W
11号竪穴住居	方形住居	5.2×4.7	22.5	不明	－	完形	N－100°－W
12号竪穴住居	方形住居	2.8×2.76	6.76	不明	－	完形	N－11°－W

第10表【諸麦遺跡　竪穴住居跡一覧表】

上記の表から、わずかな部分のみを確認したSA5、SA6をのぞくと、SA1、SA3、SA4は30㎡を超える住居で、あとは6～23㎡である。また、SA4は調査区内で一番立地条件のよい、やや高台となる平坦部に住居が存在していたことや住居内でまとまった磨製石鏃が確認されたことなどから、この集落の中核をなし、その他の住居は集落を構成する住居ではないかと考えられる。なお、方形住居の中でもSA10、SA12など小型の方形住居は、その他の住居との大きさの違いから考えると、わずかに時期差が生じる可能性もある。

なお、放射性炭素年代測定（AMS法）によると、SA4＝2,050±20年BP、SA7＝2,030±20年BP、SA8＝2,080±20年BP、SA10＝2,065±20年BPという結果が得られている。

2　掘立柱建物跡

本遺跡では、５棟の掘立柱建物跡が確認できた。概要は次の通りである。

	規模	桁行	梁行	主軸の向き	備考
SB 1	1間×1間	1.26 ～ 1.3m	0.44 ～ 0.52m	N－8°－W	
SB 2	1間×1間	1.5 ～ 1.54m	0.96 ～ 1.06m	N－62°－W	
SB 3	1間×1間	0.96 ～ 1.16m	0.88 ～ 1.16m	N－11°－W	
SB 4	1間×2間	1.2 ～ 1.28m	0.92 ～ 1.0m	N－63°－W	
SB 5	2間×5間	8.46 ～ 8.52m	3.5m	N－93°－W	庇付

第11表【諸麦遺跡　掘立柱建物跡一覧表】

SB1とSB3、SB2とSB4はそれぞれ主軸が同方向になっている。位置的には、SB1はSA1付近、SB2はSA2付近、SB3はSA3とSA4の中間、SB4はSA5付近、SB5はSA11付近にある。SB1 ～ SB4については時期差はほとんどなく、それぞれ、近辺の住居と同時期と考えられる。SB5については、これのみが規模が大きく、遺跡周辺の弥生時代の掘立柱建物跡の出現状況から考えると同時期とするには困難である。

3　周溝状遺構

周溝状遺構は２基検出しているが、完形では検出されていない。SL1は一部調査区外であったものの、おおまかな形状は確認できた。中央部には主体部は確認できなかった。遺物から判断すると弥生時代中期後半または後期初頭になる。この遺構の埋土をフローテーションして、炭化物を抽出したところ、イネ、ツブラジイ、カキノキなど食用となる栽培植物が検出できた。イネの放射性炭素年代を測定したところ、2105±20年の測定結果が得られた。

4　遺物について

本遺跡から出土した土器については、弥生時代中期後半から後期初頭のものが大半を占め、縄文時代の遺物は約10点、古墳時代以降は約20点ほどであった。ここでは、弥生時代の遺物について特徴をまとめることとする。

土器については甕・壺などが遺構及び包含層から多量に出土しているが、甕が主流である。甕は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁部下位に突帯を貼り付ける甕が多く、１条の突帯で刻目を施すものと施さないものの２タイプがほぼ同量みられた。中期後半から後期前葉に比定される。１条で刻目をもたないいわゆる中溝式系の土器は、口縁部のみの出土であり完形に復元できなかったが、上げ底を呈する底部が同じ住居内から確認できていることから、当該期の都城盆地における中溝式系甕の普及･展開が推察される。また、口縁部が短く、「く」の字状に外反し、胴部上半に１～３条の突帯をもつものもある。これらは山之口式土器系統とみられる。さらに、底部が脚台で、上げ底となり、口縁部が「く」の字状に外反して内面の屈曲部が張り出すものもある。これは肥後系の土器の特色をもつものである。壺については、口縁部が、鋤先状を呈するもの、外側へ強く折り返して垂れ下げるもの、緩やかに外反するものとに大別できる。垂れ下げるもののなかには、内側に突帯状に張り出しをもつものもみられる。また、二股状の口縁をもつものもある。口縁部上面に凹線文が入る壺があり、瀬戸内地方との結びつきが考えられる。

石器については、49点を掲載した。このうち、砥石15点（約30％）、敲石11点（約22％）、磨製石鏃10点（約20％）、磨石８点（約16％）、打製石鏃４点（約８％）、石庖丁１点（約２％）、打製石斧１点（約２％）の割合となっている。なお、砥石と敲石を兼ねる石器が４点、敲石と磨石を兼ねる石器が５点である。住

居別にみると、SA1が３点、SA2、SA3が各２点、SA4が17点、SA5，SA7が各１点、SA8が５点、SA9が２点などとなっている。とりわけSA4内の石器が多く、磨製石鏃は包含層の３点を除いてすべてSA4から出土したものである。チャートや頁岩の剥片も出土しており、この住居で石器が生産されていたものと推察できる。

５　自然科学分析について

本遺跡では、既述のように、放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定を行った。

放射性炭素年代測定では、竪穴住居跡（SA4、7、8、10）、周溝状遺構（SL1）の埋土からフローテーションを行った結果採取された炭化物５点を測定したが、いずれも弥生時代中期を示した。

種実同定では、周溝状遺構からイネが検出され、平田遺跡において検出された事例を追認する形となった。また、イネのほか、ツブラジイ、イヌブナ、モモ、アワ、ササゲ属、カキノキ、など食用となる植物が検出され、当時の人々の食生活をうかがい知ることができる。

【参考文献】

宮崎県　1998 『宮崎県史』通史編１　原始・古代１

鹿児島県教育委員会　1985 『王子遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

都城市教育委員会　1996 『丸谷地区遺跡群　中大五郎第１遺跡・中大五郎第２遺跡・本池遺跡・前畑遺跡』都城市文化財調査報告書　第34集

都城市教育委員会　1998 『鶴喰遺跡』 都城市文化財調査報告書　第44集

都城市教育委員会　1999 『肘穴遺跡』 都城市文化財調査報告書　第47集

都城市教育委員会　2004 『馬渡遺跡』 都城市文化財調査報告書　第62集

都城市教育委員会　2005 『横市地区遺跡群　平田遺跡Ａ地点・Ｂ地点・Ｃ地点』 都城市文化財調査報告書　第68集

都城市教育委員会　2006 『坂元A遺跡・坂元B遺跡』 都城市文化財調査報告書　第71集

宮崎県埋蔵文化財センター　2001 『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・蓑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第42集

宮崎県埋蔵文化財センター　2002 『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第63集

宮崎県埋蔵文化財センター　2004 『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第90集

宮崎県埋蔵文化財センター　2007 『平田遺跡D地点・E地点』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第160集

石川　悦雄 『宮崎平野における弥生土器編年試案』 宮崎県総合博物館研究紀要　第８号　1983年

石川　悦雄 『宮崎平野における弥生土器編年試案－素描―（Mk.Ⅱ）』 宮崎考古　第９号　1984年

石川　悦雄 『日向における外来系土器の伝播とその地域性』 宮崎県総合博物館研究紀要　第９号　1984年

桒畑　光博 『中溝式系土器の検討』 九州古文化研究会　古文化談叢　第45集　2000年

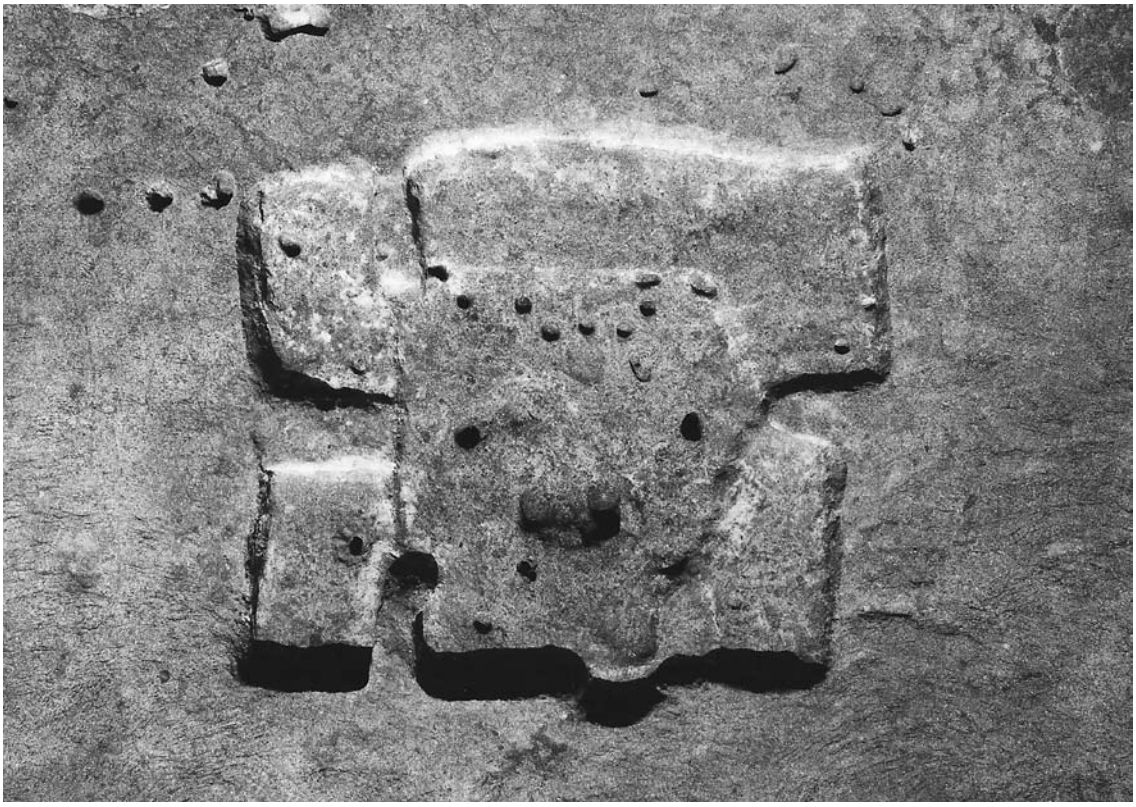
中園　聡 『様式論と南部九州の弥生時代中期土器』 鹿児島考古第27号

本田　道輝『鹿児島県下の弥生後期土器』 鹿児島考古第27号

諸麦遺跡遠景（南より）

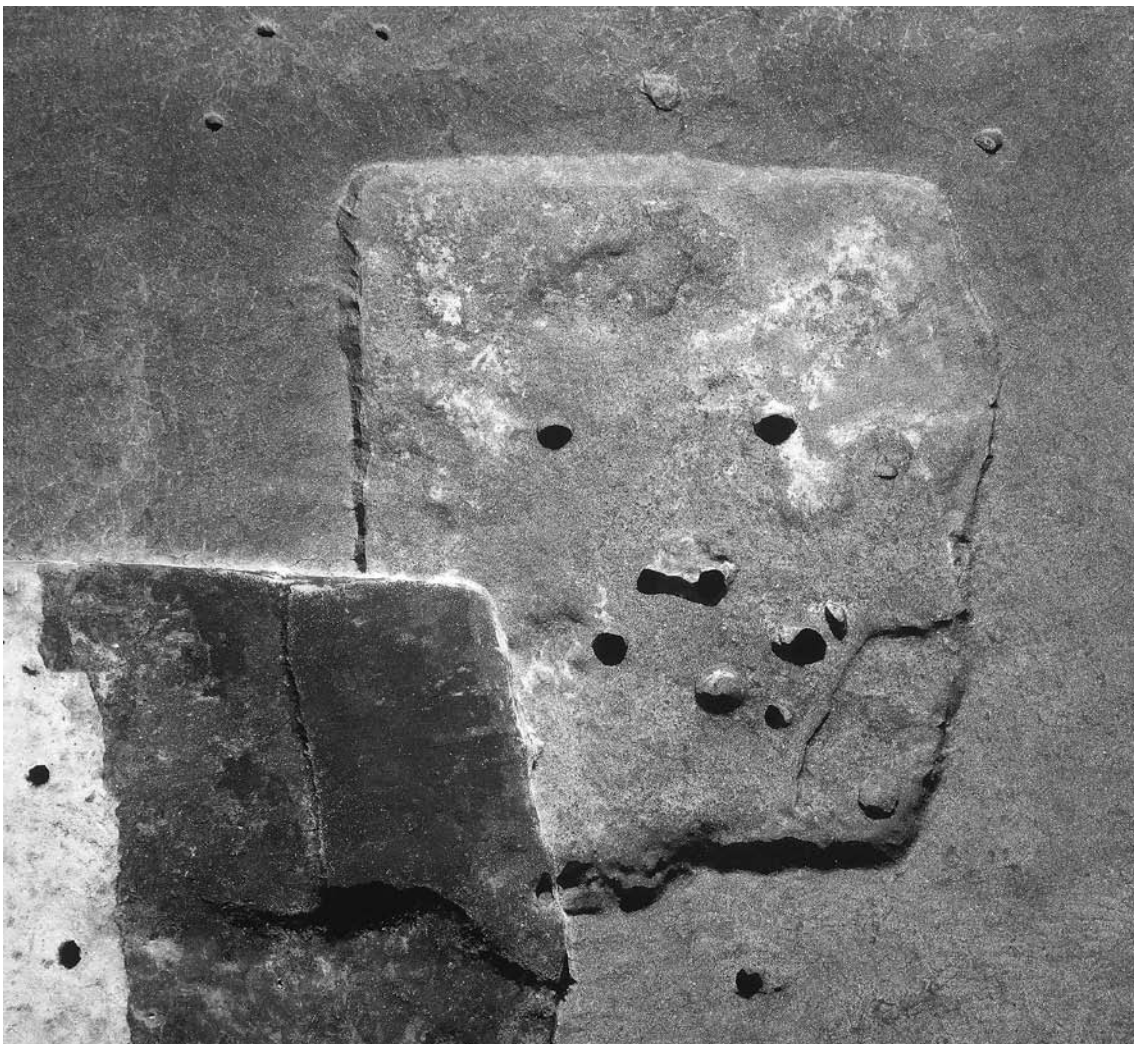
図版5

諸麦遺跡全景

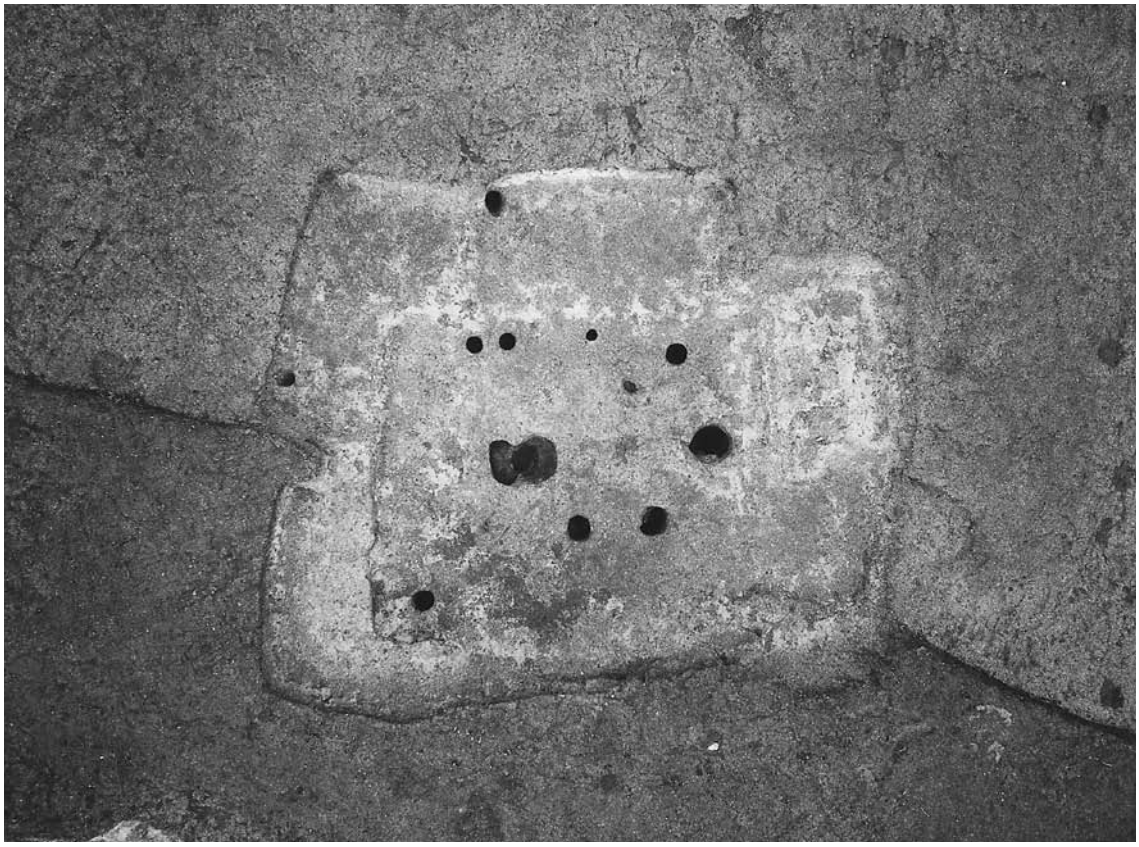


【１号竪穴住居跡】

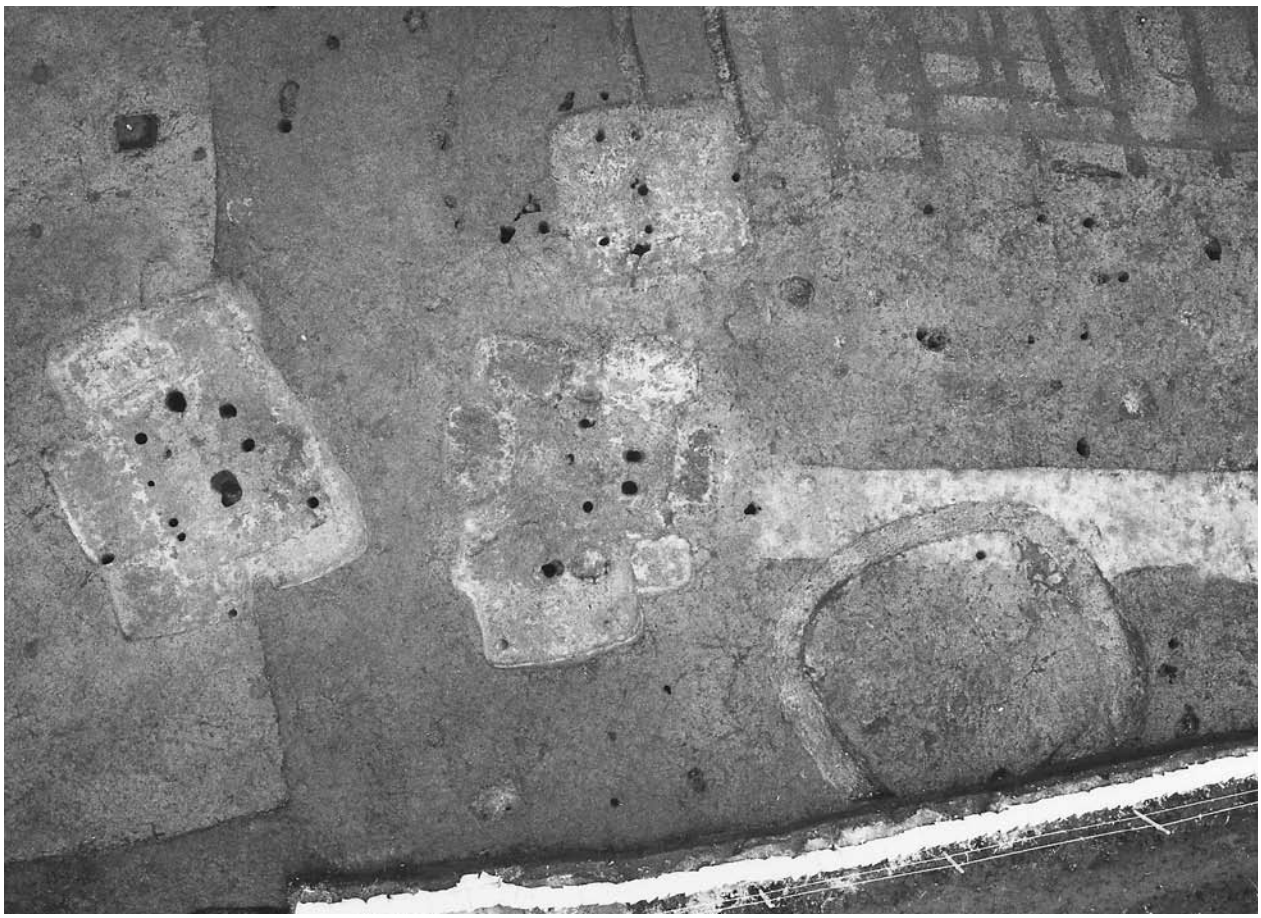
【２号竪穴住居跡】



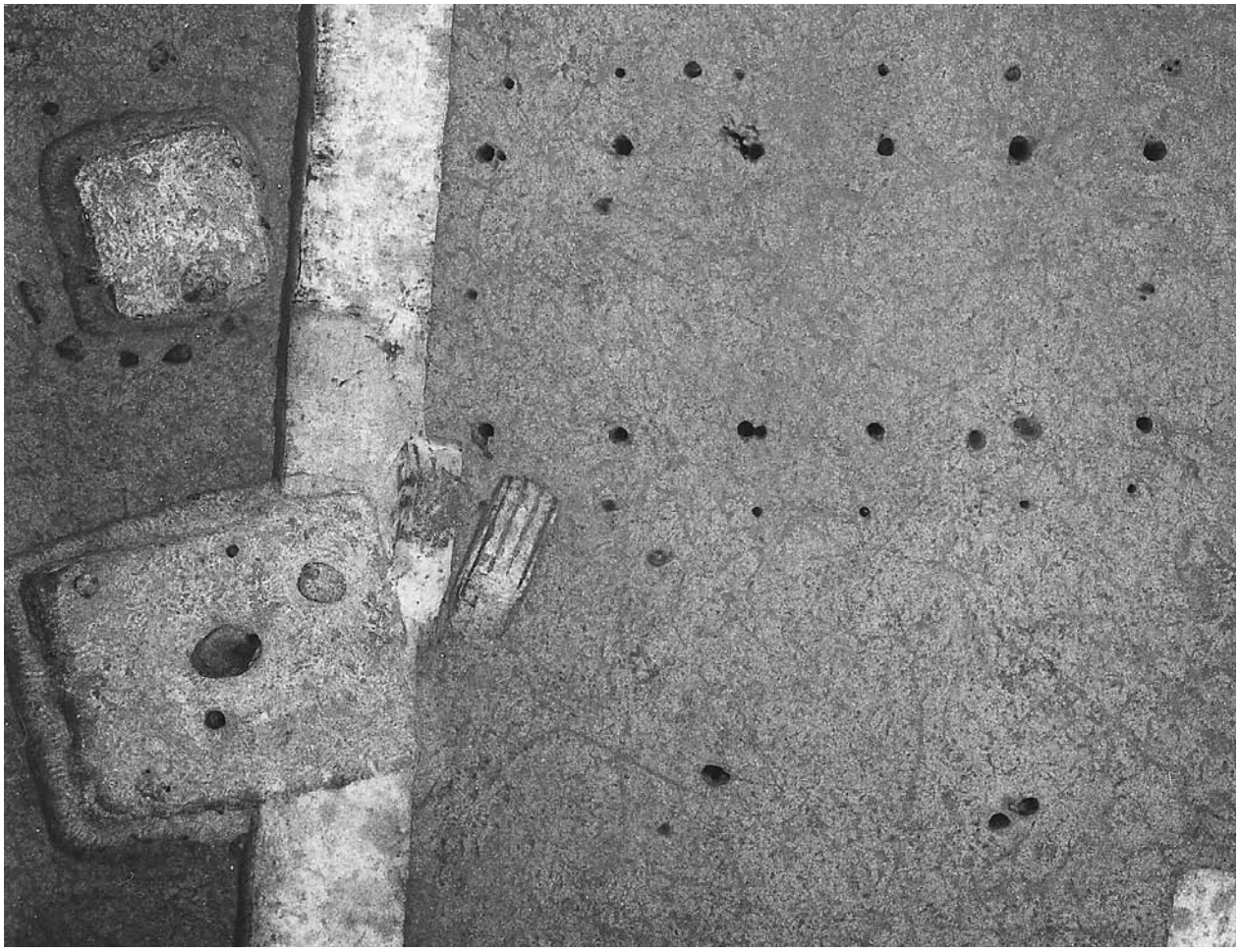
【３号竪穴住居跡】



【４号竪穴住居跡】

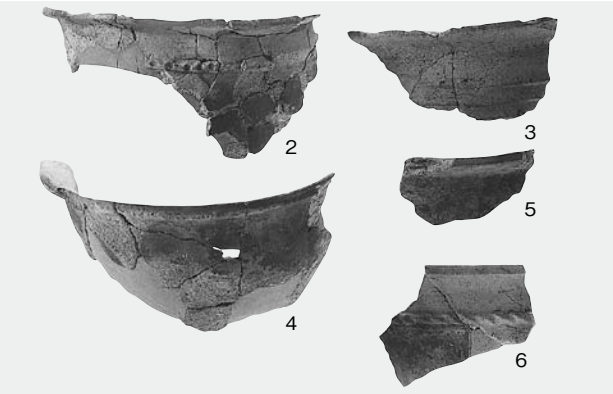


【４号　７号　８号　９号竪穴住居跡　１号周溝状遺構】

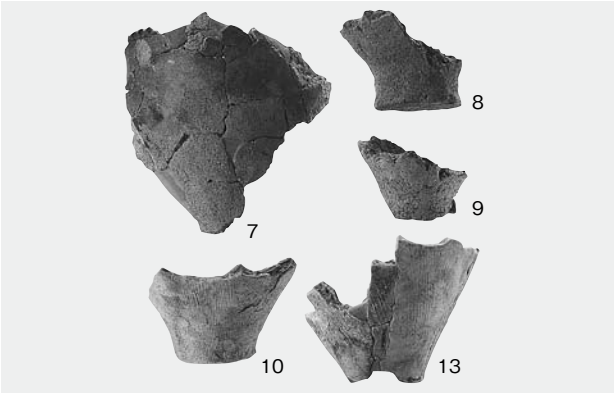


【11号　12号竪穴住居跡　５号掘立柱建物跡】

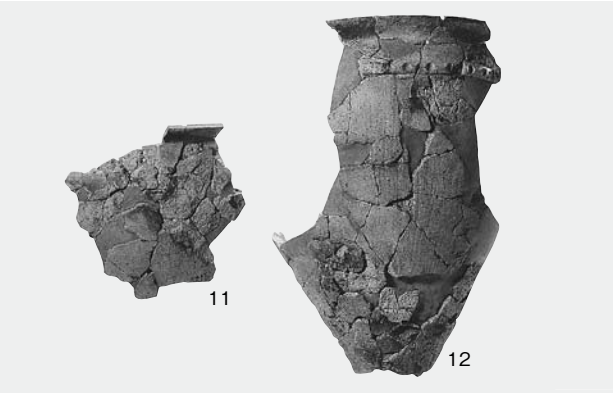
【SA1　出土遺物①】



【SA1　出土遺物②】

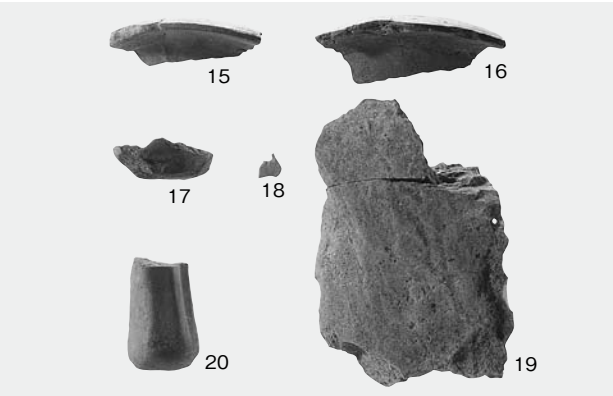


【SA1　出土遺物③】



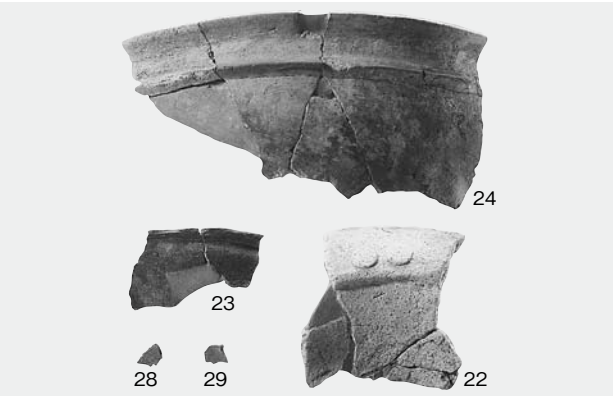
【SA1出土遺物④】

【SA1　出土遺物⑤】

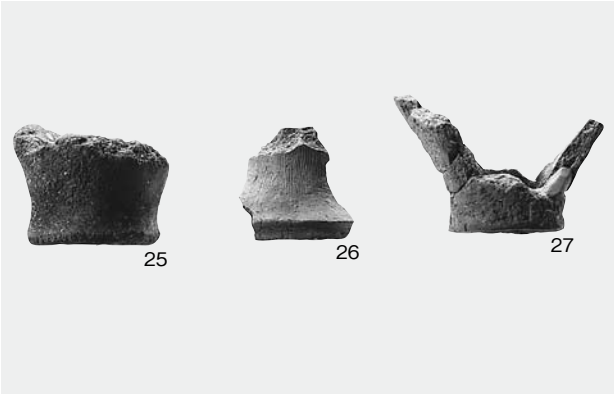


【SA1　出土遺物⑥】

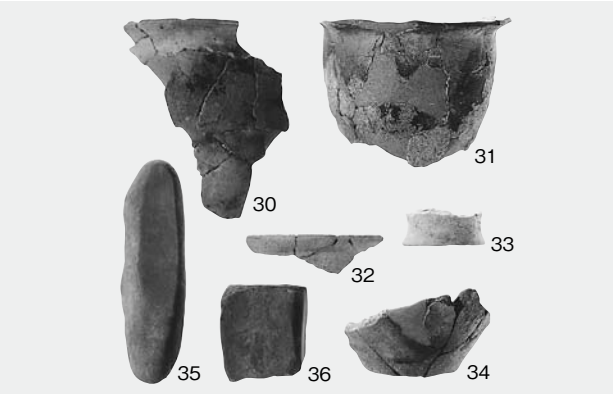
【SA2　出土遺物①】



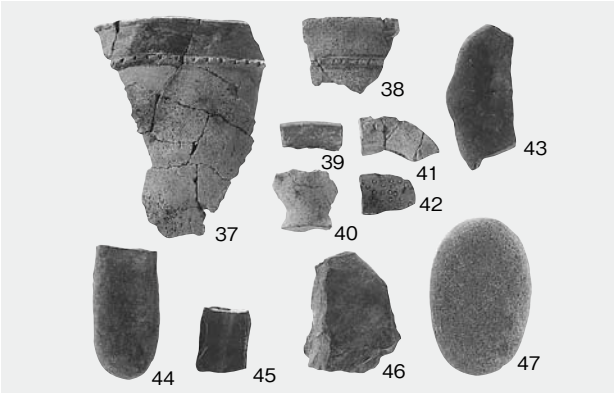
【SA2出土遺物②】



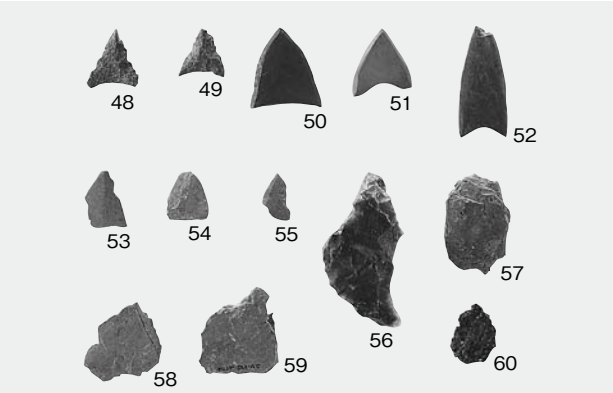
【SA2　出土遺物③】



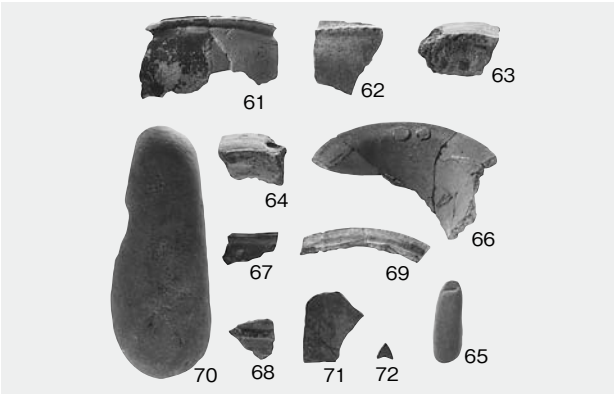
【SA3　出土遺物】



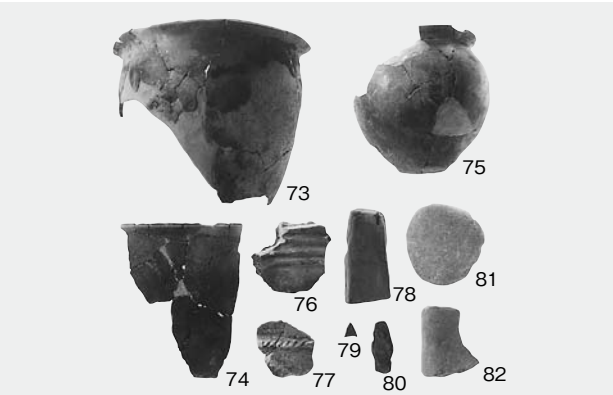
【SA4　出土遺物①】



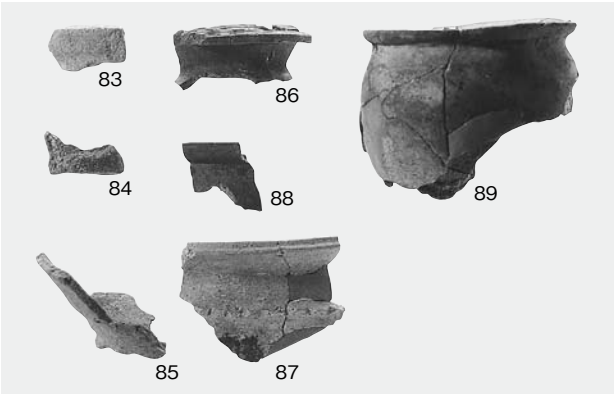
【SA4　出土遺物②】



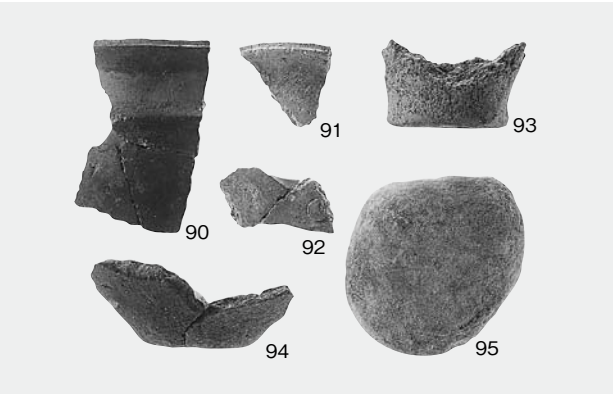
【SA5　SA7　SA9　出土遺物】



【SA8　出土遺物】

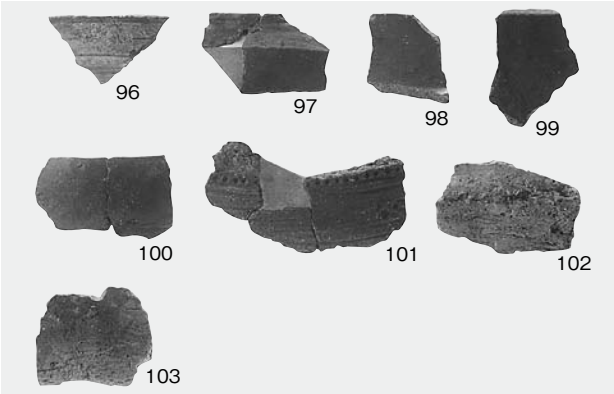


【SA10　SA11　SA12　出土遺物】

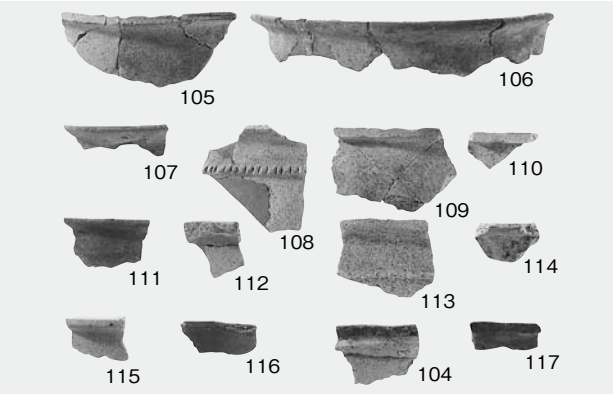


【SL1　出土遺物】

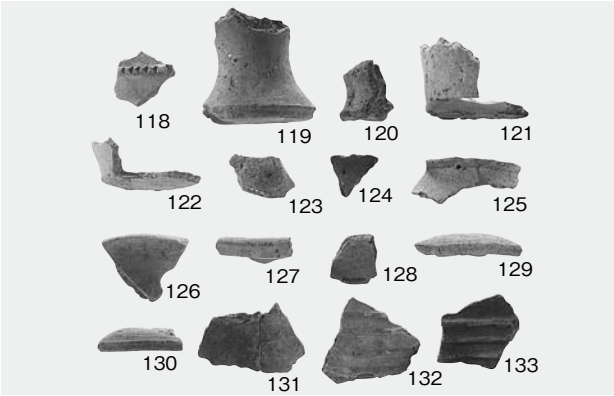
図版11



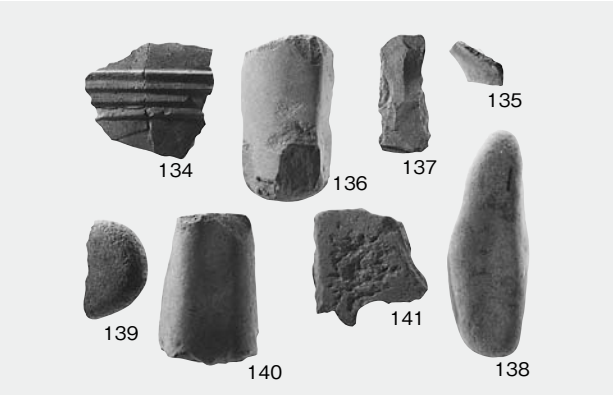
【包含層出土遺物①（縄文時代）】



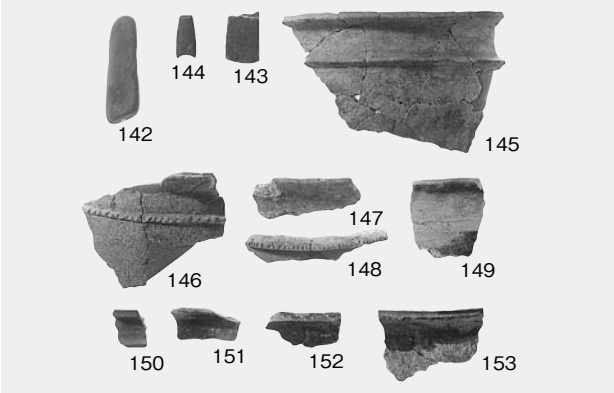
【包含層出土遺物②（縄文、弥生時代）】



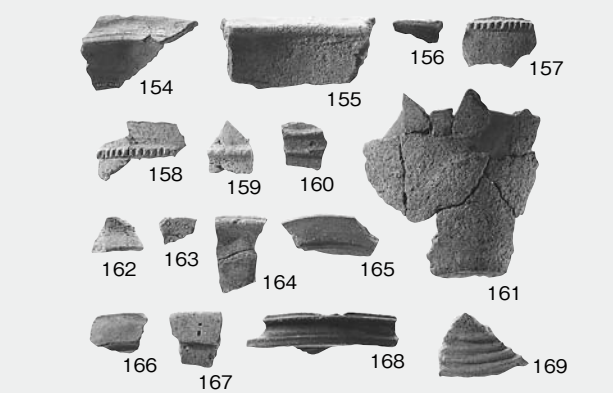
【包含層出土遺物③（弥生時代）】



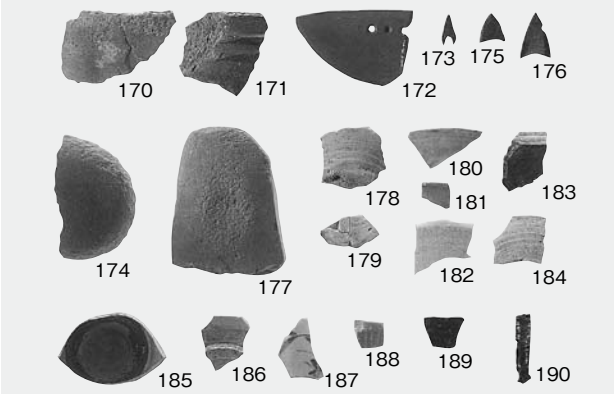
【包含層出土遺物④（弥生時代】



【包含層出土遺物⑤（弥生時代）】



【包含層出土遺物⑥（弥生時代）】



【包含層出土遺物⑦（弥生、古墳時代以降）】

報告書抄録

ふりがな	もろむぎいせき
書名	諸麦遺跡
副書名	一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第168集
編著者名	黒木　俊彦
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880－0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地　　TEL　0985－36－1171
発行年月日	2008年３月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
諸麦遺跡（もろむぎいせき）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 平塚町（ひらつかちょう） 2937	45202	－	32°1’10”	130°53’22”	20050725 ～ 20060210	4,000㎡	一般国道10号都城道路建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諸麦遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居跡　12軒 掘立柱建物跡　５棟 周溝状遺構　２基 土坑　２基 ピット　多数	弥生土器 石庖丁 砥石 炭化物 陶磁器	方形プラン基調の花弁状住居を主とする弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての集落遺跡

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第168集

諸 麦 遺 跡

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

２００８年３月７日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985（36）1171

印　刷　有限会社 いろは企画
〒889-1603　宮崎県宮崎郡清武町正手3丁目19-2
TEL・FAX 0985（85）5889